

川柳塔

平成二十九年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八四号



日川協加盟

No.1084

九月号

第23回 川柳塔まつり

と き 平成29年10月7日(土)

開場:午前11時 出句締切:正午 開会:午後1時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成28年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成29年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「おじいさん、おばあさん」 川柳塔社 西村哲夫氏

兼題 「もしも」 鳥取 斉尾くにこ 選

「歌」 兵庫 久保田千代 選

「追う」 愛知 早川遼行 選

「ブレーキ」 青森 福士慕情 選

「時間」 番傘川柳本社 主幹 田中新一 選

事前投句 「魚」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭 幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎呈 記念品

《懇親宴》

と き 平成29年10月7日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円 先着申込み 130名様

☆宿泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(金)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479

夜市川柳大会

小 島 蘭 幸

久し振りに降り立った堺東駅はムツとする程の暑さでしたが、懐かしい匂いで溢れていました。受付まで少し時間がありましたので、会場近くの喫茶店で一服することになりました。おばちゃんが一人で切り盛りされていて、ホットコーヒーを注文すると大きなカップになみなみと注いでありました。

私の鞆の中の捨てそびれていたペットボトルを目ざとく見つけたおばちゃんは、「それ空っぽか、熱中症になったらあかんから美味しい水入れとくわ」、客は私だけでしたが、とてもあたたかな一時でした。

会場へ着くともう出席者で溢れていました。前日、松江市川柳大会でお会いした新家完司理事長も早々と出席されていました。天笑、月子ご夫妻もにこやかに出席者の応対をされていました。第35回夜市川柳大会、今回が最後ということで、どうしても出席しなかったのです。披露前のアトラクション、月子

さんのフラダンスを見てみると、次々と懐かしい先達のお顔が浮かんできました。

私が初めて夜市川柳大会に出席したのは平成元年の第7回大会だったと思います。家族四人で出席して天笑居に一泊させていただきました。

子よ妻よ水の深さが臍を越す

沈丁の妻水仙の妻わが頬にあり

花だより泊りに来いと書いてない

薫 風

俊 平

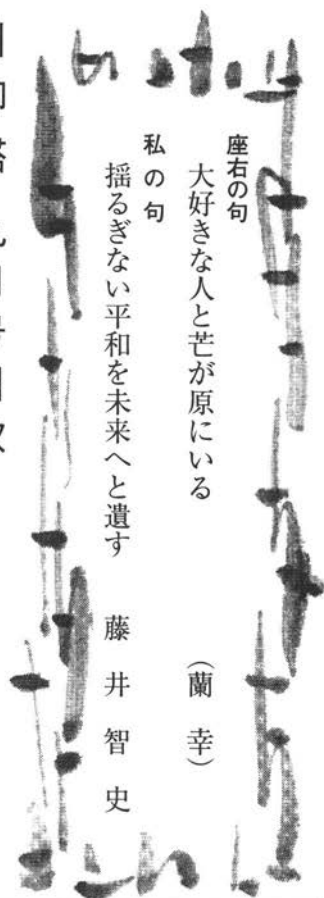
天 笑

記念に書いていただいた色紙です。

第8回大会で私は「泳ぐ」の選をしました。天の句は西尾葉先生でした。あの時の先生の呼名が今でも鮮やかに甦ります。ひょうひょうと佳句を発表されていた中尾藻介さん。「私、蘭幸さんの披露好きです」と言われた小出智子さん。

大会の翌日、私達家族をナンバグランド花月まで案内して下さり、一緒に食事をした天笑、月子ご夫妻の長女陽子さん。当時小学生だった私の長女次女は、二人とも逞しいお母さんになりました。

第35回夜市川柳大会に出席して、歳月の早さをつくづく感じているところです。天笑、月子ご夫妻、長い間本当にありがとうございました。



座右の句

大好きな人と芒が原にいる

(蘭 幸)

私の句

揺るぎない平和を未来へと遺す

藤井智史

川柳塔 九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「京都大原」

■巻頭言	夜市川柳大会	小島 蘭 幸	(1)
熱血漢	山内静水さん	都倉 求 芽	(2)
川柳塔(同人吟)		小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌	(55)	木津 川 計	(45)
自選集			(46)
■ショートエッセイ	カタカナ英語	安 福 和 夫	(49)
温故知新			(49)
水煙抄		川上大輪選	(50)
新川柳鑑賞	(67)	麻 生 路 郎	(70)
英語 de Senryu	(69)	吉村侑久代	(71)
俳風柳多留一二篇研究	51		(72)
愛染帖		新家完司選	(74)
檸檬抄「あっぱれ」		山口光久・斉尾くにこ共選	(78)
橘高薫風句抄			(81)

熱血漢 山内静水さん

都倉 求 芽

昭和30年代半ばのころ、駅に徹夜勤務をしていたある非番の朝、永尾英断さんから電話が入った。

「今日、水客さんらと一緒に竹原の句会に行くんや、あんたも誘うてと先生が言うてはる」。

突然のことですぐには返事が出なかった。かまわず英断さんは大阪駅何時とかの列車に乗るから、と電話が切れた。用意もなにもない。慌ただしく身ごしらえだけしてその呉線回り広島行に飛び乗った。車中には水客先生、萬的さん、白溪子さん、杜的さん、英断さん、みな大鉄川柳の先輩方である。聞けば今日「竹原川柳会」発足の句会だと。車内で兼題など聞いたと思うがまだ駆け出しの小生など、そんな環境でおまけに徹夜明けの身で作句など出来るわけがない。そして眠い。どうにか句は作ったと思うが全く記憶にない。

竹原に到着。会長は小島蘭幸主幹の巻

一路集（「試す」）
「センス」

初歩教室「充電」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

せんりゆう飛行船^⑧

インスピレーション・ナビ 印象吟

追悼 和香ちゃん、ありがとう

追悼 平嶋美智子さんを偲ぶ

八月本社句会

句会燦燦

各地柳壇（佳句地十選／中居善信・金子美千代）

九月各地句会案内

柳界展望

■編集後記（ひとこと／宮崎シマ子）

松山芳生選……………(82)
酒井紀華選……………(83)
居谷真理子……………(84)
福士慕情……………(86)
福西茶子……………(88)
新家完司……………(89)
大西泰世……………(90)
川上大輪……………(92)
川端一步……………(93)
弘津秋の子……………(98)
朱夏・まつお……………(116)

座右の句

葦の倒れる角度で私佇ちつくす

私の句

保護色をまとい私を見失う

（操）

池田 たか子

頭言にしばしば登場する山内静水さんであつた。挨拶、力のある広島弁に圧倒された。職場川柳しか知らない小生は驚きの連続。句が抜けたかどうかとも記憶にない。句会が終れば当時の交通事情のことだから周辺の見学もしないですぐ帰りの列車に。

その後静水さんは大阪に転勤されて大鉄川柳のメンバーに。親しくしていたが間もなく広島に戻られた。

大鉄川柳の折りの句が同会30周年の合同句集（昭和38年）に入っている。

よくよくの事 善人が役を退き
本当の暮し嫁いでから解り

家中を光らせ師匠ひとり住み

ラブレター雨の降つてることも書き

呼んでいる声がともに電話口

また50周年合同句集（昭和58年）にも
ご好意で寄稿いただいた。

何くわぬ貌で止まっていた時計

鍵すてた日からこころの鈴が鳴る

だれも手を出さぬお菓子の蠅を追う

ひとすじに生かされ未完のままでよし

夫婦相い和して百まで踊らんか



小島蘭幸選

大阪市 栃尾奏子

目立たないよう私は美しい
これでもか愛は激しいスコールド
振り向いてしまったうなじから女
抱かれても私のままで居られるか
向日葵よまだサヨナラと言わぬよう
偽りのリングを投げた高い空

大阪市 川端一步

命ある句が出来ぬまま星を見る
悪政の怒りも混じり豪雨の禍
枝豆とビールで非核ばなしなど
すみませんごめんなさいが口癖に
周五郎静かに読んで涙ぐむ
洪々に出した源氏に値がつかず

札幌市 三浦強一

川柳が好き好き好きで生きている
川柳がどう思おうと君が好き
またですか辞書に噛われてる漢字

指笛の鶯を聴く春の寄席
ダイケアの塗り絵に夢中子に還る
一強の驕りへ民のブーイング

笠岡市 藤井智史

ぐずついた天気を晴れにする見合い
皺くちやになろうが君は僕の嫁
助手席の笑顔の君を守りたい
恋祭り太鼓の音が早くなる
君に逢える日は全て大安だ
年内に愛しき君をGetする

沖縄県 森山文切

眠いから眠る田舎の信号機
プライドを削った跡がある机
叱るのが苦手な父の手酌酒
プライドが市松模様から浮かぶ
糸くずにされてしまった赤い糸
9七歩藤井聡太の夏になる

弘前市 高瀬霜石

父は父子は子 平行線でよし

ウイキペディアなしでやってけるかな君

なにがどうなつて死ぬ人生きる人

長い長いお経 お布施のはずみ過ぎ

某月某日ボックリ寺へ誘われる

突き上げた拳ゆっくり解く九月

大洲市 中居善信

疑えば符号すること二つ三つ

腑に落ちんことへ突つ込むこれが僕

頭から真つ逆さまにこけちゃった

単純明快時代劇には裏がない

なまぐらの刀を抱いて寝ています

大戦がベースとなつてゐる傘寿

長岡京市 山田葉子

プラス志向平均寿命超えてゆく

無理のない食事療法なら続く

あなたにも出来ると聞くと奮い立つ

子の学費払い終えたら第二幕

遠い目をしたね心も離れたね

虫の知らせメール届けてから計報

紀の川市 辻内次根

外間も見栄も奪つていく月日

百グラム当りの値段早合点

チューハイの二缶ほどで取れる刺

正解がありそう少し酔つてきた
ゆつたりとしている甘酒を造る
幸せなお家の墓に花がある

大阪市 谷口 義

恐れ入りますと向日葵真つ黄の黄

そのへんのことは母がよく知つていた

あの駅にエレベーターは付いてない

いろいろとあつておばあさんのパーマ

まだましな方やでと娘が言い放つ

筋肉はもう枯れました以下余白

河内長野市 山岡 富美子

ちよつと良い話に風鈴が揺れる

神つてる友の隣の手暗がり

マイナンバーカード延長戦に入る

こだわりはアールグレイかアッサムか

傘寿でも井戸の深さは分からない

若作りしてもぼろりと歯が抜けた

鳥取市 岸 本 宏 章

多忙ではないが暇でもない老後

体調がいいとコーヒーまで旨い

セリーグもすればいいのに指名打者

ミサイルを飛ばす経費はあるらしい

顔色を変える人だな小物だな

ふがない野党ときには腹も立ち

倉吉市 牧野芳光

油絵の裏から先に見てしまう
向日葵よ迎合はもう止めなさい
今の形を押しピンで止めておく
私の魂を抜く羽根布団
汽水湖の水と日本民族と
パイという文字の向こうにある宇宙

樺原市 居谷真理子

義理だけで贈られてきた胡蝶蘭
しがらみを絆と言えば美しく
あの父母に生まれた子だという矜持
俺は俺ですとミミズは土を食う
貧しさにびったりと合う隙間家具
ときめいて寝よう夢なら逢えるから

唐津市 坂本蜂朗

金婚も過ぎて自信の深い皺
金婚でまた大脱皮したワイフ
じゃじゃ馬も弁えている裏表
いざ出陣帽子に日傘サングラス
子育てを見たかった子は児をなさず
自己主張また確実に軽くなる

鳥取市 両川無限

釣り糸もないのに浮いている地球
忘れたい過去がへらへら従いてくる
しつけ糸亡母のはなしになつてくる

雨の日のバスは無口な人ばかり
刃こぼれを父は黙って研いでいる
糸偏のひとつひとつに母が居る

大阪市 古今堂蕉子

二時間も昼寝夜中に背かれる
鏡よ鏡このばあさんは誰ですか
雨あがり傘持ちように出る気質
さわやかな朝の目覚めに遠くいる
ガソリンが切れたあんみつ補給する
ゆれすぎのブランコでした安倍総理

鳥取県 斉尾くにこ

ストロベリームーンと知った朱い月
さっそうと空耳・誤読・早合点
透明なゆりかごに未来のわたし
昨夜から理論武装をして不安
副作用 感謝のなみだこぼれでる
身につける加齢かわいくさりげなく

香芝市 大内朝子

幸せの道は心で切り開く
気晴らしに出た雑踏の孤独感
アングルを心安らぐまで変える
丸ごとの心を吐ける友が居る
自分にしかわからぬ痛み愚痴るまい
逝くまでに恋に身をやきたい螢

高槻市 片山 かずお

書き留めたことも忘れている左脳
独り居にかけると電話長くなる

脇役の矜持をカスミ草に訊く
遺産分け僕には分けるものがない
楽はしてこなかったぞと分厚い手
物欲が強くて捨てるのは苦手

西予市 黒田 茂代

咲き誇る薔薇にお辞儀をさせた雨
こがね虫お前も薔薇が好きなんだ
スランプのトンネル抜けるのは自分

夜が明ける重い話はもうようそう
翔び回りたいが翼がくたびれた
誕生日祝いに広辞苑を買う

塩竈市 木田 比呂朗

長月に気を締め直すスニーカー
着メロが今日一日のゴーサイン
妻の字でお月見とある予定表
年金ぐらしに暗黙の了解

記憶力抜群でしたホントです
名誉欲まだ隅っこで息してた

豊中市 水野 黒兎

絵手紙にナスやキュウリの跳ねる夏

若者よ10秒を切る風になれ

思い出と一緒に揺れる合歓の花

扇風機ぐるぐる夏が回りだす
炎天下果実は甘さ蓄える
宇宙から見て上下のない地球

鳥取市 坂本 とも湖

シナリオ狂う老舗の跡を子が継がぬ
主人焼く煙よ千の風になれ
人生色々シナリオ三度書き直す

太鼓判押した貴方がなぜ叛く
祭り太鼓の音で千枚田目覚め
煤煙吸って地球喘息持ちになり

八王子市 川名 洋子

玄関にあなたの好きな花飾る
太陽も一緒に食べる露地野菜
米二合炊いてまだまだ旅続く
手で確かめる羽根のない扇風機
野菜高もやし料理の腕ふるう
スマートフォン持たぬ私を誉めている

吹田市 須磨 活恵

日に一度自己流でするストレッチ
ありがとう今日も無事ですお月さま

葉桜に惚ぶ人あり昼の月
几帳面だったあの頃若かった
少しづつぼらになつてゆく私
よしمایشよう愚痴ると福が逃げてゆく

鳥取市 池澤大鯰

はじめてのお使い周囲やきもきす

運試し不運だつても投げ出せぬ

一応はプロポーズして振られてる

毒茸はじめて食べた人えらい

試し描きそれはそれで別作品

鳥取市 奥田由美

至福つて優しい夫といふ時間

勤勉の自負があるのに職が来ぬ

初物は供えと夢の仏様

ブライドが邪魔して長い片思い

三日目の壁が分厚いダイエツト

鳥取市 加藤茶人

ひよつとしてカジノの次は大麻かも

多数決良くも悪くもなる政治

女子会の一步裏では敵味方

悪友と語る止り木武勇伝

斜め読みすれば疑惑の謎も解け

鳥取市 岸本孝子

大病もなくダイヤ婚へと続く旅

「瑞風」が眠つた町を揺り起こす

酒好きですわいいえ両刀使いです

悪事でも言い分けすれば済むトツプ

蛭族になつても煙草止められぬ

鳥取市 倉益一瑤

笑ひ話にしては少々毒がある

年金の歩幅で舞っているのです

大の字で寝るとりあえず今日は無事

石一つ投げて味方を確かめる

草むしりしながら毒を消している

鳥取市 田中天翔

鯛になる夢を抱いて群れにいる

久しぶり雷落ちたしやんとした

どう埋めるこの価値観と温度の差

まあいいかいつもの私取り戻す

あいうべのお口体操きょうも丸

鳥取市 棚田大

もの忘れ増えてきたのは覚えてる

ノーマーク時によつては嬉しいよ

礼服も俺の心に喝入れる

晩酌に孫のとっくり待ちきれん

梅雨もまた感謝の心育て去る

鳥取市 谷口回春子

断捨離で世間と我が家広くなり

怪獣も暮らせばやがて猫となる

苦手です孫の涙と妻の愚痴

先読めぬ道に迷つて悩む爺

政界の常識ですか依怙鼻根

鳥取市 永原昌鼓

座る度どんどん老ける美容室
食欲がまだまだあつて痩せられぬ
連勝が将棋人氣に火をつけた
幸せな家族が集う傘の下
植え替えて四季を先取り花時計

鳥取市 夏目一粹

雨は好きこの世の汚れみな洗う
マイナバー一度使つてみたいもの
どうしようもないの考えるのは無駄
生かさず殺さず良心飼っている
草刈りの跡むら雀よく騒ぐ

鳥取市 中村金祥

墓掃除ご先祖様は見てござる
孫の夢棋士だと聞いてはくそ笑む
アッシーと決めて免許を返させる
侵略はご法度核はもつと駄目
中国もここまで来たら手に負えぬ

鳥取市 平尾菜美

菜園を通し広がるおつき合い
三日癖改めつなくストレッチ
断捨離の決意未だに滞り
目の前の欲に我慢の無理がでる
あの決意忘れた日から自己嫌悪

鳥取市 福西茶子

心経のポリウム上げて熊払い
孫守りの愉快を亡母は味わえず
杖になる約束ゴメン守れない
良妻も賢母も出来ぬまま老いた
短足二本山菜採りはまだ行ける

鳥取市 前田楓花

振り向きはしないがフツと立ち止まる
考えがいつもどこかに突き当たる
人生が重くて沈む時もある
妥協点探れば見える風の穴
若武者の将棋グングン強くなる

鳥取市 森山盛桜

錆の下まだまだ漲るものがある
花束の彼方に孤独死が見える
成つて気付いた丸腰の心地良さ
解かれる事は有り得ぬ縄糸
あの人の胸には鍵穴が二つ

鳥取市 山下凱柳

付度も意向も仮面剥げてきた
暴言を吐いた先生雲隠れ
本心は言葉巧みにすり抜ける
一句抜かれホッと一息句会席
悩むのは生きてる証拠だと悟る

倉吉市 猪川 由美子

安倍一強もついに牙城が崩れかけ
新語続々語彙入れ替えに忙しい
降水確率に一喜一憂落ち着かぬ
めでたいが皇族がまた一人減る
父と妻欠けた海老蔵ガンバレよ

倉吉市 山中 康子

天災を救う有り金はたいでも
嘘誠作り話はもう飽きた
婆ちゃんを鍛える一歳二ヶ月
石浦が勝つと力が湧いてくる
甘えたい亡夫へ笑い投げかける

米子市 後藤 宏之

笑われることを承知で帽子とる
イヤなこと忘れることのうまい人
しゃべらして貰い少しは気が晴れた
純生がいい交ぜものはおことわり
煩惱のままのお経も味がある

米子市 後藤 美恵子

夫の汗家族を守るにおいする
油染む男の爪が頼もしい
声援は強いチームに負けてない
気不味さの空気調整するベットの
見目悪い取りたてトマト味は一

米子市 竹村 紀の治

凡ミスは僕の大事なルーティーン
暑さにも蒸し暑さにも酒と唄
親戚を忘れぬように出る法事
目出度いかどうか九十歳目指す
新しい歯が試される粟おこし

米子市 中原 章子

百歳に向かう環境整った
玄関に郵便受けがでんと立つ
梅漬けを終え来年のことと思う
大声を出さなきゃ口が退化する
説明書生き方ならばきつと読む

米子市 成田 雨奇

とりあえず酒さえ飲めば日が暮れる
砂丘なぞ何回も行くとこじやない
時計に合わせて動けと叱られる
子に何を植えていいやらわからない
クーラーをかけたなら熱い番茶飲む

米子市 吉田 陽子

夾竹桃咲いて祈りの日が続く
みんな朝めざして蓮に逢いに来る
蓮池のトンボは追わぬ子どもたち
ハードルが何もせぬのに高くなる
くたびれた靴だが二足あるゆとり

鳥取県 石谷 美恵子

妥協した筈の心がまた揺れる
意表つく意見肝入れしたくなる
バランスよく手を貸し合っている夫婦
おしゃれにも気品ただよう薄化粧
足腰へ確かに時は流れてる

鳥取県 竹信 照彦

命の水が豪雨になって襲う
山治水を治めてこそその国
今はもう妻が治めていて平和
忖度が下達されてはたまらない
真夏日に共謀したい雑魚である

鳥取県 西谷 悦子

目覚ましに頼らぬ歳になって老い
早く逝った母さんの分生きたいね
小二で逝った亡母に逢えたら甘えよう
火木土の透析日読書の日
花瓶の花がドライになって深さ増す

鳥取県 細田 裕花

天気予報聞いてスタートする仕事
好感度アップ菌切れの良い言葉
さわやかに笑顔ただ今営業中
いつまでも若いつもりでいる仲間
休耕田生かすひまわり植えました

鳥取県 松川 行男

太陽が老後の支え目が覚める
台所出勤時間競ってる
青空がチョッと見えたら気が変わる
神様も人にへつらう世になった
人の知恵神を見ずして核が飛ぶ

鳥取県 山下 節子

金勘定一緒くたにはしたくない
百態の面子で渡る処世術
ゆずり合う気持ち忘れたバーゲン場
待たせるな用意バッチリ出来たのに
パン食に米の価値観ゆるぎ出す

松江市 石橋 芳山

コミュニケーションあっちこちに落とし穴
回想の中から黒は消してくれ
放心の毎日死んでいる時間
誰なんだブログに首を入れたのは
縄文も弥生もみんな丸のなか

松江市 小川 注湖

子ども相撲活気あふれる村祭り
止まることやっぱりあった藤井棋士
うな丼を食べたが元気まだ出ない
あっぱれよスーパードライ出来る足
年金よありがとう寝て暮らせてる

松江市 川 本 畔

椅子の傷もの言いたげな顔をする
回転椅子ゆるりと過去を巻き戻す
ひと滴頬に涙が耐えている
泣くなんて青空の下似合わない
青空を少し引っぱり涙拭く

松江市 藤 井 寿 代

ハートにも言葉のパスはやさしくね
恋はほのかに木洩れ日のマジックで
手探りで進むオンリーワンの道
太陽に嫉妬トマト真つ赤赤
蛇口から一氣に夏が攻めてくる

松江市 松 本 文 子

考えようだ仲間外れという事も
長い一日そして熱帯夜にも耐え
肩貸して下さい 他意はありません
腰が曲がつて地獄まで良く見える
何時止むのか心の中に雨続く

出雲市 伊 藤 玲 子

瓢箪は女 糸瓜は男かも
山法師白く明るいエールくれ
野仏に金平糖の二つ三つ
傍にいただけで平になるお方
夢一つ捨て平凡のおかげさま

出雲市 岸 桂 子

過去みんなつぶして明日の風に立つ
泣き言は言うまい孤独馴れるもの
芽ぶくもの風のイロハを知りつくす
人の輪に支えられての今日の幸
伝統の炎男を眠らせぬ

出雲市 小 白 金 房 子

降る雨へ心を濡らす夜の孤独
神仏一体心に宿る老いの日々
喪の帯のかなしみを解く渦の中
川下に住んで時世の声を聞く
鮎解禁太公望の光る竿

雲南市 菅 田 かつ 子

開店の先着さまに間に合わず
それなりの意欲を持っているポツケ
便りです嫁さんほんに乗せ上手
物忘れふと思ひ出す風呂の中
幸せと思えばみんなありがたい

雲南市 松 本 昌

良き人に出会った病院待合室
合う合わぬ酒は人間性を見る
憂国の志士が欲しいぞ自民党
振り向けば我が人生はこんなもの
子と遊ぶこのしあわせを忘れまい

雲南市 松本 はるみ

晩春やお茶をにこした付けがくる
ひとの命とバントマイムの遠花火
人老いて戦争の日が時折りに
つくばいに生んだ子想う川とんぼ
だんだんと記憶うするそれもいい

島根県 伊藤 寿美

歎異抄^つ亡^ま夫が読んでた朱傍線
しきたり守る老いた姫です城主です
こんなにやく問答してる白寿の金屏風
ヒアリ上陸マスクをしても防げない
天井棧敷捲る修司の歌集読む

岡山市 工藤 千代子

なんでかな なんてだろうがまだ続く
七夕送りBGMはさだまさし
瑣末だが廊下に鼻をまた落とす
本物の歯で囁んでいるスルメ
骨のある女で右手閉じたまま

岡山市 丹下 凱夫

ポプラの綿毛が舞うよ札幌よ
さつぱろのカラス鳴き声まででかい
汗掻いて右脳が機嫌よくうごく
歯科眼科内科受付けみな美人
わたくしのまわりはみんな飲んだくれ

岡山市 永見 心咲
美魔女ともモンスターとも手をつなぐ
桃缶は第二素材として棚に

ブーム到来老化防止の焼バナナ
伝言はフルーツボンチ冷えてます
レシートも長々帰省待ち兼ねる

岡山市 藤成 操江

ほろ苦し妥協した日の缶ビール
絆にも大小あってどう老いる
無為無策だらだら続く梅雨の中
美辞麗句その手に二度と乗りません
歳月が薄めてくれる喪の痛み

岡山市 前田 恵美子

時々味の研究外で食べ
降るように縁談あった昭和の日
背広着て昔の顔に夫もどる
注意しても御節介癖すぐのぞく
熱帯になったみたい豪雨降る

岡山県 池田 たか子

おじぎして待つ花達に詫びて水
からす鳴くドクターヘリの無事折る
つゆくさの真青すずしい風になる
さわやかに変身しよう半夏生
夾竹桃庭に平和を願ひ咲く

岡山県 高岡茂子

酌ぐほどにコミカルに話す博識

たのしくてやさしくてつい酌いでいる

日頃の無口裏をかえしているお酒

修業が足らず飲めない酒の瓶ながめ

子等巣立ち残されてみて認め合い

岡山県 田中 恵

ここだけのお喋り会と言う綻

近道をすれば危ない橋がある

茶番劇互いに主役演じきる

恙無し静かな夜とお星さま

立葵天まで咲いて梅雨明け

岡山県 山 縣 のぶ子

今朝の窓一直線に夢ひらく

子のパワーすかっと夏に衣替え

かと言って元の鞘には収まらぬ

まあいいさ生きる努力は怠らぬ

腹据えて蟻の社会を見届ける

広島市 岸 本 清

三世代まとめる妻のど根性

ユートピアへ行つて来るよと居酒屋へ

素うどんと決めてはいるがメニユー見る

安倍総理もはや裸の王様に

取りまきもうそぶく殿の一大事

竹原市 石原淑子

母を恋う十七回忌こぼれ萩

労られ杖が消え入りそうになる

目配りの上手な君と居る安堵

核ミサイル海の慟哭鎮まらぬ

おお痛い可愛い孫が反抗期

竹原市 岩 本 笑 子

揚羽蝶山椒植えて待っている

握手したガンが目覚めぬようそっと

生真面目な夫の運転黄信号

まんまるく画いたつもりの自由帳

良いこともあった葉は十個飲む

三原市 鴨 田 昭 紀

夕暮れてやっと自惚れから覚める

小石にも躓く過信したシューズ

職退いて路傍の石になる余生

将来も約束されている驕り

勝ち組の方へメガネの度を合わす

宇部市 平 田 実 男

百歳の長い休肝日はいらぬ

秘蔵っ子へ総理は足を引っぱられ

親の目と防犯カメラにも死角

頑張れと言われ力が出なくなる

親友を悪友にするネオンの灯

防府市 坂本加代

早く早く鎮めてほしいこの不安
仏顔欲しいものには目が光る
夜が明ける猫に手枕動けない
生け花のはかない命愛おしむ
わたくしに七色の雨降りそそぐ

東かがわ市 川崎ひかり

挫折した場所が私の始発駅
笑おう笑おう笑う仲間が増えてくる
天の邪鬼自分の中に居る他人
愚痴ってる間も生命減っている
自分史のページ彩る五七五

松山市 栗田忠士

まみどりの五月一気に駆け抜ける
笑っていても涙の跡が透けている
ステテコの父子で囲む夜の膳
蹴いた石にも微笑みを返す
鬼百合の名がオニユリは好きでない

松山市 宮尾みのり

法律は戸籍を汚すほど非情
少年の飛躍五輪を視野に置き
十四歳藤井四段もうちの子も
愛ちゃんのオメデタニユース気も和み
やっかいなお人にされる深情け

高知県 小澤幸泉

七十余年行方知らずの父母さがす
その話裏があるかとウラを読み
去る時がそこまで来たと眼が覚める
待つことを忘れたように歩き出す
今朝もまた訃報が届く眠い床

唐津市 山口高明

真心をあげておとこの嘘を知り
やさしくて蟻一匹もつぶせない
水鏡おんなは髪へ手を添える
奔放に柀目こぼれる君の文字
香典の中身相談する姉妹

熊本市 杉野羅天

淋しさのてっぺんで君は微笑み
紫陽花が青く私を落ち着かせ
歯を没す年になったと孔子言う
口ぐせにあと十年は生きまへん
梅雨明けず台風様という異変

熊本市 高野宵草

補聴器を外し新聞読み耽る
疲れない暮らした敬遠エレベーター
ドライブの景色に魅入る隠居の身
劇場の涙で今日も幸貰う
テレビから現世の暮し教えられ

熊本県 岩切康子

諦めて気楽になった自己満足
夢の島希望叶って船に乗る
塗り薬医者で異なる使用量
見舞札に米30キロを戴いた
梅雨前の玉葱ですと愛貰う

札幌市 小沢 淳

上昇志向僕の心と豆の蔓
延命は不要と今は言っておく
母の日はアジサイ父の日はお酒
原子炉を作り制御に悩んでる
改革と言うと希望が湧いてくる

黒石市 相馬 一花

人生は今日も昨日も初体験
転んでもすぐに立たずに策を練る
北国は今日も明日も暑すぎる
今日も口腔体操やり通す
詐欺の真似した警官も苦笑い

弘前市 稲見 則彦

縄電車爺と婆には無料券
雑学のためだと言って路地の裏
癒されるはずの海だが荒れている
ご機嫌が斜めの妻と聞く落語
日本語の会話聞こえぬ観光地

弘前市 岡本花匠

サクランボ狩り青空も食べ満たされる
我が庭木剪定終えて衣裳替え
ラベンダー花刈り終えて秋の陣
卒寿坂蔵書を贈り身構える
雨降らぬ空に願いのりんごっこ

弘前市 今 愁女

満月が照らす豪雨の爪痕を
あじさいの葉裏で虫棲み家とす
ロンドン・パリも行けずテレビで世界街
カッコーの初音に朝の清清し
「記憶にない」調法便利日本語は

弘前市 須郷井蛙

蜂さんに学べ備蓄の蜜がある
カード買い預金の底に穴が見え
アリガトウ最後の言葉握りしめ
合格はしたが車庫入れ50点
旅三日体重計が語り出す

弘前市 高橋 洋子

シャッター街町の文化も消えました
イヤリング耳にとつては要らぬもの
親ゆずりあれもこれと似る老化
ケアホーム拘り捨てた花の旅
笛吹けど誰も踊らぬこの猛暑

弘前市 富士慕情

線香の薫りが好きなお仏壇
叩かれて歪な音も出す木魚
真夏日に西瓜の絵手紙が届く
満腹の岩魚それでも餌を喰う
怖いもの知らずに遊ぶ雀の子

青森県 松山芳生

澄み切った空へ綿毛と遠出する
半眼で見ればわが家はすべて愛
わたしを宥める薄むらさきの老後
チンドン屋が過ぎると祭りの彩になる
菩提寺を訪ねて過去を慰める

男鹿市 伊藤のぶよし

夕日が沈む今日は今日だよ亦アシタ
何時もです花には感謝お礼肥え
警策の音が気になる初座禅
三途の川サツとのぞいてまだこの世
抜け殻のかたちに託す蟬しぐれ

さいたま市 星野育子

猛暑日が続いて引き籠りの日々
時計廻りが通じないデジタル化
他愛ない言葉を交わす散歩道
ライバルの大きな声が止まらない
夕焼けはひとりになったかくれんぼ

東京都 川本真理子

亡き友も夏には白いワンピース
弱虫に吠えたてられて吠え返す
今度こそ蝶になろうと脱皮する
五〇〇ピース今の自由を満喫す
ここにもどる 家族で住んだ町だから

横浜市 菊地政勝

干物にもなれず猛暑に耐えている
裏おもて読み判断に遅れとる
反省の言葉空しいくり返し
ブレーキがきかぬ加速の物忘れ
あるがまま流れのままの終い方

富山市 島ひかる

諸行無常ポトリと落ちた沙羅の花
倦怠期わたしもあつたなと思う
労りの言葉だんだん多くなる
グルメ追う果てはやっぱり家の味
難民を思うとグルメなど言えぬ

可見市 板山まみ子

案内書通りに行けぬ登山靴
意地だけで登る額に玉の汗
動かない足をさすって湯の香り
駄駄こねるスマホをあやす老いた指
ご当地のラーメン食べて旅の締め

大山市 金子 美千代

市民大学試験ないから受講する

シュークリームジムの頑張りバーになる

この忠告受けてやっぱりなと思う

嫁さんにほめられ漬ける梅5キロ

念入りの掃除しばらく遊べそう

大山市 関本 かつ子

つくづくと長い買わないコマーシャル

姿見にOK貰う夏帽子

来年を待てぬ金婚旅プラン

ラケットに当たる錦織似合わない

交際費だけは削れぬ余生表

愛知県 早川 遡行

ひとりでもすることがある詰将棋

働き損だった使い捨てだった

八十になっても減らぬ酒の量

その気持分かる分かと酒を注ぎ

あの人も逝ったか寂しくなるばかり

京都市 清水 英旺

饗宴のあと殊更に人恋し

実務派で僕より偉い妻である

円満なツバメ一家のマイホーム

老妻と時間が止まる午後のお茶

一時間ノルマを課してウォーキング

京都市 藤井 文代

恥を晒し出したら角が融けだした

老体に鞭打つなんて気力ない

逃げ腰を歪んで映す水溜り

角も邪心も取ってくれそう丸い月

心の窓開けて広げて読む空気

京都市 榎本 宏子

遊ぶため体力作りジム通い

生きる力ときめき色をプラスする

きれいな事並べる友に車間距離

家事よりも楽しい事が多すぎる

リボン取りデザイン地味に娘のお古

京都市 三宅 満子

元号が変わる私も変わりたい

寒い暑い年中言い訳家事掃除

根皮葉も食べて大地に感謝する

新聞は食欲失せる記事ばかり

高齢者とひとくくりするのはやめて

八幡市 今井 万紗子

病癒え明るい兆しなく粉溶く

明るい人やっぱりプラス志向だね

春ラララ急に饒舌になつてきた

枇杷たわわスズメもハトもよつといで

婚活ツアー姉の御下がり恋実る

中流で豊かと自分騙しとく

大阪市 井丸昌紀

三日三晩煮込まれカレー神になる

爛が付くまではひたすらスルメ裂く

歯車ふたつどちらも右に回り出し

痒くて掻くのか掻くから痒いのか

大阪市 内田志津子

たし算もひき算もない私のくらし

杉木立頂上目指す老い二人

初生りのゴージャ供えて祖と話す

叩かれた夜にメールが届く愛

座禅組む焦る心を鎮めつつ

大阪市 宇都満知子

蛭狩り孫といっしょに行く温さ

スローな暮し追い越すように時が経つ

トッピング楽しんでます冷奴

帰宅後は何よりごちそうですシャワー

ポイントカードレジでもたもた すいません

大阪市 江島谷勝弘

気まぐれに川柳始め泥沼に

生ビールわたしにとつて力水

スマホさえあれば要らない電子辞書

好きだった女先生元気かな

大好きな鰻と少し疎遠中

鉛筆と紙の用意が間に合わず

UVカットしつかり塗ってネタ捜す

食べてるか変わり無いかと子のメール

つり銭は残ってないか二度三度

権利書と通帳だけは離さない

大阪市 榎本舞夢

愛染祭夜店出揃う灯がともる

宝恵駕籠の掛け声うれし玉の汗

荒川の桃狩りたのし梅雨晴れ間

晴天で路郎忌句会無事に済み

五輪まで明るいニュース盛り上げる

大阪市 大川桃花

監視カメラ避けたら犬に吠えられた

腑甲恙無い自分に叫び喝入れる

筋トレの中に食事が入ってる

あなたに会えたことがわたしの宝物

知っている人の計報が立て続け

大阪市 大治重信

諸肌にタオルをのせて冷奴

母の忌や色の変わった梅の酒

ざんぶりと天に向かつて水を打つ

潮時と思った時はもう遅い

このプラン家内が聞けばどう思う

大阪市 奥村 五月

大阪市 坂 裕之

もの言わぬ父が最後にありがとう
金の事言わず土用はまず鰻
遠慮せず社の愚知零す縄のれん
島国で戦も知らず七十年
墓まいりさえも遠退く里になる

大阪市 笠嶋 恵美

先輩がさらりとくれた言葉しむ
思い出し電話をくれる人の有り
まだ惜しい花しょうぶ園最終日
生キャベツ食前菜のごとく食べ
御近所のめでるアジサイ愛想する

大阪市 小谷 集一

誠実に生きて鈍感力磨く
この辺で野心捨てると楽になる
第六感衰え人は丸くなる
この指に止まった妻をいとおしむ
永遠の愛誓う調べか蟬しぐれ

大阪市 近藤 正

付度の沼から足が抜けません
欠陥機高値買取り自衛隊
大惨敗逃げ足はやいアベ総理
少年棋士天馬の如く駈け上る
九条が光り改憲あらずさり

ダダこねて可愛く見えるのは幼児
はつきりと断ったのが良かったか
やんちゃして気を引くような歳じゃない
穏やかに話したつもりだったのに
とりあえず真っ直ぐ行つて様子見る

大阪市 田浦 實

朝ドラを脇役見事盛り上げる
将棋会館近所も急に好景気
五千歩の褒美は昼の縄のれん
床屋だけ月一ちゃんと守つてる
百歳より今日一日を切に生く

大阪市 津村 志華子

八月の空ざわざわと千の風
長生きをしすぎて友が居なくなる
外見も恥もさらけて生きている
サングラス掛けて卒寿が魔女になる
腰を叩いて手足さすつてどっこいしょ

大阪市 寺井 弘子

カラオケの中で昭和の空気吸う
遅咲きの花に乾杯涙ふく
老々の介護日記の泣き笑い
適当に手抜き夏バテ防がママ
年輪のよう百歳の笑い皺

大阪市 寺本 実

身に覚えあつて反論控えてる
丸い背の二人寄り添い支えあう
エプロンをつけて張り切る妻の留守
賞罰はないが病歴なら豊富
検診の終つたあとはまずビール

大阪市 原田 すみ子

ワンコインコンサートはバリアフリー
納得のいかぬ事多々さかまつげ
グルメ旅見ながら一汁一菜
欠点弱点やつかいで愛しい
長生きの犬は表彰されたけど

大阪市 平井 美智子

淋しい人の淋しい嘘に貸した耳
ふと思う昨日の私今日の君
お福分けですと配っている笑顔
気紛れな神から貰う当たり札
鳥になる準備済ませて梅雨の明け

大阪市 平賀 国和

靴ひもを固く結んで老いの坂
食べて寝て笑い夏バテ防止する
おばあちゃんお肉大好き超元気
人生に最初からある運不運
昭和史を忘れてならぬ日本人

大阪市 藤田 武人

金曜はハイテンションの終電車
人間がにんげん色で描く墨
クールビズ上司ネクタイ締めている
真夜中にピコと絵文字のラブメール
自動ドア踏めば仕事の鬼となる

大阪市 藤原 千恵子

話したらとてもホットな人でした
バイキングまだまだ友等よく食べる
オフシーズンだからこそ行く観光地
静静と心は子供頼つてる
酒と米断つて何追うジム通い

大阪市 升成 好

漢字では書けぬ訛りにある温み
方言のキャッチボールは菌切れよい
人生のサイコロをふる二度三度
生きて行く目盛りは父と母の歳
思い出を引きずり迷路抜け出せぬ

大阪市 吉内 タカ子

この夏は昭和の汗が思い出る
日曜日ぐらい気楽に乱れ髪
コウコウと鳩の恋い鳴き昼寝時
継ぎ接ぎの好奇心でも持ち歩く
アジサイと笑い合えるも内の庭

大阪市 若本安代

スマホ閉じ目に焼き付けた茜空
御洒落より着易さ軽さ履き易さ
ほっとする使い古しが落ち着ける
支援金一番小さな子の箱に
昭和なの昔の人ねおばあちゃん

堺市 柿花和夫

ちぐはぐな御洒落が老いを支えてる
豪華列車の陰で廃線泣いている
支離滅裂に終止符を打つ多数決
鰻と鯖の違い教えて嫁がせる
自由には生きては行けぬ梨園の子

堺市 加島由一

美女連れて大洲脇川鵜飼い舟
鮎になり鵜になりくだる川の声
寅さんもこの町に來た大洲城
まだ続く小さな夢を果たす旅
フーリング女神も僕に惚れている

堺市 源田八千代

炎天下働く蟻も見逃せず
罪のない子に罪な事する世相なり
元氣でもモーニングコールしてくる
オリンピック目指し団結東京都
川柳は生活記録日記帳

堺市 齋藤 さくら

一段と暑い大阪里帰り
買い物は済んだスーパ一ひと休み
汗が出る以上にお茶を飲んでいる
野菜肉順番どおり食べてない
早朝の蟬に元気を貰いたい

堺市 坂上淳司

付度はあったと思う民の勘
面舵一ぱいキャブテン安倍の日本丸
一強に伍する野党よ蘇れ
二刀流の復活を待つファイターズ
断捨離の先ず一番は酒の量

堺市 澤井敏治

近道に工事札あり秋の汗
真実から出た嘘もある夕茜
通過するローカル駅の遠花火
夕焼けの八月の空終戦忌
エンドゾーンまた延びてゆく長寿国

堺市 遠山唯教

夏本番ひごろのリズムくずすまい
もてあます庭にやさしい花の色
なみだもなく最後になった同期会
頑固だが妻のみやげは忘れない
いざという刻の別れにたじろがぬ

堺市 内藤 憲彦

孫が来る上等の肉食べられる
尻尾切り上手に出世されますね
大声で値切る妻には距離をおく
内科歯科眼科耳鼻科と綱渡り
もう今は家内安全だけ祈る

堺市 矢倉 五月

ひとり入れひとり味合わたる新茶
ちよつと手を入れて着ている古い服
認知症予防の記事が山となる
先が見え出してゆつくり深呼吸
ラストラン着順なんぞ気にしない

池田市 栗田 久子

未曾有の雨被災の人の身を憂う
蟻んこに猛毒なっている童話
ひかえめに鉢のゴージャに小さな実
つりしのぶ吹く涼風は身の癒し
一人居の一日今日も無理はせぬ

和泉市 横山 捷也

長梅雨の家の匂いに亡父が居る
一日中音を出してる妻と居る
一病で気持ち優しい人になる
善人で通す勇気が失せてきた
大声で言えば納得してくれる

茨木市 島田 誠一

おしゃべりな地物が集う道の駅
出世欲絡んで軋む永田町
救急車停まった家をボーッと見る
老けたなと心で思い合う句会
不文律分かり出したら座が丸い

茨木市 藤井 正雄

延着証明並んで遅刻倍にする
気まぐれに見えて祖母には祖母の道
財もなく借金もなく独り酒
妻連れてサンデーゴルフ河川敷
帰省して小学校を描きに出る

貝塚市 石田 ひろ子

枇杷の実の無くなる頃に鳥も消え
雑草の花太陽と勝負する
嫁さんを味方に付ける老いの知恵
ショッピングカー颯爽と婆スーパーへ
L寸のだんだんMが合う体

河内長野市 植村 崑代

実習生ががんばっている次の看護婦さん
入院中人生いろいろ考える
いろいろあったけど何とか生きている
野際さんさみしいね遠いファンです
思うようにいかないのはこの世かも

河内長野市 大島 ともこ

飢餓に備え脂肪ため込むマイボディ

貴方だけには見せない顔を一つ持つ

努力家ね人は私を買い被り

遺言は墓前に旨い酒頼む

遺言が気になる通夜の探り合い

河内長野市 梶原 弘光

分捕った歩が成金になる妙味

北の核悲観楽観弥次郎兵衛

ネットメール見るとケータイメール来る

赤っ恥大いに掻こういざ余生

ステーキの後偉そうに浅漬けが

河内長野市 木見谷 孝代

ルビー色手間ひまかけたプラムジャム

大皿に手料理盛って子らを持つ

全力を傾けられたのが誇り

ギシギシと老いのパーツが悲鳴あげ

柳誌読み待ち時間さえ苦にならぬ

河内長野市 黒岩 靖博

だからと終活準備進まない

しぶ好みモノクロスーツ似合う妻

ちぐはぐな会話で暮らす夫婦仲

本当は一人で寝たいセミダブル

花の都テロ爆発にゆれている

河内長野市 谷 久美子

素っぴんをべっぴんさんにする鏡

家計簿が赤字続きで揺れている

損得で揺れる女の計算器

名を呼べど拉致の娘いまだ海遙か

弱虫も癪癪持ちも居る我が家

河内長野市 辻村 ヒロ

ひとりという気儘さに馴れ茶を啜る

てにをはに遊んでもらう好奇心

まだまだと何かを期待生きてみる

雨の日は乙女に戻り午後のお茶

弱音などみせぬ昭和の女です

河内長野市 藤塚 克三

妻は根っこふらつく俺を支えている

発泡酒では憂さを忘れる酔いが無い

路線価が下がるとお酒減らされる

日頃の見栄かなぐり捨てての掴み取り

不都合を水に流せば汚染する

河内長野市 村上 直樹

喜寿米寿兄妹四人揃い踏み

こまごまと遺書に書くほどカネはない

囲む会ささえ続ける名幹事

一隅を照らせなくても溝掃除

紫陽花の涙はたぶん蜜の味

年金の器の中の衣食住

河内長野市 山室光弘

隣国の軍靴の響き背が寒い

老いてなお彩り豊か趣味多才

瑞風にのりたくて買う宝くじ

変り身の早さも生きるテクニク

岸和田市 岩佐ダン吉

大勢は決まるそれでも黙らない

惨敗も私にとって無ではない

無に返れ気楽なことを言うてくれ

八月の空は今でも燃えている

汗流す道だ裏切ることはない

岸和田市 宮野みつ江

豪雨禍の地域に住まう友案じ

避難所に母も一緒と友メール

二十年ひとり住まいの過ごし方

昨日の豪雨と今日のこの酷暑

雨の軒またの抱卵する燕

岸和田市 雪本珠子

百歳の母の笑顔に癒される

リラックスし過ぎて脳が作動せず

雑談で自然と心ほぐれだす

人情味あった昭和を懐かしむ

いつからか体内時計狂いだす

マニユアルに添って電源からそり

あれもこれも憶れたまま閉じてある

計算が合わぬが覚ええない財布

早とちり多目に読んでいた味方

末席からぎりぎりだつてパスはパス

吹田市 太田昭

鍵一本探し出すのに辞書めくる

目的はないが包丁研いでいる

窓際に坐りの悪い椅子がある

「愛してる」強い絆の別れ際

鉛筆を削り直して明日を書く

吹田市 木下敏子

日曜日電話をくれる友がいる

休まずにラジオ体操今朝も行く

美しく老いるためとする努力

昭和の歌聞いてうとうとしています

カラオケのマイク持つ手の震度三

吹田市 野下之男

愛してる僕も言いたい妻の顔

おなじみの俳優みんな年をとり

岸壁の母の銅像いつ迄も

あの人と同じものの食べ良い気分

一年生二階廊下がこわかった

高石市 浅野 房子

天災になすすべもなし胸いたむ
テレビ見る怖いと思いつつも見る
神様に祈るしかない高齢者
いいことがありますようにただ祈る
何もかも思うようには行かぬのだ

高槻市 井上 照子

気前よく引き受けあとで困つて
ライバルの鋭い目を見た試合の日
熱中症とても気になる球児達
若作りしても手の皴顔のしわ
生き過ぎて日かげさまよう今日も又

高槻市 島田 千鶴子

勝つつもり三週間の癌退治
夫と娘ほんやり見えたああ生還
術後二日愛想笑いも出来ません
点滴を抜くナース天使に見えました
マンネリの日々に戻れる有り難さ

高槻市 初代 正彦

窮してもじたばたしないキリギリス
世知辛い世のすくすく育つパンダ
孫たちの宇宙育む反抗期
従順なマウスと遊ぶ小宇宙
忘れっぽい私の秘書ですスマホ

高槻市 杉本 義昭

春の陽が今朝の命を呼び覚ます
春風にスキップしてる赤い靴
手を上げて存在感を確かめる
初夏の風ためらう背中ボンと押す
うどんつるつるこれからきつとうまくいく

高槻市 富田 美義

平然を装う耳へガン告知
錆付いた脳へ孫子のメール便
風豊か床を彩る京料理
箸二膳揃えて今日も恙無し
子供等は意外な事も知る祭り

高槻市 富田 保子

みそ汁の中に昔の父がいた
逆転のチャンスあるあるヘソクリで
信念を持って20年旬友達
ブライドを忘れカラオケ露天風呂
貯めるより遊びたかった主婦の声

高槻市 原 洋志

個人差があつてサブリに罪はない
行列の至る所にある平和
病名をたびたび変えて生き延びる
馴れ初めは駅のスマホの忘れ物
レガシーともつたないがせめぎ合い

高槻市 松岡 篤

謝罪など墓前でしてももう遅い
ポケットに妻が持たせた軍資金
近頃は男にもある鼻濁音
サブリ効果個人差ありと抜け目なく
ベットにもダイエツト要る超平和

高槻市 安田 忠子

庭一面紫となり梅雨晴れ間
自転車の固まりが行く通学路
舞妓さんと七軒茶屋で夢ごち
キュウリ植え子供のように可愛がる
この歳で蚊も殺せない虫嫌い

豊中市 池田 純子

バアバにも友がいつばい保育園
自然光モノも私も生き返る
完璧と思えた人に泣き黒子
鈴付けて自分の居場所確かめる
父母が待つてくれてた夏が来る

豊中市 上出 修

ジム通いお腹の肉はまだ立派
トロウニアワビ舌蕩けそうでも時価だ
茶化す癖誰も相手にしなくなり
触れただけ変わる画面に腰引ける
フランスパン菌の老化度をチェックする

豊中市 藤井 則彦

失言にはふと本性が垣間見え
忘れてることも幸せかと思う
お互いに虫干しをする金婚日
巨神戦見るたび裂ける夫婦仲
あつさりと別れたはずが夢に出る

豊中市 松村 里江

七キロもやせて指輪もずり落ちる
スキップが出来ればしたい退院日
まだ女ハリツヤ戻す化粧品
脈々と命つないで良き家系
同好の友と川柳命綱

豊中市 松尾 美智代

手を合わす仏の前で愚痴らない
積んできた物少しずつ崩れ出す
何もない誕生日だが夫がいる
葛餅を孫からもらう誕生日
先輩の横に座って気をもらう

富田林市 片岡 智恵子

くじけないで生きるしかない雲流る
ぬくもりを仏に貰う鉦を打つ
人間味仰山持った雑魚の群れ
あしたより今日の若さへ湧く勇氣
心の温い友と出合えたボランティア

富田林市 関

よしみ

シンプルで心のゆとり持つ暮らし
受話器から極上の虹が来て夏
たわいない話の中に見るヒント
柵を捨てたらわたし生き返る
捨て石がじんわり効いてきて安堵

富田林市 中井アキ

終活と煽られおたおたしてしまふ
通販で独りぐらしは足りている
コンパスの許容範囲にいる安堵
草笛のあの日に戻る想夫恋
もの忘れふえ恙無く老いている

富田林市 中村 恵

ちっぽけな自分しみじみ地平線
合掌は神の死角であれ続く
残酷な老い自尊心まで揺らぐ
約束を結んだ小指枯れてゆく
頑張った私が貰う胡蝶蘭

富田林市 肥山一文

テロが増え世界の恐怖まだ続く
定年後フリーに空を飛んでいる
終電車いつもの顔が二三人
この駅でいつもの人がもういない
ユーモアで楽しく生きる白寿まで

富田林市 山野寿之

ジーンズの歩幅踊って風は初夏
口を出る言葉ひとつで幸不幸
美しい嘘もまっすぐ抱き締める
独り立ちしる風船の手を離す
少年の夢を育てるブラモデル

寝屋川市 籠島恵子

任されて青色吐息梅雨最中
溜め息を洩らしてしまふ半夏生
おサイフに入れる算数の答
春になればの話猛暑にやってきた
これでいいこれでいいんだと年齢

寝屋川市 伊達郁夫

一坪の庭に私が咲いている
もう少し舞台で馬鹿を演じます
定年の顔をしている散歩道
私を斜めから見る私の目
残り火を集めて咲かす夢火花

寝屋川市 富山ルイ子

初めての西瓜毎朝声かける
ながーくして胡瓜一本づつあげる
ミニトマト今朝採りですと少しづつ
自家製のなすびは鮮やかな紫紺
楽しんで野菜と喋る朝に夕

寝屋川市 平松 かすみ

バラ園のベンチはみんなご老人

目標は白寿と笹に吊します

パテぬよう仏花もお水飲んでる

暑中お見舞い届かぬ処に妹

忘れずに零れ種からゴーヤさん

さくらんぼ少女にもどるワンピース

初蟬が鳴いた日わたし熱をだす

のどごしへ老いなじませて心太

夕暮れて気持ばかりが急くのです

水玉模様草間彌生にしての彩

羽曳野市 安芸田 泰子

迎え火に今夜は会えます若い夫

考えて考えぬいて白いまま

喝采を浴びた日からの他人の目

煩わしい話は梅雨が明けてから

何をしにここに來たのか猫に問う

羽曳野市 宇都宮 ちづる

線状降水帯新たな脅威見せつける

サブリメントに頼ると決めた空の青

古稀でヨガ始め胡坐に四苦八苦

ソムリエにワイン注がれ背筋伸び

こだわりの酒があつて夫婦で違う酒

羽曳野市 徳山 みつこ

日本人だからご飯にお味噌汁

マイデスク血圧計に化粧品

大地裂けても笑いを忘れない花木

薄氷を踏んでひと日を渡り切る

ヒト科の愚行へぶち切れた大水河

田舎出の僕の子供は都会っ子

そこそこの成果でしたとお茶濁す

一強の驕り庶民が灸をすえ

かち割りの旨さ味わう甲子園

猛毒のアリが世界を駆け巡る

羽曳野市 仲谷 真

七夕に大志を抱き政治家に

名古屋まで相撲観戦行つて来る

誕生日杭全神社の夏祭り

ゆかた着た女性は特に色っぽい

朝顔の観察日記した昔

羽曳野市 中川 ひろ介

生かされてベースメーカー恋をする

涼風がページを捲る古日記

予報士より先に梅雨明け蟬告げる

活き締め鰻の反骨指を噛む

小さくて可愛くて毒タコクラゲ

羽曳野市 藤原 大子

東大阪市 佐々木 満作

そこそこもほども慣れ肩軽く

我が庭に咲けばどれもが愛し花

耳澄まし孫の靴音待つてゐる

鳴く蟬に急かされ暑中見舞書く

信じようわたしの心私の手

羽曳野市 三好 専平

死ぬ理由酒にはしたくないと断ち

国会が場末のバーのようになり

一合をふたりで三日かけて食べ

奪うより愛とは捨てることである

だんだんと遠くへかすむ脳の海

羽曳野市 吉村 久仁雄

選び直せというなら君をまた選ぶ

モノは満ち足りてココロは満ち足らず

豊かさを貪りツケは次世代に

レディーファースト身に染みている恐妻家

外人へ老母は笑顔でウエルカム

東大阪市 北村 賢子

早起きを持て余してる老いの日日

せめてもの贅沢まろやかな玉露

監視カメラ顔を背けている素顔

ぬくもりを感じて笑顔とり戻す

堪え抜いた命噴き出す蟬しぐれ

風と会う遠い記憶にある別離

友見舞う病の程度聞きづらく

真夜中の騒音魂が揺らく

非常時の万一手は打ってある

歳一つ足して生き生きバースデー

枚方市 海老池 洋

宙乗りの勸玄君の呼ぶ涙

あっぱれの手本高安稀勢の里

手の位置に注意している満員車

気配りに滲みでているお人柄

犬語猫語と話すしかない独居

枚方市 小林 わこ

嬉しいとまん丸月に母の顔

吉報のよう大きく光る月を見る

はったい粉練つて祖母を懐かしむ

回る寿司今風のネタ孫喜ばす

手作りの梅酒が月と語らせる

枚方市 丹後屋 肇

銃を撃つ女兵に揺れるイヤリング

執念の研究心にシャッポ脱ぐ

せん妄に妻はひたすら耐えていた

炎天下作業ズボンが塩を噴く

鳥肌が立つウインブルドンラリー

枚方市 寺川 弘一

ちぐはぐを完成させる嘘を吐く

開かない窓も存在価値がある

大志と書いた扇子がすぐに売り切れる

恥ずかしながら十四の頃を思い出す

不思議でないよ歳を取らないサザエさん

枚方市 二宮 山久

菖蒲湯の香りほのかな昼下がり

病む右手好きな作句にペン走る

リュック背に過疎化進んだ山歩き

ハーモニカ好きで吹いてる里の歌

健康体若さを保つウォーキング

枚方市 二宮 紫鳳

紫陽花の小径に続く傘の花

人生の余白に咲いた花一輪

平凡な暮らしに弾みつける旅

一生を笑って生きて医者いらず

才能を花開かせるほめ上手

枚方市 藤村 亜成

足裏の遠い記憶砂浜を歩く

記憶の森のどこに隠れている啓示

鉄刺線で締めつけるような嘆き

濃く薄くときに消えそうな影を追う

ポトンポトン蛇口の水滴が泣く

枚方市 山口 弘委智

急ぐほど旅の景色は逃げてゆく

風鈴を二つ吊るして睦み合い

通学路いつも道草水溜り

子の巣立ち安堵淋しさ入り交じる

老二人賭ける情熱的さがす

藤井寺市 伊藤 アヤ子

豪雨の中で清掃をする自衛隊

大変な水害起きてお見舞いを

紫蘇漬けのしょうがの色にほればれと

古くても使い慣れてるこの鞆

梅雨あがる前から暑さ耐えている

藤井寺市 太田 扶美代

邪魔をせぬ覚悟ができたので同居

愛犬に触れると愛しさ手に残る

短冊にこっそりプラトニックラブ

お喋りで軽い憂鬱消している

目と鼻の先は楽しい距離である

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ざんざん降りの踏切の向こうもひとり

カード氾濫みな中流へ背伸びする

挨拶の上手な犬と今朝も会う

かけ離れたボタン戻って来ぬ月日

どうしても逢いたいひとにまだ逢えぬ

藤井寺市 鈴木 いさお

それつきり仏は横を向いたまま

煽てられ褒められやつと前を向く

ドームもいいがやつぱり甲子園でしょう

立ち寄った居酒屋で聞く国訛り

楽になった顔が樞の中にある

藤井寺市 高田 美代子

平凡という豊かさに馴れ過ぎた

海の日や潮の匂いになつかしむ

いろいろと咲いてやつぱり朝顔よ

地酒地ビールそろそろ出来るまつり寿司

あれやこれ過ぎた過ぎたと忘れよう

藤井寺市 増井 ヨシ枝

細くなつた赤い糸だが五十年

五体満足機能果たせぬ悲しさよ

お役所書類難解多くイヤになる

おはようと自慢話がよく弾む

ひい孫によつちやんと呼ばれああ嬉し

藤井寺市 吉田 喜代子

台風は人の絆も切つてゆく

台風一過何事も無く夏野菜

花好きの家に明かりが灯らない

自転車も重たくなつた坂の町

一つ無くし二つ出てくる摩訶不思議

藤井寺市 若松 雅枝

梅雨晴れ間仲良く揚羽舞い上がる

硝子戸に映る私の杖姿

褒められた帽子は白髪隠し用

父母眠る菩提寺閑か木樅咲く

母に似た仏像探す寺巡り

松原市 森松 まつお

浅からぬ因縁のある街に住む

雨やんだらしいスズメの声がする

雑学で広く浅くをモットーに

外は雨丁寧にヒゲ剃っている

体調が悪いと機嫌まで悪い

箕面市 大浦 初音

未来には過去の生きざま現れる

朝一番お日様浴びて深呼吸吸

芦屋市へ引つ越しました 便りくる

口紅に自信の程が表れる

男前選んだけれど娘は似ない

箕面市 酒井 紀華

父の檄座りなおしてまだ続く

あなたにだけ向かつて走る深夜バス

化けるのは恋のはじまりシンデレラ

夕闇に昭和のリズム消えていく

耳痒い吉報入る朝の風

箕面市 出口 セツ子

優しさ匂味わっている野菜

週三は主人は励む壺万歩

優しい子居て幸福と思ふ日々

夫より息子頼りにしています

キャンセル待ちしても船旅行けなんだ

箕面市 広島 巴子

七月の虹はロマンの大アーチ

雨宿り鳥と軒下分かち合う

体温と気温が同じまいったね

家事予定暑さに負けて先送り

ギャル御輿黄色い声もまた楽し

八尾市 内海 幸生

何事も無かったように昇る陽よ

知らぬことたとあるのよ八十七

哲学を学ぶな倅せ望むなら

長生きをしたご褒美かも認知症

嫌いでも好きでもないものたんとある

八尾市 高杉 千歩

物忘れ激しくなつて日々好日

私には未来の話築地再生

いつ何処で会つた人やらご親切

睡眠薬一・五錠朝になる

二十七度設定猛暑知らずに生きている

八尾市 寺川 はじむ

最年少蕾でかした金字塔

空梅雨に合唱いつと待つ早苗

古今東西伝家の宝刀袖の下

うつつうしいニュースふつ飛ぶ孫の声

ど忘れの言葉見つかる夢の中

八尾市 宮崎 シマ子

夜の雨花は精力取りもどし

投函せぬ太郎様へと書いた文

無気力に雲の流れを追う煙草

ゴキブリを叩きそこねた妻の乱

共謀罪私川柳してただけ

八尾市 村上 ミツ子

線状降水帯豪雨容赦ない

熱中症へ塩あめと水持つて

ドッコイショ言つてもすぐに立てません

道端のトマト真つ赤になる平和

あの頃は赤くなる間のないトマト

八尾市 山根 妙子

梅雨わすれ日本美人画展に

日本の語彙も豊かな棋少年

すき焼きが一のご馳走だった頃

粉吹き芋バターと塩でとても美味

星合いの空に多少の願いごと

大阪府 桑田 ゆきの

梅雨豪雨列島襲う恨み節

蛭追い幼の日々を思いおり

凜として雨に咲いてる濃紫陽花

浮き雲のふわり一片黄昏れる

豪雨災列島揺れる熱中症

大阪府 米澤 俣子

新築のケアハウスにも来た燕

雨の日は雨の音聴くお針箱

労られ過ぎる虚しさ気の弱り

曲がりなりにも主婦業をこなす自負

まだともう心の花は涸らさない

神戸市 上田 和宏

四代目の和菓子に四代目のお客

2になれば1+1は平和です

加わると話題が変わる立ち話

宵の猫ひとり歩きが好きらしい

旧友と呑む肴はいつもあの追憶おもい

神戸市 奥澤 洋次郎

叱られている子のいるや夏休み

先送り時間止まってくれもせず

水平線今日をのみこみ陽が沈む

夏祭り今年中止の高齢化

熱中症気になるけれど夏は好き

神戸市 富永 恭子

五時起きで世話したきゅうり食べ切れず

丁寧に気長にそっと果皮を煮る

線香の煙に参る御堂の蚊

住職の恋を見守る檀家たち

庭師呼ぶほどの庭木が無く手刈

神戸市 能勢 利子

もう少し粘りが欲しいうちの孫

客並ぶ店は必ずトライする

外人力士話す日本語バーフェクト

いじめっ子いじめられっ子皆いい子

梅雨晴れ間家事を忘れてバス旅行

神戸市 細川 花門

巻頭の七月号を抱いて寝る

マイペース守っていますかたつむり

全没だ神も仏も留守だった

没だっといういいさ選者も人だもの

滝の音を借景にしてにぎり飯

神戸市 松井 文香

肩の荷のついでにストレスも下ろす

愚痴ってもいいよストレス消えるなら

穏やかな笑顔みせたい病み上がり

シャットダウン再起出来ればホンマモン

しあわせに気付いていないふしあわせ

神戸市 山口 光久

表札へ行つてきますと手を振つて
のんびりと自分サイズの暮らし向き
友だちに右と左がいて愉快
隠したい傷はオブラートで包む
哲学の道へおいでと鐘が鳴る

神戸市 山口 美穂

朝一番脳へお水と糖分を
木洩れ日の下で心を遊ばせる
夢みんなあの世へ持つてゆくつもり
美味しいもの食べたいけれどさて何を
下戸だつて枝豆は好き止まらぬ手

明石市 梶谷 和郎

伸び代がまだある明日の句を煮込む
浅漬けのシャキッと今日の覇氣もらう
半波長ずらせば不思議君と合う
タコ焼きで暑さ乗り切る半夏生
床に臥すたびに幕切れかと思う

芦屋市 黒田 能子

命日にもんしろ蝶が舞っている
痛いねでも替わつてはあげられぬ
コンサート余韻ほっこり帰路につく
あつさりが好き生き方も味つけも
内緒のまままで終わらないのが内緒です

芦屋市 竹山 千賀子

終活ゼミ並ぶ元氣は高齢者
廃屋に記念樹だけが生き残り
荒地地にも四季折折の花が咲く
車間距離あれば友になれそうだ
満ち足りた日は昏に歌がある

尼崎市 市坪 武臣

何事も本気で生きて今がある
品格のあるお顔です両陛下
イエローカードとときき妻がちらつかす
晩酌に妻のお酌で仲直り
趣味一途家族の支えありがとう

尼崎市 加川 靖鬼

住み馴れたところが一番心地よい
子午線を跨いで虹が呼ぶ明石
四天王寺亀のペースで暮れかかる
ゆつくりと夜明け地球の観覧車
傘はもう要らぬそろそろ卒寿まで

尼崎市 藤井 宏造

天辺からまず攻め落とすかき水
蝉しぐれにも慣れてぐっすり昼寝する
図書館にいっぱい眠る夢の素
サングラスでやめてほしいな鼻メガネ
病院と法事しかない予定表

尼崎市 山田耕治

篠山市 酒井健二

嫌われているかと思うほど無口
妻にまだ皆勤賞をやつてない
寝てみても坐つてみても匂が出来ぬ
蚊帳つらぬ暮しトンボもやつて来ぬ
サンマを焼いても清貧にはなれぬ

加西市 金川宣子

篠山市 酒井真由

友引の葬儀参列高齢者
梅雨晴れ間妻は慌てて動き出し
雨の日に以前に貸した傘で来る
新築に同居するのかもしれないのか
妻の喝受けて頑張る病み上がり

川西市 大坪一徳

三田市 足立つな子

社員番号喜寿を過ぎてても忘れない
右肩上がり信じて来た世代
北の核多分ボタンは押さぬだろう
妻だけは自慢話を聞いてくれ
女偏の漢字作ったのは男

川西市 山口不動

三田市 石原歳子

乱れてもマイペースへと戻るワザ
今何時夜中のトイレ妻が聞く
役割は落ちつくところ孫の守り
出来ぬこと諦めたこと数えてる
年一度叫んでみたい馬鹿野郎

越後屋と悪代官はいつの世も
余裕出てやつと哀歌を口ずさむ
ベッピンが座った椅子の温かさ
昔見た夢の景色に立っている
物語描いてあしたの夢を見る
腹の据わらぬお人どすえと手きびしい
にこにこ減多にこころ覗かせぬ
なりゆきで外人さんと祇園まで
睡蓮がひらく浄土の余り風
散骨の海まぼろしのごとくあり
名声が天下に響く夢をみた
病癒え太りだしたら儲け物
御中元はやばや届く限定品
水温む青田の風に頬ゆるむ
見せ場など無い一生で終りそう
美しい稲のみどりは最高だ
健康に一番と聞くみどり色
目の疲れとれてみどりに感謝する
我が家から眺める景色みどり色
健康に過ごしていますこの土地で

三田市 上垣 キヨミ

リハーサル無くても今日の絵が描ける
無事逢えただろうか二人笹まつり

顔色が良いと楽観見舞客

誘われて多分と返事する齡

被爆地の土の涙が乾かない

三田市 上田 ひとみ

我がまを許してくれる歲月と

ていねいにていねいに生きてきた誇り

私の名大きく呼んでくれる義母

昨日とは違うけれども義母は義母

あんたいくつになったと聞いてくれる

三田市 尾崎 一子

震災の絆繋がる支援の輪

私にも出来る祈りの募金箱

母の齡生きてしみじみ里心

三食に感謝の祈りつつがなく

衣替え街は七色恋模様

三田市 北野 哲男

祝福に想定外と言う御礼

農の血か土の香が好き土踏まず

湿り気が快適と言うカタツムリ

さあ傘寿上半身はまだ老いず

極楽はスイッチバックで上るとこ

三田市 久保田 千代

ピントはずれの会話飛び交う一つ屋根
永らえて自分失うこと多し

茄子の色夏の朝食整える

散り際の花が何かを訴える

リベンジに燃えるチャンスはきつとある

三田市 多田 雅尚

爺ちゃんになりたくないが見てみたい

満天の星は宇宙の贈り物

ベットには金のスプーン俺は銀

都議選に勝利の後の政治塾

七月を文月と書く文科省

三田市 谷口 修平

当り前なんて一つも無い宇宙

リストラの引き金だった無礼講

リストラの首に値札をぶら下げる

その内にご先祖様になる不思議

あの世でも元気ですかでええやろか

三田市 野口 晶子

下心持ち万の神に願かける

大器晩成も少し待てと神の声

非常食背負い俗世の闊歩く

こころ一番ちゃんとネコもかぶれます

背の羽根を切っても得たい妻の席

三田市 福田好文

三八の牛井食べて高楊枝
五円でも下心あるお賽銭

数々の内緒があつて呆けられぬ

毛が抜ける頃が最後の反抗期

正論をぶつて厄介者にされ

三田市 堀 正和

父の日にやつて来ましたスニーカー

草むしり三日間もの後遺症

靴までが横向いている反抗期

大丈夫まだ首を振る扇風機

梅雨明けるセミも一氣に目を覚ます

三田市 村田 博

誰彼なしに吠えて絡んだ無鉄砲

友情を育む割り勘の掟

ライバルが居るから手抜き許されぬ

狂わない電子時計に遅刻する

両腕に子供ぶら下げ父ポバイ

高砂市 松尾 柳右子

年金を娘にあずけての一人住む

楽しみはあすデイサービスで友に会う

洗髪とカラオケデイはありがたい

廊下には俳句貼られてほくそ笑む

朝晩を仏間にこもり主しのぶ

宝塚市 田中 章子

あこがれの地揚げ雲雀鳴く空高く

重い荷へ夫頼もしく見え久し

非日常細胞までが若返る

失敗が続くそれも話の種

司馬遼を読んで二度目の旅をする

西宮市 秋元 てる

花は葉に古里いよよ遠くなり

花一筋ほんとは人間好きだった

探り合いしばし忘れた日向はこ

母白寿未だする事がある笑顔

形だけの謝罪はしないお猿さん

西宮市 緒方 美津子

けんかしておれぬ月下美人が呼ぶ

お父さんを借りて叱ったのは昔

父母が居ぬともほっこりと里の風

母の代り父がするのは難しい

立ちすくむボンと跳べてた溝なのに

西宮市 亀岡 哲子

終活ヘシルバークグズ増えてくる

残念はロバのパン屋を知らず老い

思い出の母がどんな若くなる

不等辺三角形に三世代

自慢ではないが誇りは持っている

西宮市 西 口 いわゑ

たあい無いおしゃべりをして気が晴れる

南あわじ市 萩 原 狸 月

絵の中の蚩ふわりと手の中へ

時は流れ第三幕目とはなりぬ

目を閉じて楽しいことを思い出す

遠き人へ翼が欲しいと思う

西宮市 福 島 弘 子

親譲り成るように成る子にも言う

白寿尚三度の食がおいしいと

同郷の同じセンスで打ち解ける

懐かしい新幹線の試乗会

もう時効あのいたずらも笑い種

西脇市 七反田 順 子

身の丈に合った贅沢して暮らす

おしゃべりで救える手立てありますか

みそ汁の具に凝ってますあらかしこ

よくやったクラブ活動ぶれぬまま

夏旅は息子一家と睦まじく

姫路市 古 川 奮 水

梅雨空も明るいニユース心待ち

配色に個性根気が滲みでる

娘の知恵は母に貰った祖母の知恵

今更に読めない文字は飛ばしとく

夕やけがあなたも赤い顔にする

代官と越後屋が居て汚職劇

法相の理解出来ない法が出来

追求に記憶なくして城守る

つじつまの合わぬ話をまだ否定

一強の奢り失言スキャンダル

奈良市 阿 部 紀 子

憧れのデイズニーで式挙げた孫

打ち合わせ四回さすが祖母に似る

眼鏡服新調をして爺参加

教会で全員揃い肅々と

アメリカのデイズニー船でハネムーン

奈良市 大久保 眞 澄

自爆テロ法があろうとなかろうと

黙祷の一分おばあさんにはきつうおす

究極のパワハラ総理のご意向

天の川三途の川に見えてくる

ドロドロ血を水でうすめているところ

奈良市 加 門 萌 子

政治家もさぞしんどいねもめ続く

マスコミがいち番強いこの時代

収穫の目途はつくのか青田風

安穏と暮らす日常ままならず

熱中症日毎に増える温暖化

奈良市 高橋敬子

熱中症忘れた歳に注意され
とほとほと敬老会へ歳らしく
美味に温泉一日がよい非日常
球拾い玉の汗する子にエール
猛暑にミサイル平気でおれるはずがない

奈良市 辻内 げんえい

短冊に願い書かせる古稀の妻
叫ばずとも聞こえる部屋で老いふたり
今日はホスト座ってなんかいられない
孫来ないゲストルームがよく寝れる
玉と王孫に教えて将棋指す

奈良市 米田恭昌

梅雨冷えの老母を氣遣うホッカイロ
三吉も誇る未到の29連勝
北のミサイル慣れっこになる怖さ
中国から怖い火蟻のごあいさつ
おぞましいセンセイ様の罵詈雑言

生駒市 飛永ふりこ

陽と水のおかけと花が生き返る
朝顔の濃い紫の自負覗く
もやもやをさくり掻き消すかき氷
もちもちのフランスパンから座も和む
名園に大観の作再現す

香芝市 山下純子

胃袋をキャッチするのも妻の技
築100年雨戸開けにも技がいる
スジ肉で美肌を作るマイルレシビ
ネコよりも上手に魚食べる孫
ふる里のかつお茶漬けが夢に出る

桜井市 安土理恵

ひとりでも平気しばらく群れを出る
噂は噂言いたいように言えばよい
不揃いの我が家そっくり莢の豆
男の鱗剥いだ頃から寒い首
力づくで掴んだ夢のもろいこと

奈良県 安福和夫

白衣見て血圧上がる医の不思議
養生せぬメタボの医者も先生か
益軒の養生訓をバイブルに
健康法ビル会社もサブリ売る
あれこれとトライするだけ続かない

奈良県 谷川 憲

登校を見守る犬とボランティア
少年に夢を見させた映画館
少年の万能道具肥後の守
唸り声風呂から洩れて村芝居
御意見番消えて老舗が暖簾閉じ

奈良県 中原比呂志

喧嘩した相手閻魔で呼びにこず

夏休み学校に幽霊出る噂

呵伝の呼吸にメモはとらぬもの

神風が去って残ったのは尻尾

禁煙所いらいばくばくうろうろと

奈良県 渡辺富子

梅雨晴れ間日本列島深呼吸

尖ったところを涼風撫でていく

友が来る予感ふくらパイを焼く

ひからびたところへ浴びているみどり

もう少しこの世で生きて花咲かす

和歌山市 磯部義雄

海を見るたび思い出す大津波

良いことがありそう明日は誕生日

風の吹くままに傘寿は運任せ

見舞客帰れば笑顔消える妻

運命に翻弄された戦中派

和歌山市 上田紀子

一生涯私に何が残せるか

神通力いつか青空翔ぶ翼

この胸に流れる川は今怒濤

人生を白紙撤回してみたい

縫えるなら心のはつれ一みずつ

和歌山市 柏原夕胡

愛しい人だけを飾ろう写真立て

一冊の本が私を塗り替える

ハプニングあつて記憶に残る旅

さくらんぼ横目で睨みバナナ買う

花束へ笑顔弾ける誕生日

和歌山市 喜田准一

著名人なのに度忘れする名前

ロボット化進めばきみは何をする

エキサイト妻は臨時の解説者

傷口が広がり過ぎた自民党

都議選に赤信号が灯り出す

和歌山市 楠見章子

母さんがまあるく包んでる家族

悪いことそんなに続くはずが無い

懐の火種やさしい風を待つ

美人より笑顔弾ける娘を選び

前向きの靴で家族を支えてる

和歌山市 坂部紀久子

少し気取ってそんなお相手もう居ない

いつまでもいい女でいたい無口

優しさの匂う手紙のがきくげこ

過去形もまんざらでない誕生日

とり過ぎた年齢磨く蔵書積む

和歌山市 武本 碧

子育ての秘訣は甘さ控え目に
横槍をかわして柔らかな視線
ご期待を見事に外す天邪鬼
ルンルの足が気付かぬ落とし穴
おしゃべりも寡黙もあつて一つ屋根

和歌山市 玉置 当代

カラフルな傘で明るい梅雨の街
稜線が連なる里よ紀の国よ
若者が席を譲ってくれました
支え合いながら相槌打っている
蛇口からぶつぶつ不満もれている

和歌山市 土屋 起世子

こぼれ種芽を出し花も実もつけた
我慢などしてはいられぬ熱帯夜
さらさら星ウインクしてるあなたかも
微笑みも言葉の一つ異国人
欲減らし食を減らしている余生

和歌山市 福井 菜摘

交換日記親と子の夢築きあげ
手間かけた子が爛漫の花咲かせ
子も巣立ち心のネジを巻き直す
闘志満満明日に鉛筆尖らせる
さよならはやめよう明日も日が昇る

和歌山市 古久保 和子

袋とじ開いてどしゃ降りの中へ
川柳の鬼が私を眠らせぬ
時計より早く目覚めるようになり
紫陽花のうしろ姿はみな孤独
短冊に個人情報天の川

和歌山市 堀 富美子

身の丈で翔ぶ日捲りが走り出す
カラオケもロマンの曲を選ばせる
バイタリテイ老いと云う字が口惜しくて
幸せな出会いに孤独感はない
食べつぷり喋りと今日も恙無い

和歌山市 松原 寿子

はみ出さず絆ぬくめる小さな輪
飾らない友の情けを噛みしめる
ありがとう心で伝え日々過ごす
花達も熱中症に耐えている
ふるさとに亡母の歴史よみがえる

岩出市 藤原 ほのか

様々な人生ドラマパネにする
道すがら色々あるがぶれてない
大衆の叫びを抱いて立ち上がる
どうであれ渡ることしかないを知る
煙突がなくなり路に迷ってる

海南市 小谷小雪

夏の草日ざしを受けてしゃんとする
自転車漕ぐと暑さも飛んでゆく
里の家元気でいてねかすみ草
りっしんべん付けて人間らしくなる
糠床の加減が決める味がある

海南市 堂上泰女

一つ注文してカタログに狙われる
値上がりの分クーラーで締めておく
当直三日脱帽する子の気力
一つ聞き十を悟って叱られる
大好きな服で出かける梅雨晴れ間

紀の川市 宇野幹子

ハンドバッグ替えて出てきた諭吉さま
親孝行のつもりで愚痴を聞いてやる
四捨五入して人生を立て直す
夏枯れの海馬に水が届かない
水割りの底から友が顔を出す

紀の川市 北山絹子

都から厳しい風が吹いてくる
クラス会都会馴れた顔が寄る
外交へ馴染めぬ靴がちびてくる
雑学の森で途方に暮れている
運のよい人の側には敵がない

紀の川市 楠原富香

片減りの靴がひきずる自尊心
それぞれの指が背負っている火種
手に入れた時から褪せて行く興味
しっかりと生きて努力を惜しまない
たとう紙に包んだ母の愛ひろう

紀の川市 山東日出男

神様が宇宙に空けた落とし穴
決戦へ送る背中が頼もしい
退職の夫レシビに凝り始め
土木技師も裸足で逃げるアリジゴク
AIがやがて地球を支配する

田辺市 岡本昇

梅雨晴れ間はあさんすつと立ち上る
ありがたやカラン捻ると水が出る
雨水を甘露かんろと飢餓の国
広縁に先祖を偲ぶ底光り
幾星霜越えたお顔の辻地蔵

橋本市 石田隆彦

生き方を探り多読した青春
興味半分 怖さ半分 ネット界
お互いにとんちんかんで暮らす老い
忘れずに猛暑対策ゴーヤ植え
また会えた喜びに湧く同期会

(前月分) 河内長野市 植村 茂代

毎日が色々あつてシヨートステイ
娘の差し入れて生きてますおやつ (長女)

日に日に娘の優しさ今思う (二女の死)

孫残し逝った娘のことと思う

食べて寝て今日も過ぎて行くシヨート

(前月分) 堺市 加島 由一

通院の日は朝風呂で「好きだった」

朝顔の芽が出た亡妻が笑つてる

八時半病院行きの高野線

手を握れと言われ看護師の手を握る

のど自慢応募来年歌手デビュー

(前月分) 大阪府 桑田 ゆきの

老鷲に癒され森へと歩を運ぶ

子に混じり螢追つて老いの足

ミサイルに不安のよぎる梅雨の空

通夜の座へ螢火一つ去りやらず

子の瞳かがやいている夕茜

(前月分) 黒石市 相馬 一花

青筋を立てて認知を迫る女

アリババの呪文なくても開くドア

特売に女盛りが殺到す

鯀ヶ沢旅行にはずむ胸の辺

熊に会おうとと逃げることにする

水煙草

(つづき)

(前月分) 三田市 宗福 清司

知りたいネやがてどうなるあの二人

ジグジグザグザグたまには良いのでは

チャレンジ目標毎日三句五七五

賀状交換どんどん減つてさびしいネ

(前月分) 横浜市 長島 亜希子

わたし刺すなんて蚊も生きるのに必死だね

けんかしてちよつぱり妻の悪巧み

便利さに慣れてわたしを甘やかす

わざとかな胸のボタンが外れてる

(前月分) 川西市 日野岡 和之

覚悟して本音を語る果し合い

どんづまり起死回生の決勝打

若虎が大活躍の当り年

痛いほど気持ちは分かるミスショット

(先月分) 八尾市 山川 寧

懐かしの珉珉健在ビルの地下

探しものに日が暮れる夫の掃除後

習いたて着物姿でキタミナミ

フリクションインク減るのが早すぎる

川柳塔の

川柳讃歌

◎

上方芸評論家 木津川 計

反面教師ならば立派な父である

三浦 強 一

「どうしてあんなにわたしを殴ったの？
子供を産んだら余計わからなくなりました」
(女29歳)、「お父さん、あなたがいなくなっ
てから、私たちは幸せになりました」(男17
歳)、「わたしに跳び蹴りしたあなた、孫に髪
を掴まれ馬になるあなた、本当に同一人物な
のですか」(女26歳)。こんな反面教師的な父
が「日本一短い「父」への手紙」に多く書か
れた。虐待する父親も後を絶たない。強一さ
ん、あなたは正味立派な教師の筈です。

コーヒーの濃いさ帝国主義なのか

石橋 芳山

『金色夜叉』を書いた尾崎紅葉は濃茶が好
きだった。佐渡に遊んだとき、芸妓お糸の三
味線の裏皮におけさの文句「来いちゃ来い
ちゃで二度だまされた、またも来いちゃでだ
ます気か」。お糸はこの三味線を終生秘蔵し

た。コーヒーも日本茶も濃いのをやはり帝国
主義者風は好んだ。お宮に裏切られた貫一は
絶望して一高を退学、紅葉は彼をえげつない
高利貸にならせ、お宮を財力で見返したのだ。
芳山さん、帝国主義者風は書くことも強烈で
す。

歳相応なんて正直すぎる医者

古今堂 蕉子

正直者はどこにでもいる。ある日の朝日の
紙面「いわせてもらう」欄だ。「かつこいいワ
ークブーツを見つけた。イケメンの店員さんが
「すこいいい革ですが、硬いので5、6年は履
きこんでいただかないと」と言うので、思わ
ず「年だから間に合わないわよ」と口走った。
すると「そうですね」と他の靴を出してきた
とは69歳の女性の「そんなことないと言って」
である。蕉子さん、僕が医者なら、「体もお
口も達者です」とお上手を言います。

価値を知る人には見せておく小判

竹治 ちかし

「猫に小判」のことわざを最初に言うた人
がえらい。「馬の耳に念仏」も初めて聞いた
人が感心して他所で使うほどに人口に膾炙し
ていった。「番町皿屋敷」で青山播磨の伯母
の真弓が叱って言う。「天下の旗本が町人共
の真似をして建人とか建引とか、毎日毎日の

喧嘩沙汰、さりとて見上げた心掛けじゃ。普
段からあれはと言うて聞かせている伯母の意
見も、そなたという暴れ馬の耳には念仏そ
うな。ちかしさん、川柳塔と鉄塔を区別でき
る人に川柳塔を読ませて「猫に小判」です。
座れたら各停でよし老いの旅

能勢 利子

内館牧子ばりに言うなら「終わった人」が
先を急いでなんという。猛烈に忙しかった
菊池寛でも風景を味わいたいと大阪から東京
まで各停で帰った車中、洗面所で入れ歯をな
くして大騒ぎ。靴を脱いだら底から出てきた。
同乗の秘書が呆れ、「履いていてわからなかつ
たのですか」「そんなところにある筈がない
とおもっていたから」。利子さん、各停で忘れ
物をしたらどんな物でも靴の底にあります。

引き出しの肩叩き券期限切れ

三宅 満子

年末ジャンボ宝くじで一等4億円の当る確
率は1千万分の1。北海道の上空から一円玉
を落として頭に当る確率に等しい。殆ど絶望
的な毎回の当りくじの未払いが数十億円も
あるというから世の中、はお一とした人も
います。満子さんも思い出して眺めたら期
限切れ。幼い敵もさる者です。うれしがらせ
て悔しがらせる術を心得ていたのです。奴さ
ん、いま頃、アハハ〜ととびはねています。

自選集

小島蘭幸

クラーク博士と同じ形をして風に
レジエンドの眼よ本物をいただいた
わたくしの一句と路郎展光る
長女新築次女は出産 さてわたし
さてわたし比翼の句碑の前に立つ

津守柳伸

アメちゃんが溜まる外出しないから
リタイアをしたい居職を笑う腕
外出で連れて行きたいヒツマブシ
自販機にhotが消えて魔法瓶
宝石の出番も消えて身軽うに

都倉求芽

胸底も衣がえする深呼吸
妻の紐ゆるまぬように雨が降る
ふるさとの人びとの名は消えぬ妻
快復を祈って掃除裏鬼門
あじさいに泣いた日 日傘まわした日

土橋 螢

おふくろの味が元氣を出せという
うれし涙を溜めている壺がある
あつという間に八十九歳になる
愉快になれるお薬を召しあがれ
たつぷりと墨つけて書く芸もある

西出 楓 楽

そうめんと茶漬じゃ夏を乗り切れぬ
きつちりと三食たべている自愛
自分との誓い近頃反古ばかり
誘眠剤毎日飲んでいくさ
坪いくらだろう夏草はしいまま

仁部 四 郎

月曜日社長に今朝の目覚め訊き
火曜日のお茶当番は男組
水曜日愛妻弁当定休日
木曜日かなり疲れた係長
ブレ金はフライドチキン増量日

前 たもつ

今日という一日限りの誕生日
聖書の文字見えなくなっている手術
目が合って席譲られて恥ずかしい
わが国を支えられるかペン研く
飯の世で天に宝を積んでいる

三宅保州

誰しもが始めての道行くのです
円舞曲がとっても似合う熱帯魚
結果論溢れかえっている日記
病人に発破をかけている見舞
背伸びとはかくやと思う棒グラフ

宮西弥生

すきま風大人になっていく過程
戦争の粉煙消えない知覧の茶
引き際の美学背中が美しい
病んでみて命いとしくある美学
天才と凡才寄り合っているのれん

村上玄也

籤運の悪さどうやら生まれつき
じゃんけんの勝率二割にも満たず
ピンゴでも最後の最後まで開かず
当りくじの鐘を鳴らしたことがない
ジャンボくじ買わないことにしています

八木千代

秋までを
夏椿 夏を案じてくれている
サラサラサラ朝を促すかのよう
秋まではすべての欲を五分六分
風連れて出る 序の舞の黄の揚羽
おかげさま椿の念か みほとけか

山本希久子

八十路健やか毎日がほぼ同じ
終章を生き意識して背を伸ばす
家族という防風林に守られる
柔軟な姿勢で老いをやり過ごす
ワードエクセルネットから若い風

両川洋々

方程式で解けぬ人情論が好き
星空に宥めて欲しい傷を持つ
飽きる程恋も見合いもしてひとり
未練まだ愛の欠片が手離せぬ
アララの呪いだろうか地球鬱を病む

板尾岳人

大漁へサンマを処刑す豊洲
電柱に片足上げる無礼者
弟がいて姉が居て麦ごはん
父も兄も憲兵だった敗戦画
こじ岳人つまらなくても生かさせる

川上大輪

次次とページ捲っていく他人
生みたての卵探しに図書館へ
すごいなあずっとアホウを通して
深海魚だって泳いでいる都会
選手交代包丁を替えてみる



とんぼ飛ぶ卑弥呼の里の夏模様
風景に溶ける蜘蛛の巣樁の実
黒揚羽ひらり卑弥呼の影過ぎる
海からの便り卑弥呼の里で待つ
午睡から醒めてこの世の蟬しぐれ

木
本
朱
夏

有り難う妻に言う日が増えてきた
鎮守の森の目立たぬとこに置いた恋
手の届くところへ白寿がきてしまい
長持ちをさせる仏壇の花もある
改築へ息子も年だ腰いため

小
西
雄
々

一切を吐いてすっきりした夕陽
ボランティアの救助労働缶コーヒー
痛快な逆転劇だ満塁打
ラベンダーが薫るゆつくり歩こうよ
ふるさとへ戻って来いという花火

齊
藤
嘉

のんびりとした村ネズミまでデカイ
焼酎の臭いキライと蜂が刺す
近頃は拙宅もほぼゴミ屋敷
ゴキブリが寝苦しいねと顔を出す
くちづけのかたちで枕抱いて寝る

新
家
完
司

第67回 岸和田市民川柳大会

日時 10月15日(日) 12時開場
会場 岸和田市立「労働会館」2F 講堂
事前投句 「実る」 岩佐ダン吉 謝選
(締切日 9月30日必着・欠席投句はご遠慮ください)

兼題 「使う」 吉川 哲矢 選
「足音」 久保田半蔵門 選
「ファースト」 古今堂蕉子 選
「新」 鈴木いさお 選
「わいわい」 三宅 保州 選

出句数 各題2句 欠席投句はご遠慮ください
出句締切・開会 13時 披講 14時30分
会費 2000円(軽食・参加賞・大会誌呈)
事前投句先 〒596-0076

岸和田市野田町2-18-27

問合せ先 増田 隆昭 072-457-3266
岩佐ダン吉 072-428-0325

主催 岸和田市・岸和田市教育委員会
参加団体 岸和田川柳会

第41回 鳥取県川柳大会

とき 10月28日(土) 10時開場
ところ 鳥取県立倉吉未来中心 小ホール
倉吉市駄経寺町212-5
TEL 0858-23-5390
JR山陰本線「倉吉駅」下車 西倉吉行バス15分
出句締切 11時45分 開会 13時
三味線演奏 11時45分～12時15分
一般部門
宿題と選者(各題2句・席題なし 披講 13時20分)

「卵」	福西 茶子 選
「図星」	石橋 芳山 選
「色」	徳長 伶子 選
「触れる」	平井美智子 選
「奇跡」	但見石花菜 選
「突然」	新家 完司 選

出席者のみ事前投句
「丘」 小谷美ツ千 選
会費 2000円(大会誌・昼食)
欠席投句 1000円(9月30日必着 小為替)

出席者のみ事前投句
「丘」(締切 9月30日必着)
投句先 〒682-0034 鳥取県倉吉市大原637-3
牧野 芳光 宛

ジュニア部門(小中学生に限る)
宿題「絵」 森山 盛桜 選
2句まで 投句料 無料

締切 9月30日 必着
投句先 〒689-0423 鳥取市鹿野町中国180
森山 盛桜 宛
主催 鳥取県川柳作家協会

現代川柳の特徴として句中のカタカナを挙げることはできます。今や日常生活でカタカナ外来語に接しない日はありません。古川柳の時代には無かった新しい表現の拡がりを享受しているとも言えます。

カタカナを詠み込んだ句はメリハリや新鮮味が加わり、川柳の趣を変えてきたと思います。私自身、五年前に川柳を始め、最初に新聞柳壇で入選した句は「ファンファーレ響いて犬もハモリだす」でした。以来私はカタカナの効能を大いに活用し続けて今に至っております。

この様に川柳では有り難いカタカナではあります。が、翻訳を業として、常に英語に接している私にとって、気になるのは和製英語のカタカナです。職業柄黙って見過ごせないからです。和製英語とおぼしきカタカナに出くわす度に正しい英語に直して英訳しますが、依頼主から問い合わせも偶にあります。

よく知られている野球用語のナイターやデッドボール等は別にして、身近な例でも次の様な和製英語があります。ご参考迄に。

サラリーマン（一般に office worker）、ノートパソコン（laptop）、フロント（reception）、コンセント（outlet 又は socket）、チャック（zipper）。

和製英語の功罪は別にしても、外国人と接する時には、こちらが英語だと思っけていても、カタカナ英語では通じないばかりか誤解を生む事もありますので、海外旅行等では要注意です。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

昔よかった話ばかりでボケてくる
計算が合わない親の結婚日

少年にたちまち還るラムネ瓶

おとうとの遺骨ではない石ひとつ

今日はではさようなら風になる

重陽の月を戦地で見た兵士

のと鮎をひとつ戴くほどの仲

松茸は毒だ毒だと子に聞かせ

むつかしい顔して社説読んでいる

年金のくらし小さなゴミ袋

やがて消える花のいのちの絵ろうそく

その後が気になる下着試着室

怒りなはれ笑たら負けや消費税

つかえを外せば男たよりない

恥ずかしい影ひきずって古稀という

珈琲代おんな癒着を嫌うなり

世の中は人情だけではいらしい

四十九キロ肩で風切るほどに痩せ



川 上 大 輪 選

横浜市 川 島 良 子

石を掘る人間を彫る愛を彫る
頭脳明晰欠けていたのは人間性
骨董を繕う終活への一步
移りゆくころ神にも裁けまい
決断へ母は黙って頷いた
暗黙のルールその件には触れぬ

瀬戸内市 東 横 ますみ

指間から逃げる時間とため息と
筋書の読めぬ明日の絵が溜まる
眠剤が増えて迷いの中にいる
アルバムにぎゅっと詰まっている笑顔
遊びしろ残して妻の座を降りる
尻尾からじわりとやって来る老化

寝屋川市 岡 本 勲

ふる里のどこを踏んでも母の声
縁あって結ばれたのが情けない
お隣とつかず離れず口出さず

詫び方が癪にさわって又もめる
あの方が動けば事がめはじめ
まだ希望すてずに結ぶクツのヒモ

松山市 郷 田 みや

ひまわりの裏側見ないことにする
傘干して昨日のことは忘れま
タバスコをちよつとかければいい男
雨のせい暑さのせいとそっぽ向く
種なしの西瓜ぼそつと独り言
脚立から降りる一步に要るパワー

府中市 岸 田 武

おだてても駄目再任はおことわり
沈黙が一ばん困るまとも役
剥落の土塀にカメラ向けている
老い二人猫が一瞥して通る
見たくないものの一つに風呂鏡
礼服のままのパチンコよく入る

箕面市 中山春代

ザワザワ父へ届ける鎮魂歌
顔知らぬ父は夢にもでてこない

溶けてゆく母へ五木の子守歌

お下がりが行ったり来たり三姉妹

手が足が河内音頭へ動きだす

緑陰の小さな風に救われる

富田林市 小出修三

糸偏の付く孫みんな女の子

リハビリを終えて三時を待つ仲間

手許には辞書とルーペと本の山

弁解は無用と肩を撫でられる

脳トレのバズルに積もる春の塵

ブルーベリージャムが欲しくてパンを焼く

堺市 小林若芽

短冊に書けぬ願いがひとつある

ほどほどが苦手ですぐにのめり込む

真剣に生きて宿題増えてくる

朗報が軋む頭をなごませる

もう後に引けずに昇る縄梯子

生き抜いて簡素な葬儀望む母

尼崎市 清水久美子

阪神が勝つと決まって二日酔い

お愛想の値に泡を食う床涼み

鉛筆の芯が丸いと案が出ず

毎朝のジョグで海馬に活入れる
お忍びに使う夕べの観覧車
痩せるなら平氣の平左水中り

大阪市 小野雅美

あと少しだけだと後回し

戻るなら母に許しを乞うてみる

針の穴通りはしない糸を舐め

お化粧の一部始終を見る車内

ハンカチでふわりと包む恋ひとつ

クリックであっさり過去を捨てました

福井市 伊藤良一

良薬の一つに君の笑い顔

取り敢えず斜めに言ってみる批判

正論を脱いで掴んだ椅子もある

嫁が来て家の空気をかき混ぜる

一病も身内と思っておつきあい

いまここで動けば負けと影法師

西予市 西田美恵子

明り消すもう迷わない迷わない

振り向く度にあなたは少しづつ消える

未練かもしれない朝焼け美しい

握った手の上から片手添えてくれ

もって来いの雨ですここで別れよう

最後の運にかけよう君に逢いに行く

鳥取市 大前 安子

気は急くが身体ゴメンと涙出す
過去と未来ここで一線引きましよう
握る手の返る力で愛を知る
洗い髪月とお話乾くまで
明日の土鍬へ魂入れて打つ

倉吉市 中村 毅

山陰の駅舎鈍行よく似合う
過疎地の猿空き家の利用申し込む
ベテランは褒めて叱ってまた褒める
歳とるとピンチをチャンスにはできぬ
我が町の蛇口捻れば売れる水

倉吉市 堀 かずこ

写真撮る太った顔にああショック
細身でも若さとパワー頑張れる
すばらしい歌の心が胸をうつ
句が浮かびあわててメモに書き残す
運を呼ぶやる気があれば花は咲く

倉吉市 宮田 風露

今日もまた熱中症の救急車
熱帯夜頭の中で蝉が鳴く
診察日受付すんでずっと待つ
遺影の友微笑んでいてなお悲し
若者を叱る元気が残ってた

米子市 伊塚 美枝子

七夕に願う健康少し金
我が菜園不格好でも味はナス
さみしげに雨待つ野菜うなだれる
ダイエツトして下さいと膝が言う
膝の骨少し休めとサイン出す

鳥取県 門村 幸子

わたくしに違和感のない「老い」の文字
茄子胡瓜愉快に光る仲間たち
他国語が飛び交っている南禅寺
湯けむりへ体重計は掛け値なし
迷惑駐車人のふり見て考える

米子市 野川 宣子

助手席にブレイキ握る妻がいる
ピンポーンに時間のかかるどっこいしょ
今日もまた財布にやさし鯛買う
真相を知りたいマイク追いかける
ゴール前いまだに理想追っている

米子市 永井 三津子

大好きな彼の目線に無い私
余罪ならあなた愛した事かしら
毒蟻は輸入に頼る警告か
ゴミ出し日溜まらぬ金が恨めしい
老いかしら日毎終活考える

鳥取県 下田 茂登子

老父母を受け取る子供見当たらず

長生きが邪魔して行き場見つからぬ

怪我しても一人居るしかない一人

葉だけたつぷりもらい行き場ない

一人居に帰れ帰れの医の制度

鳥取県 橋本 整

嫁ぐ娘を囲み家族の応援歌

妻の骨拾う人生大誤算

介護して人の痛みを知らされる

もう十年生きて見ようか九〇歳

好き嫌い抜きで一緒になった仲

鳥取県 橋谷 静江

スランブから救ってくれる孫の声

友からのメールで体動きだす

人様の一步後ろをついて行く

身の丈を考えながら前向きに

時計から次の仕事をせかされる

松江市 中筋 弘充

徘徊とは違うスピード見てごらん

黄泉の国への入口下見しています

友引きの日は忙しい葬儀場

墜落しても助かる気する熱気球

父の日は母の日よりも静かです

松江市 山根 邦代

お互いの健忘症もお愛嬌

熱中症自分きびしくチェックする

聴く耳が元気ならこそ詩になる

聴く耳を持ってない人にお念仏

明日天気十五夜の月かがやいて

雲南市 永見 安子

風に乗り風鈴やさし母の声

メ切りは明日というのに後一句

自分との戦い今日も日が暮れて

なにもかも知ってくれてる友がいて

久しぶり元気もらった神楽舞

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

妥協などできぬ私の貌でゆく

回覧板村の噂も連れてくる

足元の愛に気付かず枯れている

いい返事しておきこり忘れてた

梅雨どきのうつを捨てます五七五

玉野市 片岡 富子

脳トレに飢えて何度もやってみる

断捨離と言ってゴールがまだ見えす

残念だ犬猫飼えぬ歳となり

アンケート書きたい店に紙が無い

余所事と思わず防災チェックする

広島市 松尾信彦

三原市 笹重耕三

雨の日の紫陽花まるく人を恋う
鉛筆は父消しゴムはいつも母
のんびりを罪悪とみる割烹着
魂胆が見えず酔えない奢り酒
負うた荷の重さが変わるしあわせ度

尾道市 小畑宣之

山口市 中前幸子

泥酔と悔恨の日々なつかしき
喜寿の旅マイカーやめてバス電車
絵空事でも良い夢は壮大に
定年か現か母の声響く
明るさを気にせず妻は高いびき

竹原市 若年幸子

今治市 渡邊伊津志

グリーンシャワー溜まった鬱を浄化する
兄弟ゲンカそのうち舞台廻るだろ
丸文字の優しさ微熱とれてくる
真っ先にリフォームしたいのは私
デイサービス今日という日をふくらます

府中市 田辺和子

大洲市 花岡順子

アロマ置くわたしの海馬蘇れ
見事に生ききった隣のおじいさん
言い草が娘に似て来はつとする
その名前亡母にぴったり不断草
軟らかいだけの御数に誉め言葉

シンプルな風だ田舎の匂いする
どうせなら楽しいほうがいいこの世
あなたからどうぞと吊り橋が揺れる
曲がり角過ぎた辺りにあるドラマ
逆走するなんて覚悟は本物だ
わたしがわたしであるために吹くラッパ
雨が止んだらマリオネットと出掛けよう
義理人情重たいものはみな降ろす
前向きに歩けば風も味方する
感情論に走って自分見失う
正直に暮し笑顔と思いやり
無器用に勝る明るさ持っている
子の辞書に義理という字が薄くなり
長生きの秘訣笑顔と思いやり
飾らない言葉が好きでウマが合う

余ってる医者が過疎地には来ない
過労死にならと思っている時計
それなりの味弁当はワンコイン
本人は覚えていないエピソード
手の平にかいたことさえすぐ忘れ

北九州市 小松紀子

人生はいつもこれから好きなこと

バス停を花でいやそう鎌を入れ

心配してもしなくとも最期来る

早朝の窓全開にやる気出す

犬の助けもかりている万歩計

佐賀県 真島久美子

水色になってゆつくり考える

嘘ついて水の流れを塞ぎ止める

甘い水だけで逢いたい人待つ

水を飲む疑い深い喉仏

ときどきは水風船になる本音

沖縄県 あらさくら

艶歌聴き恋したくなる熱い夜

共白髪頑張ったねと称えあう

母歌う十九の春が十八番です

何度でも消せる消しゴムありがたい

小言受け悔しさバネにありがとう

沖縄県 宮すみれ

百歳の母のしゃがれた歌ほろり

片隅の売れない服に身を重ね

短足で働き者の三姉妹

ストールの雨風日よけ我かくし

おでこだし髪七変化春だもの

弘前市 高森一吞

二十四時看視されてる心電図

皆笑顔ほっとしている退院日

七色の鯨が僕を眠らせぬ

見舞客カーテン越しに三時間

標準語見舞客来て津軽弁

白河市 鈴木たけし

喜怒哀楽みんな時効にして煙

ありがとが出やすくなった老いの喉

青空に油断できない温暖化

五十年検診受けて老いが来た

キッチン朝を急かせる電子音

上尾市 中村伸子

会いに行く五百羅漢のあの一人

言い訳が多すぎたのか疑われ

五輪観に来ると言われる生きてなきや

個性的困った時の誉め言葉

犬も猫も嫌いと言えば疎まれる

横浜市 長島亜希子

結局は選んだ民のせいになれ

電車不通路線変えよか待ってよか

涙出てハナ出てわたし生きている

天才にあやかり同じチヨコ食べる

予報士に服装までも指図され

佐渡市 高野 不二

大阪市 柴本 ばっは

一俵をかついだ肩に今五キロ
買物のついでに頼む紙パンツ
断捨離で残ったごみが捨てられぬ
税抜きにだまされ高い方を買う
紙パンツ俺もそうだとクラス会

豊橋市 西郷 紀美代

お互いに自分のことは見えてない
手抜きして簡単に撒く除草剤
まあるくを心掛けたら出ぬ言葉
育て方悪くてごめん嫁に謝意
常識が自分の域を越えている

鈴鹿市 小河 柳女

一秒ごとに老いゆく人の悲しさよ
悲しさに魂するり滑り落ちる
蓮の花落ちる人気のはかなさよ
さあ大変ばくの太陽落ちちゃった
嗅覚で迷路を抜けて陽を拝む

大阪市 磯島 福貴子

獅子頭にあたま預けて息災を
子が病んだ身代り望む親心
待ち時間紙とペンありや苦にならぬ
一輪挿し空しさ癒やす百合香る
豪華列車豪華客船夢の夢

やりくりに引けを取らないお母ちゃん
無鉄砲なコント転がる週刊誌
ちらかった部屋が好きです元氣でる
誕生日来ますが歳は減らします
褒め言葉生きてるうちに下さいね

大阪市 高杉 力

素麺でいいかい いいよの夏が来る
物置の奥から夢を探し出し
かけもりに陰でスベシャルトツピング
弱い者同士スズメにパンをやる
もう一軒行こう釣銭ポケットに

大阪市 田中 ゆみ子

仕舞風呂今日の苦勞は今日終える
幸せが住んで居そうな隣村
三角もあります硬く考えぬ
白髪染めしない覚悟ができぬまま
容易には泣かぬ女となりて母

大阪市 長高 俊雄

暑いと言いい雨だとサボる万歩計
セクハラになるもならぬもお人柄
髪切つて恋の幕引きしたらしい
懸命に生きよと痛が追い立てる
友だちでいよか告白するべきか

大阪市 樋口 眞

黄昏はもつと先だと一人決め
検査値にお前はアホと笑われる
錯覚に気付き一人で苦笑い
患者の身ぐつと我慢を強いられる
夏が来た母校今年もすぐに負け

大阪市 横山里子

多数決民主主義とは脆いもの
さあ今日はどの着ぐるみで参ろうか
歯車が狂う真夏の鳩時計
熱帯夜志功の天女暑苦し
前世に借りがあったか日々介護

堺市 大和峯二

年金減増える赤字に呻き声
マイナバーとことん搾りとりますね
大笑いしても消えないこの苦勞
カジノよりつくって欲しい保育園
美しい国は平和があつてこそ

堺市 近藤治子

ふたありの靴が仲良く新世帯
役に立つこと生きがい古稀の坂
ゆとりで浮き浮きはすむ一人旅
役終えた物に光をリサイクル
困つてもお母さんには言えなんだ

池田市 太田省三

思い出を金銀銅に仕分けする
くず野菜集めて今日はいかやく飯
順番がずつと気になる待合室
賞品をながめるだけの第四位
断捨離は写真の中のこの女

河内長野市 中島一彌

母子草肩に力を入れず咲く
一雨来そう蟻がせわしく動いてる
いい度胸道を横切る蝸牛
修身の教えを今も守る母
さりげなく靴を揃える妻の愛

河内長野市 原熊知津子

太陽を追うヒマワリの片思い
傷口を人肌爛で和らげる
家一步出ればひとりの女です
かけ算で膨らんでゆく思い込み
勝ち進む君が眩しく遠くなる

河内長野市 森田旅人

肉筆を喜ぶ人の居るポスト
メールより肉声を待つジイとバア
肉親の輪から外れて酸素吸う
スマホ持ち会話の減った人と人
ひとまずは脇に置いてるエンディング

河内長野市 渡邊 修

大阪府 神野 千恵子

デパ地下で実演見ては緩む紐
会席も三日続けば箸止まる
買うまいと誓ったジャンボまた並ぶ
北のアナ一度笑ろてる顔見たい
毎日が限定五〇〇テレシヨップ

豊中市 荒木 郁子

神戸市 玄 番 美恵子

ローカル線期待わくわく一人旅
西瓜は丸とんでもないわ老い二人
背中美人お見せするのはあなただけ
知らないよ寝たもんがちと高いびき
はやばやと今年の暦瘦せてきた

豊中市 貝塚 正子

尼崎市 永田 紀恵

丸坊主揃いさわやか甲子園
好奇心湧かせるような大見出し
湧く疑惑すべてのことが怪しまれ
やんわりと体がアカン言っている
どっちなの考えてるの寝ているの

豊中市 木藤 こみつ

伊丹市 平井 富夫

亡母の和服虫干しがてら着て歩く
老人大学名前が嫌だまだ行かぬ
パラソルで作る私だけの小陰
お金持ちの周辺だけが良い景気
無人駅にもやがて転落防止柵

目がかすむ鏡の顔に皺がない
大笑い脳に酸素を送ってる
人間もコピーができる近未来
本当はさっさと歩きたいのです
しとしとと言うには梅雨が暴れすぎ
越中の旅で出会った風の盆
野菜の皮レシビに加え母の知恵
ほっとして無になる便座暖かい
台風の惨禍テレビに息をのむ
二度とない今日丁寧に生きて行く
無関心装い片目あけている
神棚でハズレ馬券が嘶いて
青い時思い出せない枯れすすき
夫婦仲ボチとタマとで支えてる
降りそうな雨に進退問われてる
いつの間にスマホ頼りの生活に
留守の間に少し減ってるヘソクリが
タンス奥誰の期待を待つ保険
また来るね孫が手を振り盆終わる
LED次の交換生きてるか

加西市 山 端 なつみ

特売の裏に泣いてる人もいる

黒々の髪懐かしむニット帽

家族葬あなたへ借りが返せない

濃い化粧本心透けて見えません

しとしとが豪雨に変わる温暖化

篠山市 藤 井 美智子

楽あれば苦あり試練のくり返し

九州へ地震その上豪雨まで

カラオケで選ぶ亡夫の二人酒

百寿の足歩く暮らしに鍛えられ

菜園の美味しいきゅうり採る至福

三田市 九 村 義 徳

水耕のトマトが土を恋しがる

寄り添えば本音じんわり責めてくる

気が付けばそつと寄り添う影がある

小遣をせしめる次女のテクニク

末っ子はうまく本心隠してる

三田市 宗 福 清 司

戻れるなら三年前の手術まで

不思議やなナゼ分らないこの気持ち

老いての夢膨らまし過ぎまたパンク

妻の助言でイメージづくりまたダメ

妻からのアイコンタクト意味不明

宝塚市 丸 山 孔 一

ダンブカー蟻の如くに山が消え

美しい花もホロホロ散る運命

ベランダで地球の一部見晴らして

ビロリ菌生きているぞと医者が言う

歩数計幅が狭いか数が増え

奈良市 尾 畑 なを江

猫草を撒いたらすずめ掘りおこす

待つことに馴れて一人のものの想い

亡父の本キザミたばこの匂いする

昨日より楽しいことをひとつでも

ぬか漬けも上手になつて古女房

和歌山市 福 呂 秀 子

花生けの紫陽花誉める梅雨半ば

思い遣り有り難うが丸くする

今日もまた良い日願つて化粧する

一寸先解らぬ命いとおしむ

子育ての頃懐かしむセピア色

和歌山県 森 下 よりこ

巣立ちはいつか見ないふりして見えています

梅雨空が続き降らない雨である

合歓の木のことだけ違う時流れ

笛の音が遠い慕情を呼び起こす

癌その後命拾った二十年

鳥取市 上山 一平

倉吉市 岡崎 美知江

水いらす貶してもよし褒めてよし

本気かな心の中で問うて見る

失敗を正夢にする老いの知慧

入道雲氷旗の店にまつしぐら

鳥取市 田賀 八千代

一緒こたになるとやさしい色になり

一緒こたに盛った器にある平和

難民に分けてやりたいこのグルメ

ラップして今の喜び逃さない

鳥取市 津村 律子

雨らしい雨に喜ぶ夏野菜

北九州深い爪痕残り梅雨

半白髪まだまだ似合う赤い服

いろいろと想像します今の内

鳥取市 山野 すみれ

薄っぺらの昼間の月の頼り無さ

主張する輪切りレモンに揺れるお茶

失敗の度に変わってゆく景色

満月を浮かべて遊ぶ千枚田

倉吉市 大羽 雄大

かすがいも弛んできたか屋台骨

癖ひとつ握手したがる酔っ払い

朝方の深い眠りの熱帯夜

西向きの窓窓窓にスタレ下げ

たつぷりと希望の色に染め上げる

酒飲める幸せな日々感謝する

矢面に立てばまだある存在感

悲しみは国のラッパが鳴るこわさ

倉吉市 田中 紀美恵

原っぱに慎ましやかに野菊咲き

ポトポトの年金もらいやつと食べ

故郷の山 空 風が身にしみる

恥捨てずちゃっかり卒寿迎えてる

倉吉市 田中 けいこ

貯まらない筈だ財布のヒモゆるい

けらけらと笑うのはやや下品だな

悪い癖切り間際手をつける

夕食後眠くなる癖なおらない

境港市 中井 虎尾

少子化に待機児童かこりや変だ

東京は毎日祭と思うべな

議員への資格テストがいるようだ

名前に子なんとキレイなおバアちゃん

米子市 池田 美穂

消費期限過ぎて嬉しい非常食

人を食う大臣の菌がグラグラだ

わたくしの力不足と句に詫びる

証明写真真年齢詐称許さない

米子市 生田 和之

高速と夜の運転止めている

大股で歩いてまとも転けました

ドタキャンも老いと許して笑い合う

化け物のような記録がファン産む

米子市 川本 美津子

認知症無いのツバメはやって来た

車椅子押してる嫁も高齢者

アニメ見た刺激で脳が動き出す

振り向けば真っ直ぐな道曲がってた

米子市 田村 周子

人生のたそがれ時間弱音吐く

孫たちに恋のブレイキかけられぬ

呆けぬようもしもの為に料理する

世の中は追いつ追われて流れてる

米子市 戸田 真理子

波風を立てないように貝になり

グルメツアー一つ大きいサイズ着る

胡瓜まで反抗するかよく曲がり

武器だった涙製造間に合わぬ

米子市 見山 温子

空梅雨にあじさい色がさめている

一歩巾おくれる夫の手をつなぐ

見栄を捨てB級品の梯子する

母を見送り夫の介護が忍びよる

鳥取県 児玉 規雄

私の心の故郷演歌です

演歌では夜汽車必ず北へ向く

御当地は失恋女の一人旅

震災の度に九ちゃん呼び出され

松江市 相見 柳歩

淡い幸こゆい努力のそのあとに

この世での苦勞来世の福となれ

風船ふくらむ連想してしまう

生きていく愉快ばかりじゃつまらない

出雲市 黒目 ひでお

連勝にブームを起こす将棋ファン

構想を練って思案の時を待つ

ミサイルが飛び交う日々がこないよう

都民ファースト都民の心驚づかみ

安来市 原 煩惱児

薫風に朝の散歩も口笛で

米寿翁確と有するすわり胼胝

北枕正座の主は律儀者

TPPされど植田のみどりかな

岡山県 大杉 敏夫

そつと息吐いて出番を待つ身です

どん底で二人三脚して居ます

跡継ぎの居ない軒にもツバメの巢

来年のことは問うまい葱坊主

竹原市 六田半徳

飛びながらトンビ鳴き方稽古中
立ち話やっとおわって高笑い
慈雨よ降れ地球の動乱冷やすため
赤ヘルの言動しかといたにつく

竹原市 土井輝恵

八十路への階段昇る辞書を繰る
貶す程仲が悪くはないのです
ピカピカに家を磨いて娘は帰る
トランプの国へ未来を賭ける気か

三次市 伊藤寿子

水害の警報身震いして聴いた
あちこちに車浮かんで流れてた
新婚さんだった水害忘れな
解かれたときく警報に胸をなで

広島県 日谷寛

語り合うそこに恋する人がいる
語り合うそこに呑気な人がいる
語り合うそこに豊かな人がいる
語り合うそこにきらめく人がいる

山口市 青木隆子

気がつけば近所の中の年長者
孝行をしたいつもりがまた喧嘩
タイマーが鳴るが聞こえぬ母の耳
雨止んで天の爪痕無残なり

岩国市 上村夢香

新しい命に集う大人の眼
この世には予定残高増えていく
全力で走る涙は乾き出す
さよならも言わず静かに消えていた

宇部市 高山清子

荷が重い別の道はと思案する
曖昧な返事総理に水溜まり
思うこと少し洩らして空気読む
晩学に昔の辞書が顔きかす

下松市 有海静枝

パセリ食べ尽くして蝶は蜜を吸う
野良生えの紫蘇をバツタと分けて食べ
血くらいはあげる痒くしなければ
愛らしい囁り糞の置き土産

松山市 近藤修二

正論を少し移して妥協する
わがままか脳の移植を考える
我が人生転勤族の根なし草
人柄を試す婚活町ぐるみ

松山市 柳田かおる

おしゃれ心をココロの芯にしています
やれやれと未だ未だという八合目
古傷が忘れないでと痛みだす
ジーンズの穴から明日が見えますか

一人でも二人旅です立前は 高知市 三谷 松太郎

知ってダメ知らずにいてはもつと駄目
普段着の生のことばでやってゆこ
無宗教支持党もなし一生涯

福岡県 本田 さくら

逝ったタマ心の奥に棲んでいる
ブルドーザー昔の影を消して行く
驕れる者久しからずの都議選挙
とりあえず卒寿未来が見たいから

唐津市 岩崎 實

年重ね食べる時間は倍かかり
年とりて杖がなければ歩けない
年とりてやつこらしようでやつと立ち
老いの果てみんなみんなに有難う

佐賀県 清水 園 實

ストレスもたまらぬようにビールのむ
血圧をさげる薬で生きのびる
忘れてたチンしたおかずそのまんま
CDをかけて鉄道音たのし

山鹿市 柳田 白 沙

遠い過去はき方忘れたピンヒール
孫が出来平気になったすっぴん顔
同窓会いくつになったと友が聞く
鳩さんが二人きたよと孫の声

那覇市 前川 真

消しゴムの屑に時折り叱られる
屋上に夢も乗せてた百貨店
ボケットの底に一粒あつた意地
古い鍵多分どこかの秘密基地

沖縄県 禰 ももと

砂丘での一人忘れた写真撮り
シャレタ靴外反拇趾がはいっている
ひつじの毛熱中症の予防刈り
人生は花のあるうち引くが良い

沖縄県 島 尻 卓

散水のホース持つ手を蚊が攻める
寄付金を募る団体多すぎる
広告と知ってがっかりい話
失敗をお互い様と言える人

シドニー 坂上 のり子

寒風にさらされ並ぶゴッホ展
これだったゴッホの強い線と色
出来たてのいちご酒がさす秋の空
飯の世のささやかな日々愛おしむ

札幌市 斉藤 宏子

かつこうに誘われ杖で初デビュー
にぎり合う手と手のぬくさ生を知る
草の海虹色に光る駒の群れ
ヨサコイの祭りの波にただもまれ

札幌市 富永恵子

豊橋市 小松くみ子

草いきれ今年も夏をつれて来る

未知数の福を連れ出す高齢期

芋の花緑の風とバスを待ち

洗車雨背なに重たく泥の川

松戸市 山下明子

絶不調貴女のメール嬉しくて

枕持ちお婆ちゃん好き雨の夜

検査待ち医学の力信じてる

川柳で暮らしのリズムアンダンテ

東京都 高岡弥生

ボーナスで借金返しまた借金

仕事場が唯一私の息抜きで

今年もね三連休が少なくて

モラハラの夫は結構いるらしく

横浜市 巖田かず枝

七十五自己責任で飲んでます

老犬がおむつデビューと相成つて

血圧の上がる話に目を瞑る

クモ逃がしハエは追いかけて回してる

静岡市 渡辺芳子

第一に国民守れ議員様

頭下げ深くお詫びは聞きあきた

気をつけて何時も自分に言い聞かせ

努力しても結果がおそいお年です

ねえちよつと声かけまでは憶えてる

違うんです はげた化粧とスツピンは

帰る日の夕食仕入れバスツアー

しあわせをいっぱいつかめもみじの手

豊橋市 藤田千休

笛吹けど肩腰膝のストライキ

客席の茄子と南瓜が姦しい

巻頭を飾る序文がよく喋る

後書きの著者のことばがしおらしい

名古屋市 山本三樹夫

八頭身神が与えた贈り物

苦手には不思議と香る風が来る

一芸のセンスがあつて時の人

着飾って同窓会に妻笑顔

江南市 脇田雅美

足美人外反拇趾に泣かされる

スーパードスマホ片手に妻探す

以下同文後の成果が分からない

家族葬長い人生何だった

大阪市 田中廣子

病癒え神にもらったこの命

いやなことプラス志向でやりとげる

孫粘る可愛さに負け買いました

雨続き被害拡大胸つまる

大阪市 中島 栄子

人生の最後の砦デイサービス
家族です妻ですも無く一人です
あどけない孫の仕草に老い忘れ
夫初盆帰って来たら甘えたい

大阪市 前川 善之

夜遊びで睡眠負債は戻せない
夜空には笑顔見せてる星がある
節電も気を付けましよう熱中症
人間は前に向かって生きるのみ

大阪市 松田 聡

自民党それでも支持をまだ受ける
政治屋は時々赤い舌を出す
美しい国の約束どうなった
丁寧な説明はなく会期末

大阪市 森 廣子

皆老いてうやむやになるクラス会
何のため貼った付箋か忘れ去る
拭えない悲しみ背負う影法師
心無い人がいじくる桃の尻

堺市 梅木 澄空

出不精に馴れてお誘い億劫に
故郷の蛍追っかけ落ちた川
扮装の苦心で防ぐ紫外線
冷房を効かすと困る足や腰

堺市 羽田野 洋介

表情も豊かになった年の功
自分ではまあだまともなつもりだが
手探りでぼつぼつ行くぞ八十路坂
ガイドブックだけは色々揃えたが

堺市 松永 庄三

涙涸れ黙々拾うお骨上げ
居眠りを指で起こすは床屋さん
うわべでも笑顔で介護して欲しい
水溜り若いつもりが飛び越せず

池田市 上山 堅坊

あれそれで話が続く老夫婦
そこかしこ軋みながらも句会場
ニッポンの平和求めて来るツバメ
幾度か火の粉を浴びてこそこの今

泉大津市 助川 和美

元気です三度の食事作ってる
ハガキ値上げメールあるから大丈夫
退院の空の青さに胸広げ
関東だき久しくコロを食べてない

交野市 田岡 九好

とらわれが肩に出てきてパンパンパン
義歯やっと合って嬉しい医者帰り
創作料理なるものたべた気がしない
わが書棚雑然として整えり

河内長野市 穂口正子

若い娘ら雨も弾くか傘ささず

勧誘電話いらんと言えば声にどす

詫びた途端妻が本気で怒り出す

人身事故弾ける音がした

吹田市 岩口のぞみ

わかったよー言うだけ何もせぬ息子

お疲れさん今日も最後は赤提灯

新緑のそよ風浴びて気も新た

ブラジルに勝る暑さと留学生

高槻市 三谷白黒

御主人と実権ないが呼ばれてる

物言うと役やらされるだまっここ

おかえりと聞こえる家は幸せだ

クラス会男女の区別なくなった

豊中市 荒巻夢

チョコ包みつなぎ直した脳回路

デイサービス口が一番よく動き

相槌は右から左生き上手

青いもの死ぬまで抱いて生きてゆく

豊中市 源田啓生

ありのままそれを誇りにして生きる

甘酒の日本酒割りでホロ酔いに

夫婦とは時々喧嘩時に雨

温ごはん私は味噌があれば良い

羽曳野市 磯本洋一

焼肉のにおい混み合う袋小路

ワアワアと街が燃え出し山車走る

七五三祖母もほんのり紅をさす

水しぶき浴びて笑顔のUSJ

羽曳野市 安本美喜

顔のヒリヒリ三十五度の暑さです

甘とうの顔色を見る味を見る

昆虫を追いかけて親子夏休み

缶ビールタオルに巻いて運動会

枚方市 坂本ミヨノ

久方振り敬語使って舌を噛む

空き箱に老人秘密書類入れ

すいれんがポット開いて佛様

はいはいと返事だけ子の笑い顔

箕面市 寺井柳童

前後幼子乗せて若いママ

心ぶらを楽しむ人も様変わり

パーパーデイ調子に乗って池にポチャ

登下校無事を見守るボランティア

八尾市 田邊浩三

付度が悪い言葉で出回った

温暖化どうなるのかと蕾たち

孫曾孫どんな花びら開くかな

卒業式また君が代で論議よぶ

八尾市 前田 紀雄

たればの庶民が夢を買うジャンボ

現代つ子縁台将棋よりスマホ

豆台風梅雨前線刺激する

御喋りのジョギングシューズ直ぐ目減り

八尾市 山川 寧

ウィンブルドン終つて一時抜け殻に

露天風呂飛驒の満月一人占め

ああしんど何遍ゆうたら気がすむやろ

飛驒ラーメン中国人に挟まれて

大阪府 小栢 こずえ

気分転換馴れぬ事して肩が凝る

妙薬は無理せぬ事と早寝する

都合良く聞き漏らしたと言っておく

糠漬で老いの食欲持ちなおす

大阪府 高木 道子

気負わずに生きて今年の梅漬ける

でで虫のスロー一途で振り向かず

九十六の歳すこやかにしサイズ

そこそこの賞味期限は度外視す

大阪府 畑中 節子

星月夜蛙天国植田中

グループの夜の歌姫老いの幸

傘寿でも膝の固まらぬよう散歩

旅プラン地図で一先ず楽しみて

尼崎市 藤田 雪菜

ひとり旅見知らぬ人の情に触れ

あじさいの道を歩いて恋思う

うれしい日悲しい時も天仰ぐ

カラフルな傘で日傘も兼ねさせる

伊丹市 延寿庵 野鶴

踏ん切りをつけると足がリズムカル

ふくみ針そつと本音が入れてある

朱をたしてころろを開く絵の具皿

一人ずつ仮面をはずす露天風呂

岩出市 村中 悦男

補聴器も金もいらない紙上旅

つまずいた小石が高齢気付かせる

道草に猛暑いとわぬランドセル

かさぶたを取つて後悔する焦り

神戸市 奥水 弘

アンコールはしご酒とは言いません

シンブルにネクタイだけは気張っている

長生きの祖父を見倣い腹立てず

ポチでさえ味方のそぶり消えている

神戸市 近藤 勝正

Uターン隣近所の墓石読む

腰を据え幼馴染みの墓に行く

Uターン法要増えて先祖知る

逆走を気遣う妻が隠すキー

神戸市 田 本 古 鈴

負けて勝つそんな芸当ワタシ無理

もう一度夢の続きを迎え酒

梅雨入りて雀も羽が重たかる

輝いて海は無限の絵画なり

神戸市 山 根 弘 華

昭和史に余韻の残るひばり節

ちよつとだけ覗いた趣味に嵌り込み

言訳に愛の心をトッピング

いい妻を演じつづけて早や米寿

川西市 日野岡 和 之

年重ね幸せ重ね老い光る

空梅雨と嘆くな九州大豪雨

有り余る省エネ施策核不要

無いものと思えど気力底力

篠山市 岩 下 さゆ子

またかいな好きになる程嫌われる

生きるわよ酒も応援我が命

耳が留守あなたの愛は今どこだ

愛に生くつかれちゃったよまあ良いか

篠山市 永 井 かほる

据え膳はやはり娘の味がよい

菜園に一番ほしい梅雨旱

友情のぬくもり明日の糧にする

ありふれた言葉の中にあるヒント

篠山市 長谷川 善 輔

八十路すぎ煩惱だらけの悔いばかり

似合わない服着た犬のしたり顔

毎日が猫と留守番時知らず

一生涯登れぬ崖を見上げてる

篠山市 稗 島 照 代

人生は喜怒哀楽の詰め合せ

お喋りは口の体操心晴れ

すやすやと揺りかご電車夢乗せて

独り居に笑い体操福招く

三田市 辻 開 子

熱帯夜温度設定揉めている

色色のサービス受けて生かされて

リハビリはつらい動作が実を結ぶ

ぶらり旅ストレスとろう娘が誘う

三田市 幸 田 厚 子

女心揺さぶり去った憎い人

一歩ずつ杖に感謝でコンビニへ

デパートは外国人の声ばかり

離島移住不便と心地慣れてくる

三田市 馬 場 貴美江

初曾孫産声高く感極む

母乳育日々の成長驚愕す

地獄絵の如く濁流荒れ狂う

映像をみるも恐ろし土砂災害

三田市 松本 ゆかり

雨の日の紫陽花私を見てと言う
あじさい園年寄りただにどつと来る
マイペースといい努力は放棄する
病む不安我儘に換え逝った人

三木市 山口 久子

手本より上手に出来て自笑する
勝手耳食べる事だけよく聞こえ
この暑さつばめわが家にすみついた
九十坂を越せたよわが身ほめてやる

宝塚市 太田 としお

静かなあきつと負けてるタイガース
新聞になんてやねんが天こ盛り
立小便上から見てるお月さま
国会放送じつと聴いてるうちの猫

宝塚市 岸田 万彩

上役の演歌がお開きの合図
憤懣を込めて太目のうどん打つ
多数決に溺れてしまう民主主義
掌の弾力枯らす秋の風

姫路市 中野 忠

朝仕事野菜の機嫌伺いに
手作りのメモ帳園へ定期便
差し出した友の手握り元気出せ
あの津波同じ海とは想われず

和歌山市 北原 昭枝

仏様ごめんなさいと横座り
線香が何か言いたげ燃えのこる
穴いくつ繕ってきた縁の下
やれやれと水を打っては暮れなずむ

和歌山市 倉橋 悦子

柳より打たれ強いと頼もしい
かじられた脛がほろほろ笑う
その風にふっと退屈解き放す
年金の範囲であげる夢花火

和歌山市 鍋嶋 澄子

夕陽うけ棚田のみどりきらめいて
上露が真珠のようにひかる苔
夢の中崖側ばかりなぜ通る
お昼寝は日がな体力もたす術

川柳なごや川柳誌上大会

募集作品 (1題2句詠・2名共選)

「雑詠」	岡田 俊介 共選
「ぐらぐら」	樋口由紀子 共選
「歌」	平田 隆子 共選
「絶好」	安藤 紀楽 共選
	新家 完司 共選
	赤井 花城 共選
	松代 天鬼

出句料 1000円 (切手不可)

締切 9月30日 (消印有効)

投句用紙 規定の用紙または便箋
に4題まとめる。

投句先 〒488-0874

尾張旭市平子町西368-2

宮内多美子 宛

発表 平成29年12月号

主催 名古屋川柳社

新川柳鑑賞

(67)

麻生 路郎

大病の自慢をしかねないその後

(竹 二)

病で痩せ衰えていたが、その後見違えるほどの健康体になった。

「大病をされたようにも見えませんか」

「そうですね、いかな大病も私の精神と摂生にはかきませんよ。このからだを見てください」

「病いぬけされたのでしょうか」

「そうですね、そうですね。人間は時に大病にかかることもよいことですネ。大病は一つの休養であり、その人の人生を更改しますからね。」

聞いていると大病を自慢しかなないようだと云うのである。

病人の心理をグツとつかんで面白。

石の床才力スは鼻で知っていた

(甲 馬)

病院の一室であらう。うごきのとれない

ギブス患者の心境をこの句は巧みにとらえていると思う。ジッと寝ていれば、そこには食欲の現実があるばかりだ。そしてきょうのオカズは何かと云うことが大問題なのである。斯うした患者の常として嗅覚が異常に発達する。附添婦の説明を聞くまでもなく、今日のオカズは鼻が知っているのである。それは患者自身にとっては何でもないことに違いない。それだけに、私たちはこれを悲劇として取扱いたい。そこを作者はキャッチしたのである。

順々に上着をまわし焼香す

(草 右)

告別式で焼香という悲しくも緊張した場面に、順々と上着をまわして焼香したのである。云うまでもなく夏のことで、上着なしで出勤していた連中が、告別式に臨み、たまたま上着を着込んでいた人の上着を順々に借って焼香を済ましたので、誰一人吹き出す人もなかったが、静かにその情景に想到するとなかなかユーモラスである。斯うした笑えない滑稽をキャッチしたところにこの句の面白さがある。

どの黨も貧しき人に味方せず

(冬 二)

共産党のトラック部隊に限らず、どの党

も、貧しい人たちのために全面的に味方でないような気がする。社会党にしても一部の人のためには動くが必ずしも貧しい人達の味方ではない。自民党は云うまでもなからう。政治の貧弱さが叫ばれる所以である。ではどうしたらいいのであろうか。人世の淋びしさをしみじみと思わせられる。

ローソクの消え止む如く肺で逝き

(七面山)

比喩法の句であるが、肺で死んだ人を「ローソクの消え止む如く」と冷やかに評したところ凄愴な感じがする。この種の句は感傷的になりやすいが、この句にはそれがない。死というものを、ローソクの灯が自然に細く小さくなって消えてゆく姿として見たのである。

轢死には虚空を掴む暇もなし

(夜 湖)

轢死があったと聞いただけでも暗らい感じがするのに轢かれた人が死の断末魔に虚空を掴む暇もないというようなことを想像する作者のときぎました神経の冷やかさが思われる。

それでいて、この句を読むと悲劇のユーモアといった劇的な感じがあるので、事象としての暗さが消えている。

英語 de Senryu ⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

すしだけで あんなにしゃべる 妻の客

on sushi alone

my wife's guest

is a talkative woman

うすぐもり 誰か来そうで 来ぬ日なり

dim cloudy sky

it seems like someone will come

but nobody comes

alone だけで *guest* 客 *talkative* おしゃべり *woman* 女性 *dim* 薄暗い *cloudy* 曇り
seem like ~のように思われる *someone* 誰か *but* しかし *nobody* 誰も~ない

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑨コンピューター技師で文学博士

ルミラ・バラバノバ (Ludmila Balabanova, Bulgaria)

第2回国際ハイク大会(2015)に参加のためポーランドのクラコウの空港に降り立った時に会ったのがブルガリアから参加したルミラ・バラバノバでした。初対面でしたが二人とも大会の講演者であることが判り、すぐに親しくなりました。彼女はコンピューター技師であると同時に、俳句研究で文学博士を取得しています。俳句の「語らないこと」の意味を東西の文学から哲学的に論じました。2005年にはブルガリアハイク選集 *Mirrors* の編集をしました。すでに8冊の詩集を上梓し、そのうちの3冊はハイク集です。日本の芭蕉生誕360年祭賞(2004)をはじめいくつかの受賞をしています。彼女のハイクやセンリユ作品には、言葉のイメージに独特の飛躍が見られます。今回は彼女から贈られたハイク集 *motes in the sunbeam*(『太陽光線のかげら』2007)から取りあげます。

the air between us/ trembling/ dinner by candlelight

(二人の間にゆれる気配やろうソクの夕餉)

reading your letter/ a bee/ on the potted flower (君の文読む花鉢にとまる蜂)

Valentine's Day/ in her mailbox/ only bills (ポストには請求書のみ聖バレンタイン日)

summer night/ in the waterless river/ ghosts of fish (干しあがる夏夜の川に魚の霊)

hanging on the thin/ threads of rain--/ a church on the hill

(絹雨に丘の教会掛りおり)

誹風柳多留一二篇研究 51

格外の持参見せものほどに見へ

拾二 22

持参金にわかにくらか十五たつ

安二 札 5

小栗 持参嫁とは思ふが、「十五棹」がわからない。礎稿も引いておられる、持参金にハかに蔵か十五たち

拾二 28

石川 道子・小栗 清吾
細井 龍夫・伊吹 和男
山田 昭夫

清 博 美

426 涅槃にも漏れたで手代どらをうち

石川「涅槃にももれた」ものは猫。涅槃絵に猫は描かれていないところから（但し東福寺の涅槃図は別とのこと）。

安永・天明のころ回向院前に出沒した売女を金猫・銀猫と称した。金猫は一切が金一分、銀猫が同二朱という。手代が回向院前の売女にはまり込んだのであろう。

あこうるん斗ねはん猫に見へ

四 38

山ねこをだまりくとかいに行

一〇 26

清 賛。つけのぼせになるのも間近。

427 空つこと置キなど女房やり込める

石川 遊びに行く前か後か、亭主がいろ

いろ言い繕っているが、女房にしてみればもうわかっている。いいかげんなこと言わなでいいわよ。

女房にへつらい過てけどられる

一三 20

女房にさくらくとうたわれて

一七 16

清 賛。江戸の男達、遊び好きなくせに、女房にはちよつと弱い。

女房にはちよつと弱い。

428 笑らハば笑へ長持が十五さほ

石川 大層な持参嫁である。長持十五棹は厳然とした事実、これを笑うなら笑え。

石川 口説こうと、もう少し近くに來なよ

429 不承知さこゝでも聞へやすといひ

清 ゴロだけのことが、それとも……。

山田 十五は単なるゴロがいいからでしよう。

などの句もあり、嫁に何か関連する数字と思えるのだが……。

十五だの荷に仲人ハはん合羽

安元 札 4

宝 10 札 2

につき、岩波刊の「輪講」で、錚々たるメンバーが「十五」の検討をしておられるが、結論が出ていない。「産後十五」「十五夜の満月で妊娠」などの意見も出ているが、はつきりせず。

十五評通たよふな姫メをとり

十五だの荷に仲人ハはん合羽

という男に、ここでも聞こえますよと答えるのは脈なし。

不承知な娘ひたいへしわをよせ

七11

木娘をくどくハあらばねがおれる

天元梅3

清 賛。

430 舟宿のこし張り見れハむしん文

石川 舟宿で舟を待つ間、所在なさにふすまか壁かの腰張りを讀むと、遊女が書いた無心の文であった。はつきり借金依頼状とわかるものであれば張りはしないであろうが、だらだらと平仮名ばかりで、あちらへ逸れこちらへ逸れしながら書いた女の手紙では、ちよつと見には無心なのか何なのかわからない。

無心文など要らないのもどらった男がそのまま置いていったものを、船宿のおかみさんが、きれいな字だこと、と使ったのであろう。

中宿のこし張りハミなうそで出来

宝11鶴1

中宿のこし張あて名きつてはり

天三815

舟宿が無筆で文もよりどらせ

明二義6

清 賛。昔の人は物を粗末にしなかったのである。

431 山もりに盛ツた薄を二はいくい

石川 八月・九月の二度の月見を吉原で大散財したというのであろう。

あと月の薄がとうかまねくやう

拾七8

二度めに八月も親仁もすこく成

二四9

のちの月は又むす子しやうちなり

安八桜3

清 賛。

432 墓所からこも僧の出るすはらしさ

石川 虚無僧は、武士が仇討ちのため一時的に仮の身分として普化宗の僧籍に入っているものである。どうもうさん臭く、あまり気味のいいものではなかったであらう。これが墓場から出て来てはちよつと引ける。

小栗 この時代の「すばらしい」は「驚

くべきさま、程度のはなはだしいさま、あきれるさま」(「角川古語」)、「古くは、多くのぞましくない有様をいうに用いる、ひどい」(「日国」)の意である。

墓所から出てくる虚無僧は、本来の虚無僧でもなく、道楽息子の洒落の虚無僧でもなく、仇討の虚無僧であるから、「すごいね」「大変だ」「えらいこっちゃ」というようなニュアンスと思う。

清 小栗説賛。

433 九月蚊や女房いかりを書いてつけ

石川 蚊のシーズンもそろそろ終わる九月にはいつて釣る蚊帳には必ず四隅に雁の絵を描くか、雁の形に切り抜いた紙を付けた。風習の由来については蚊が入らないとか、厄よけの呪いとかあり、定かではないそうである。

九月蚊帳に女房が風習通り雁を描いて釣ったが、雁ではなく錨のようにみえるのであろう。

あきはてたかやに雁金ついて居る

寛元誠1

小栗 賛。錨に見えなくもない。

清 賛。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 263名

山菜の穴場は熊のテリトリ

松山市 栗田 忠士

(評)中でもネマガリダケは人間も熊も大好き。熊としては「俺の縄張りを荒らすな」だろう。話し合いができない相手は怖い！

講釈はいらんと笑うピカソの絵

大阪市 平井美智子

(評)感覚で掴んだものを理屈で説明するのは無意味。「解説不要、誰の分析も拒否する」という創作姿勢は自信に裏打ちされている。

小麦粉に負けた戦後の食文化

河内長野市 村上 直樹

(評)日本人が日常的にパンを食べはじめたのは戦後になってから。加えてバスタ、ウドン等に押されて「米」は負け続けている。

フラダンス今日が一番若いから

東大阪市 北村 賢子

(評)明日よりも明後日よりも今日は若い。今は「人生の旬」であり、一日でも無駄にするのは勿体ない。やりたいことをやろう。

伊丹市 延寿庵野鶴
みすめの詩ゆるりとほくもものがある

(評)26歳の若さで没するまでに五百篇以上の詩を書き上げた金子みすゞ。そのいずれもが、物質万能の現代への警鐘になっている。

岡山市 永見 心咲
雲丹もイクラもギフト解体セール後よ

(評)売れ残った中元や歳暮のギフトセットをバラした「解体セール」。中には定価の半額ほどのものもあって、賢い奥さま方に大人気。

沖繩県 森山 文切
死にたての姿に戻される魚

(評)海から揚げられてすぐにカチンカチンにされた魚。解凍したら「さつきまで泳いでいたよう！」だが、それは死にたての姿。

府中市 岸田 武
若者がつまらなそうにスマホ繰る

(評)指先を動かすだけのスマホ。あんなもので若いエネルギーが満足するはずがない。だからみんな仏頂面で俯いているのだろう。

豊中市 木藤こみつ
失恋をしたら東尋坊へ行く

(評)華厳の滝と並んで「自殺の名所」と言われている東尋坊。崖を覗いて「やゝめた」と戻って来たら、また楽しい恋ができる。

和歌山市 磯部 義雄
国会に愛想つかして昼寝する

(評)ぬらりくりのコンニャク問答を聞いて

いると眠たくなってくる。が、昼寝をしていると「戦争の出来る国」にされてしまう。

島取市 前田 楓花
地獄にもたくさん友が待っている

河内長野市 梶原 弘光
死の怖さ教えてくれぬ死んだ人

堺市 近藤 治子
川の字で眠ったところがハイライト

京都市 清水 英旺
今年もまた半分過ぎて悔いている

河内長野市 辻村 ヒロ
保育園の子達に逢える散歩道

松原市 森松まつお
不機嫌なボクに機嫌の悪い妻

岸和田市 雪本 珠子
愛猫が今はわたしのセラピスト

堺市 遠山 唯教
ミサイルに備えてかぶるヘルメット

河内長野市 木見谷孝代
早起きは三文の得熱帯夜

橿原市 安土 理恵
灼熱の恋です猛暑に負けられぬ

沖繩県 島尻 卓
うりずんの風がやる気に乗せてくる

八尾市 村上ミツ子
必勝と書いてあっさり負けました

香芝市 大内 朝子
雑草の生気煎じて飲むとする

頭痛薬他人のせいにしない主義
佐賀県 真島久美子

聞く耳を持つけど遠い耳も持つ
羽曳野市 吉村久仁雄

天の川温暖化していませんか
芦屋市 竹山千賀子

後ろから見てくださればナイスガイ
岡山市 丹下 凱夫

生臭い話に元氣取り戻す
河内長野市 山岡富美子

楽勝と決めてはみ出す勇み足
三原市 鴨田 昭紀

じわじわと自慢話が加速する
神戸市 松井 文香

しげしげと蟻を見ながら庭掃除
三田市 福田 好文

クチナシの香りナツメロ連れてくる
三田市 福田 好文

バブル期に奢ってくれた友が逝く
青森市 守田 啓子

嘘つきを当てるゲームじゃないのです
広島市 岸本 清

赤子抱き歩きスマホの母に喝
赤子抱き歩きスマホの母に喝
勝負めし食べて出かけるパチンコ屋
海田市 小谷 小雪

柿の葉がすだれ代わりになっている
お達者へ常温の水飲んでいる

タコ焼を頼張りながら戎橋
枚方市 丹後屋 肇

バーゲンがウインクしてる誘ってる
大阪市 宇都満知子

そこから中時計はあるが無いトイレ
鳥取県 竹信 照彦

一か八かを座右の銘にしています
大阪市 谷口 義

念力を送りあなたの鈴鳴らす
尼崎市 山田 耕治

二の腕が太ももくらいある私
三田市 上田ひとみ

幸せはおいしいゴハン旨い酒
橋本市 石田 隆彦

多目の酒はひとり居の乱である
西予市 西田美恵子

メイド・イン・ジャパン自慢の私です
笠岡市 藤井 智史

やはり見た目でんとう虫とゴキブリと
毒を吐くことは心のデトックス
結婚をすれば満塁ホームラン
八王子市 川名 洋子

電車乗りビールのように冷やされる
ヘソクリをたんまり持つて落ち着かぬ
三田市 谷口 修平

前世は絶対男と思う妻
補聴器と思つていたらイヤリング

手も口も活発ラッキョ選果場
鳥取県 門村 幸子

カレーにはラッキョ決まってるだろう
大阪市 栃尾 奏子

珈琲も人も本物は粗挽き
松江市 石橋 芳山

あちこちで私を責めている狼煙
富田林市 中村 恵

アクセルとブレーキ狂いだす独り
三原市 笹重 耕三

父の日はほんに普通の日曜日
堺市 村上 玄也

近頃は憎たらしいなカーブ女子
藤井寺市 太田扶美代

げっそりは一人もいないクラス会
うるさいほど聞きたかったなアイラブユー
弘前市 高瀬 霜石

ポケットマネー平均額はいくらだろう
新しいコインロッカー鍵がない
八尾市 山根 妙子

あやかっけ知的棋盤が品切れに
魚偏の湯呑みで上がり出る鮎屋
東大阪市 佐々木満作

ストレスが溜まらぬように手抜きする
自己管理しても病は忍び寄る
大阪市 江島谷勝弘

べっぴんに腕を組まれたどないしよ
ビール党きつとわたしは霜降りだ

堺市 大和 峯二

川柳で生きる力がよみがえる

宝塚市 田中 章子

句会出る細胞までが活気づく

神戸市 富永 恭子

菜園はやめぬ作句の種が減る

池田市 上山 堅坊

イチ押し壺を知りたい五七五

大阪市 田中ゆみ子

炎天へ五七五をぶらさげて

島取市 山下 凱柳

選漏れてがっかりしては柳誌閉じ

大阪市 藤田 武人

大吉を引いたが全句没でした

明石市 桃谷 和郎

車中では本1寝る2スマホ3

西予市 黒田 茂代

髪を切る寝癖のつかぬ短さに

三田市 北野 哲男

さあ米寿上半身はまだ老いず

沖繩県 禱 ももと

盆の窪指圧で脳の代謝良く

男鹿市 伊藤のぶよし

ご無沙汰を言いあうように逢う葬儀

箕面市 広島 巴子

ご先祖の眠る墓にも過疎の波

倉吉市 牧野 芳光

食べてごらんと季節外れのキノコ

東京都 川本真理子

イケメンである必要のないあなた

神戸市 細川 花門

水槽の竜宮城に亀が棲む

岡山県 田中 恵

裕次郎節が得意なガマガエル

福井市 伊藤 良一

ローン終え残尿感がすつと消え

島取県 斉尾くにこ

タダだって要らないものはもう要らぬ

高槻市 片山かずお

惚けたふりしたら惚けたと思われた

三田市 久保田千代

思い出せない何時かどこで会った人

唐津市 坂本 蜂朗

光らない背を子供らに氣遣われ

倉吉市 山中 康子

歳とればこんなもんだと腹くる

豊中市 水野 黒兔

にわか雨京は古刹で雨宿り

岡山県 山縣のぶ子

脱線の思い出ばかり積んでいる

宝塚市 太田としお

閻魔さまにもきつと通じる袖の下

鳥取県 山下 節子

定年後社長家業の米作る

東かがわ市 川崎ひかり

田に水を入れに行くにも自家用車

大阪市 古今堂蕉子

夏はTシャツ軽くて安くジャブジャブ

岸和田市 宮野みつ江

ちよつと派手ハワイみやげのアップパー

鳥取市 夏目 一粋

生真面目な人だ金でも動かない

河内長野市 原熊知津子

名札付けちよつぱり照れる地場野菜

三田市 堀 正和

やっぱりね六甲おろし春の季語

大阪府 米澤 俣子

コックピットのような新車に手が出ない

大阪市 井丸 昌紀

鍵掛けず待つているのに福の神

松山市 郷田 みや

言わなくていい事をつい立話

奈良県 長谷川崇明

平仮名もさっぱり読めぬ書道展

鳥取市 倉益 一瑤

ルンルンと昨日と違う明日がくる

篠山市 酒井 健二

大道の野崎参りの芸に酔う

生駒市 飛永ふりこ

勤務時間蟻もあるのか夜は見ぬ

高槻市 富田 美義

持つ箸を落とせば脳の赤信号

寝屋川市 籠島 恵子

かしこくなあれ素直になあれ鏡文字

羽曳野市 中川ひろ介
柳友が新たな僕の飲み仲間

大阪市 田浦 實
老いもよし若さ又よし縄のれん

香南市 桑名 孝雄
盃が僕の履歴書ですどうぞ

鳥取市 岸本 孝子
私がいると陽気な酒になる

枚方市 寺川 弘一
焼酎のお湯割り文化遺産だよ

豊中市 藤井 則彦
吟醸酒が染みる夜長の差し向かい

和歌山市 古久保和子
干し蝶叩いて旨い酒がある

神戸市 山口 光久
嬉しいとき悲しいときも酒が友

米子市 竹村紀の治
労わりも励ましも注ぐ手酌酒

三田市 多田 雅尚
飲み会も政治の話題抜きにする

茨木市 藤井 正雄
大正のロマンくどくど祖父の酒

橿原市 居谷真理子
まずビールそれから聞こう君の愚痴

那覇市 前川 真
くどい愚痴聞いてビールで洗う耳

弘前市 福士 慕情
腹の虫宥める酒がまた暴れ

富田林市 山野 寿之
ゆらゆらと水母にも似た千鳥足

松江市 中筋 弘充
玄関で正気に戻る酔っ払い

藤井寺市 鈴木いさお
お酒呑むために葉を飲むのです

札幌市 三浦 強一
末期には口に流して欲しい酒

奈良県 安福 和夫
禁酒令出たらおそらく暴動も

三田市 村田 博
岡本太郎グラスの底に顔残し

豊橋市 藤田 千休
階段で挙動不審のスマホたち

河内長野市 渡邊 修
スマホ止め座席譲った稀な人

堺市 澤井 敏治
ケータイの届く範囲を泳いでる

神戸市 能勢 利子
あとひとりケータイ持たぬ友が居る

鳥取市 田中 天翔
無くしたものはウエストだけで恙無い

シドニー 坂上のり子
世代チェンジかい男また消えて行く

熊本市 杉野 羅天
あじさいにバラ刺し愛でるラテン系

大阪市 柴本ばつは
詐欺電話いっぺんうちへ掛けてんか

山口市 青木 隆子
笑い講鐘打ち鳴らす自信あり

宝塚市 岸田 万彩
水音に般若心経混じる滝

羽曳野市 宇都宮ちづる
肩腰脚シッパだらけで元気です

鳥取市 谷口回春子
健康の友は鼻歌ウオーキング

池田市 太田 省三
ゴージャスだ手すりが五本あるトイレ

防府市 坂本 加代
待つことのひとつが過ぎてまたひとつ

枚方市 山口弘委智
耳も眼も長生き途中修理中

横浜市 川島 良子
十人十色 幸せというカタチ

河内長野市 坂上 淳司
形見分け残った位牌取る末子

高槻市 松岡 篤
出来栄えを見せてドヤ顔割烹着

沖縄県 あらさくら
もういいよもういいかいと探し物

富田林市 肥山 一文
ストレスは僕の辞書には載ってない

米子市 中原 章子
今の世に義理は残って情すたれ

和泉市 横山 捷也
長生きをしていますため息ついてます

共選欄

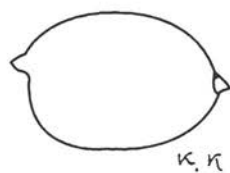
檸檬

檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 327名)



「あっぱれ」 山口 光久 選

七十歳過ぎてあっぱれババになる
親送るまで頑張った脚と腰
あっぱれの極み難敵に塩送る
五欲まだびんびんしてるまだ傘寿
みなに感謝感謝で白寿旅立った
あっぱれな嘘ばかりのご答弁
あっぱれだ椅子を綺麗に拭いて去る
虚弱児の負けん気が生む甲子園
あっぱれと心で叫ぶ子の勇姿
逆境に耐えてあっぱれテープ切る
あっぱれな奴だほろほろまで粘る
あっぱれの影に血の汗血の涙
眞子さまの和服外交あっぱれね
上手上手言われてきた逆上がり
花嫁を連れて帰ったUターン

大阪府 米澤 徹子
唐津市 坂本 蜂朗
羽曳野市 吉村久仁雄
香芝市 大内 朝子
西予市 黒田 茂代
三田市 福田 好文
福井市 伊藤 良一
貝塚市 石田ひろ子
岡山県 田中 恵
江南市 脇田 雅美
米子市 生田 和之
和歌山市 坂部紀久子
鳥取市 福西 茶子
大阪府 神野千恵子
和歌山市 古久保和子

「あっぱれ」 斉 尾 くにこ 選

フライングブレイ敵も味方もなく拍手
ちゃらんぽらん妻の支えで無事定年
菜園も生き生きしてる一人者
被災地にホタルが戻る町づくり
七十の手習い孫と英会話
あっぱれな裸に惚れて添い遂げた
一筆啓上耐用年数越えました
お医者から妻の料理を褒められる
母卒寿数独本を買いに行く
あっぱれのシール夫に貼ったげる
あっぱれが欲しくて農で生きている
断捨離に死後あっぱれと言わせた
十四歳将棋ブームを巻き起こす
あっぱれな生き様三十四歳の命
あっぱれな質問投げる女性記者

札幌市 三浦 強一
鎌山市 長澤 喜弘
三田市 辻 開子
河内長野市 中島 一彌
堺市 村上 玄也
倉吉市 田中紀美恵
大阪市 津守 柳伸
宝塚市 田中 章子
香芝市 山下 純子
鳥取市 前田 楓花
米子市 伊塚美枝子
神戸市 松井 文香
神戸市 奥澤洋次郎
横浜市 川島 良子
大阪市 藤原千恵子

爺ちゃんに似たかあつぱれみな酒豪
九十七歳バスが見えたら走り出す
百歳で一人暮らしという気骨
お医者から妻の料理を褒められる
病気せずお金残して逝かはった
あつぱれな答辞恩師をちよつと刺し
恋の矢は真ん真ん中を貫いた
居酒屋のはやきに拾う知恵あまた
卒寿なお棚田を守る父の鍬
おとなりの朝顔わが家の窓に咲く
身を守るコツをつかんだ転び方
清貧で家族思いの父だった
三人目あつぱれ腹を蹴る胎児
天晴といえぬ議員が闊歩する
完走のビリへあつぱれなる拍手
口止めを健気に守る桜貝
ようやった頑固親父の笑い皺
あつぱれと言われてみた精を出し
切られ役みごとスタントマンだった
オレオレを撃退妻の肝っ玉
終活やめて預金はいいて一人旅
最高の演技見事な金メダル
九十二母のペースで恙無い

京都府	三宅	満子
神戸市	能勢	利子
大山市	金子美千代	
宝塚市	田中	章子
大阪市	柴本	ばつは
唐津市	仁部	四郎
大坂市	栃尾	奏子
枚方市	山口弘	委智
松山市	栗田	忠士
寝屋川市	森	茜
紀の川市	辻内	次根
大坂市	樋口	眞
香南市	桑名	孝雄
豊橋市	藤田	千休
鳥取県	石谷美恵子	
枚方市	海老池	洋
三田市	尾崎	一子
雲南市	永見	安子
寝屋川市	平松	かすみ
京都府	清水	英旺
桜井市	安土	理恵
弘前市	斉藤	苅
大坂市	原田	すみ子

あつぱれはわが心臓に古時計
大観の作と名園双璧に
「嫌いです」嫌いな人に言いました
流石!!阪神タイガース8連敗
あつぱれを一日ひとつ書いてみる
アッパレと叫ぶと返す伯耆富士
右アッパレ効いてチャンピオンのダウン
PKO無事に帰って来たみんな
14歳上衣着てからの一札
十四歳のあつぱれ文句ありません
声に出し時々自分ほめてます
核兵器禁止条約あつぱれだ
逆らった子等は私を越えて行く
役人の矜持許せぬから漏らす
有るものをないとは言えず声上げる
病気せずお金残して逝かはった
あつぱれとわたしを褒めているビール
キラキラと余計なもの無い暮らし
あつぱれがいつものように出社する
いたいけな喪主が見事に述べる謝辞
戦力外それでも隅で咲いている
あつぱれな力士に鯛がよく似合う
俺が死んだら好きにしてくれこの体

札幌市	小沢	淳
生駒市	飛永	ふりこ
瀬戸内市	東横	ますみ
神戸市	細川	花門
岡山県	山縣	のぶ子
鳥取県	竹信	照彦
枚方市	丹後屋	肇
海田市	堂上	泰女
長岡京市	山田	葉子
枚方市	寺川	弘一
雲南市	永見	安子
大坂市	川端	一步
紀の川市	楠原	富香
大洲市	中居	善信
大坂市	樋口	眞
大坂市	柴本	ばつは
沖繩県	森山	文切
大坂市	栃尾	奏子
寝屋川市	龍島	恵子
弘前市	福士	慕情
高槻市	原	洋志
鳥取市	永原	昌鼓
宝塚市	太田	としお

あつぱれと言われ小馬鹿にされている

高槻市 片山かずお

最後まであつぱれのまま終りたい

晋屋市 黒田 能子

大金星息子にすぎた嫁が来た

河内長野市 木見谷孝代

あつぱれを勝ち取るまでの汗涙

三田市 上垣キヨミ

嘆かせた器量で乗った玉の輿

藤井寺市 太田扶美代

いたいけな喪主が見事に述べる謝辞

弘前市 福士 慕情

二重丸貫って石が光り出す

大阪市 升成 好

呱呱の声あつぱれ屋根をつきぬける

鳥取県 橋本 整

七十年打つ心臓のこぶし大

榎原市 居谷真理子

風穴を明けた都民よあつぱれだ

堺市 源田八千代

コツコツとためみんな寄付して逝きはった

八幡市 今井万紗子

十秒へ挑む若者あつぱれだ

三田市 堀 正和

有ったもの無いとは言えぬあつぱれだ

鳥取市 岸本 孝子

生真面目な父は無遅刻無欠勤

唐津市 山口 高明

小池さんあつぱれ首都の霧晴らす

鳥取市 岸本 宏章

役人の矜持許せぬから漏らす

大洲市 中居 善信

ゴミ袋提げて応援サポーター

三田市 谷口 修平

あつぱれな男わたしを嫁にした

大阪市 古今堂蕉子

人情に溺れましたかでは無罪

弘前市 高瀬 霜石

秀 句

全力を出し切りました負けました

佐賀県 真島久美子

ファインプレー敵も味方もなく拍手

札幌市 三浦 強一

化けて出る位の意地は持っている

大阪市 平井美智子

全力を出し切りました負けました

佐賀県 真島久美子

あつぱれな答辞恩師をちよつと刺し

唐津市 仁部 四郎

あつぱれの声聞きたくて投げ返す

岩出市 藤原ほのか

おとなりの朝顔わが家の窓に咲く

寝屋川市 森 茜

コンビニのおにぎり最上段に鎮座する

海南市 小谷 小雪

九十七歳バスが見えたら走り出す

神戸市 能勢 利子

点々とあつぱれな死が夏の道

東京都 川本真理子

ナスキュウリよくぞ曲ってくれたなあ

岡山市 丹下 凱夫

君が代に立たず終わりを耐えて待つ

篠山市 酒井 健二

言い負けてごめんなさいと言えました

鳥取市 大前 安子

三人目あつぱれ腹を蹴る胎児

香南市 桑名 孝雄

あつぱれな男わたしを嫁にした

大阪市 古今堂蕉子

ひまわりが小さく見える十五歳

池田市 太田 省三

三才を総管めにする青い薔薇

岡山市 永見 心咲

平和の灯七十二年続く国

大阪市 小野 雅美

あつぱれは私を産んだ母である

鳥取市 倉益 一瑤

控え目な口調で金星が喋る

三原市 笹重 耕三

人情に溺れましたかでは無罪

弘前市 高瀬 霜石

損得を抜いて若さを輝かす

紀の川市 辻内 次根

秀 句

踏み台にせよと差し出す玩具箱

姫路市 古川 奮水

七十年打つ心臓のこぶし大

榎原市 居谷真理子

一学期の百点をまだほめている

佐渡市 高野 不二

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

子の育ちぶりよキャビンのベッドにて

元旦も蜘蛛は姿を変えられず

十二月子のやわらかき踞

十二月三十一日も傍観者

旅ごころ旅の前夜を慎むも

君おもう熱もまじれる風邪の熱

紹刺する余生を埋めゆくような

一枚になれば銀杏の葉の形

羽根ペンで書きし嘗ての文学よ

城のある町への旅は恋に似る

日向ぼこ梅干の種口にあり

人生薄暮空より降りし奴風の顔

悪銭を分かち淋しさを分かち

パチンコ屋大人は大意抱かざる

遠き人を北斗の杓で掬わんか

めし時の時計の針の親しさよ

結婚をしてもハートのジャックたり

旅に出て雀の声も新しや

飼猫へやさしき言葉旅帰り

思案まとまり雨垂れが落つ

ままごとでいわしさんまはわびしいぞ

蝶の妍極まればわが誕生日

稲妻に南紀州となりにけり

あぶら足安サラリーを象徴し

驚の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

進む時計遅れる時計夫婦かな

因襲は亀の甲羅の重たさだ

月光に眠れぬ新しい墓石

禽檻にいる殊に寂しき海の鳥

大きな滝になろうと思う父の日に

「試す」

(投句 199名)

松山芳生 選



指先で舐めて決めてた母の味
大地震生さる情熱試される

口先の男を試す丸木橋

この世では試したためされ生きている

力量を試されているハブニング

お試し品いつも麗句に乗せられる

てるテル坊主の力を試してる

天災にまた試されるヒトの知恵

優しさを試しにちよつと拗ねてみる

試着してそして現実知るシヨック

陪審員も裁判官も試される

マスカンの世辞が試着の背を押す

七変化わたしの根っこ試してる

隠れん坊愛情試す下心

試されているのか寒くなる背筋

試されてバラは真紅に咲きました

ミサイルに試してみますニュー日傘

薄情な男にもらう風邪ぐすり

本物の愛に駆け引きなど無用

舌先にちよつとあなたを乗せてみる

札幌市 三浦 強一

熊本市 杉野 羅天

大洲市 花岡 順子

倉吉市 山中 康子

犬山市 金子美千代

山口市 青木 隆子

鳥取市 夏目 一粋

豊中市 水野 黒兎

三田市 北野 哲男

香芝市 大内 朝子

倉吉市 牧野 芳光

豊橋市 藤田 千休

生駒市 飛永ふりこ

京都市 榎本 宏子

神戸市 山口 光久

長岡京市 山田 葉子

堺市 澤井 敏治

富田林市 片岡智恵子

富田林市 中村 恵

紀の川市 辻内 次根

仮の世と戒められて生き延びて

石投げて相手の出方ひそと待つ

試着した時は似合って見えた服

言い訳はいつもサンブル化粧品

試験管一滴あれば曝けだす

矢印を信じてこぼこ道を行く

一枚の紙が前途を試し切り

やっぱりね大吟醸はキレがいい

わざと皿割ったお菊の胸の内

膝頭ほんと上がるか右左

お試しが底なし沼の第一歩

テイスティング舌がわかった顔をする

佳句

地球儀に体温計を当ててみる

今日の運試しに夜を開けてみる

酒3日抜けば高校生になる

試さずに信じて愛は訴える

イエスなら踏めるマリアは踏めません

人

試みに持った6B離せない

地

試食する勇氣と恋をする勇氣

天

友情を試した事を恥じている

軸

年末はジャンボ有馬で締め括る

シドニー 坂上のり子

伊丹市 延寿庵野鶴

堺市 村上 玄也

塩竈市 木田比呂朗

西脇市 七反田順子

海南市 小谷 小雪

富田林市 山野 寿之

三田市 上田ひとみ

松原市 森松まつお

岡山市 永見 心咲

下松市 有海 静枝

萩原 狸月

池田市 太田 省三

松江市 石橋 芳山

弘前市 高瀬 霜石

大阪市 古今堂蕉子

樺原市 居谷真理子

池田市 上山 堅坊

佐賀県 真島久美子

藤井寺市 太田扶美代

「センス」

(投句 206名)

酒 井 紀 華 選



さりげないセンスが光る山野草
シシブルな暮らしの術に憧れる
着こなしのセンスは自信持つことだ
売り込みのセンス抜群棒グラフ
センスよいあなた選んだ私の眼
巧い句よりセンスが光る命の句
センスなどどうでもよいと愛一途
髪形もおかしなセンス北のドン
案山子たちセンス競って立つ棚田
普段着に巻いたスカーフ物語る
豹柄好き見慣れた街にある温さ
お笑いのセンス神からもろた人
金儲けのセンスがまるで無他家系
派手なカオ地味を着こなすいいセンス
嘘さえもセンスがなくて直ぐバレる
センス良い男のウソに溶けてゆく
向日葵が咲くバジヤマにも下着にも
付度で心のセンス推し量る
流行に流されないでいるセンス
政界を泳ぐセンスが生臭い

米子市 伊塚美枝子
河内長野市 大島ともこ
香芝市 大内 朝子
生駒市 飛永ふりこ
富田林市 関 よしみ
和歌山市 上田 紀子
倉吉市 山中 康子
堺市 坂上 淳司
橋本市 石田 隆彦
弘前市 稲見 則彦
西宮市 福島 弘子
松原市 森松まつお
河内長野市 梶原 弘光
奈良市 米田 恭昌
米子市 生田 和之
和泉市 横山 捷也
佐賀県 真島久美子
鳥取市 夏目 一粋
堺市 村上 玄也
南あわじ市 萩原 狸月

センス無い野次の一言四面楚歌
かき分ける直感力は親譲り
人間のセンス疑う箸づかい
付度がどうあれセンス崩さない
強面がセンスに富んだジョーク言う
山頂で詩人にさせる雲の色
出世には縁ない靴だけど磨く
究極のセンスやつぱり思い遣り
嘘をつく男テレビに顔ゆがむ
行きずりの女性のセンスへ釘づけた
アクセント入れて古着は生き返る
八十のセンス曾孫に褒められる
佳 句
御曹子五歳きつちり正座する
江戸の粋関西の艶はんなりと
幸せな時間あなたの良いセンス
カメレオンのすぐ保護色になるセンス
お洒落だな緋のモンベよく似合う
人
少年はセンス鋭い駒を打ち
地
塩むすびひとつにもある美のセンス
天
下町のセンス宇宙を研磨する
軸
絵手紙にセンスしのばせ夏の恋

奈良県 長谷川崇明
塩竈市 木田比呂朗
三田市 上垣キヨミ
四條畷市 吉岡 修
豊中市 水野 黒兎
海南市 小谷 小雪
弘前市 高瀬 霜石
海南市 堂上 泰女
篠山市 酒井 健二
鳥取県 石谷美恵子
防府市 坂本 加代
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 柴本ばつは
羽曳野市 中川ひろ介
三田市 上田ひとみ
池田市 上山 堅坊
大洲市 中居 善信
八尾市 山根 妙子
鳥取市 田中 天翔
弘前市 福士 慕情

初夢教室

題一充電

居谷 真理子

〔推敲〕すいこう 詩文を作るのに字句を
さまざまに考え練ること。

作句するうえで推敲の大切さと言うまでも
ありません。助詞を変えたり、上五と下五を
入れ替えたり、別の言葉を探したり……。結局
元の句に戻ることもあります。推敲の努力
は次の作句へとつながります。作りっぱなし
ではなく、句を育てるのも楽しい時間です。

(原は原句 参は参考句)

原 病床の妻の笑み見て充電し

敏 昭

充電という言葉は固いですね。

参 病む妻の笑みに力が湧いてくる

原 雨続き読書三昧充電す

治 子

参 充電の読書三昧雨続く

原 ザアと湯が流れ壺湯で充電中

里 子

参 湯があふれ壺湯わたしの充電器

原 里帰り充電出来た妻の顔

旅 人

参 里帰りしてきた妻の生きの良さ

原 句作りのスランプ脱す充電後

福 貴 子

何をして充電したのでしょうか。

参 句作りのスランプ脱す旅帰り

原 充電をし過ぎて朝の大欠伸

(生) 和 之

参 充電のし過ぎ吐き出す大欠伸

原 ウォーキング日曜日には寝坊する

隆 子

参 ウォーキングやはり休もう日曜日

原 全没に実践の本あさり読む

一 平

ひとひねり欲しいです。

参 全没にいまに見てろとあさる本

原 じっくりと力をためて受験の日(斉)宏 子

難はないのですが勢いをつけてみました。

参 じっくりと溜めた力を受験の日

原 充電は食う寝る遊ぶそして飲む

知 津 子

参 充電は食う飲む遊ぶそして寝る

原 姦しく人の噂で充電中

(高) 道 子

参 充電の噂話で咲かす花

原 残業の背中の中並ぶ赤垣屋

まさる

赤垣屋、大阪の飲んべえには分かりますが

全国的にはいかがなものか。

参 くれたびれた背中が並ぶ立ち飲み屋

原 充電を忘れ携帯使えない

風 露

参 充電を忘れケータイ無表情

原 のらくらりと充電続く老後かな のり子

参 のらくらと充電ばかりしてる老い

原 猛暑日は充電中と蔵の中

律 子

参 猛暑日は蔵に逃げこむ昼下がり

原 一時の充電然れどアルコール

(前) 洋 子

参 一時の充電だけどアルコール

原 稀勢の里まず充電をしてごらん なつみ

優しい句です。体の大きさを連想させて

参 たつぷりと充電なさい稀勢の里

原 ロボットの充電弱音吐きながら 雅 美

このロボットは人間のことでしょうね。こ

の先を詠んでみました。

参 充電が済めばロボットの顔に

原 多読して右脳左脳にカッツを入れ さくら

参 本積んで右脳左脳に入れるカッツ

原 草花が雨にうたれて充電中

(見) 温 子

草花に充電という言葉は不似合いで

参 草花が力をためる雨の中

原 昼寝につきもすぐに切れます赤ランプ 厚 子

ごめんなさい、分かりにくい句です。

参 昼寝してもすぐに点きます赤ランプ

原充電もしないで廻る地球独楽 孔一

参充電もせずに廻っている地球

原補聴器の充電忘れ静か朝 勝治

参補聴器の充電忘れこれも良し

原バラの香ににがむし顔もわらい皺 恵子

参バラの香が心に満ちて出る笑顔

原本を読み充電してる海馬にも ひでお

参じわじわと海馬充電する読書

原週末は身体と心の充電日 弥生

参週末は充電のためあるんだよ

原一日中充電しては嫁おこる (山) 久子

参一日中充電ですかお姑さん

原老老もたまのお肉で充電だ 開子

参老夫婦充電の日の神戸牛

原晩学の無い知恵絞る充電中 (畑) 節子

参晩学の小さい知恵を積んでいく

原充電が終り酔客千鳥足 洋一

参充電を終えたか路地の千鳥足

原充電へ余裕かましてシヨッピン (山) 明子

参充電へ厚い財布でシヨッピン

原家族旅行母子充電父放電 のぞみ

参家族旅行母子充電父放電

原サラ川風で好き嫌いの分かれる句。だれの

参妻と子に充電させる家族旅

原真夏日に麦茶ごくりと喉仏 こみつ

参真夏日の麦茶喜ぶ喉仏

原コーヒーをゆっくり飲みて充電す 澄子

参コーヒーの充電タイム引きのぼす

原生きたる欲腹に充電元氣出る ミヨノ

参ごちそうを食べて出てくる生きる欲

原一日の充電タイム長くなり (大) 安子

参去年より充電タイム長くなり

原ケイタイ人も今夜寝て充電す 勝正

参ケイタイは充電ボクは夢の中

原母の日は心に充電寝て過ぐす 紀美恵

参母の日は充電中と寝て過ぐす

原世に隠れ飛び立つときを伏して待つ 俊雄

参世に隠れ飛び立つときをゆるり待つ

原安近短旅し充電しています こずえ

参充電の旅も安近短で良い

原ぐうたらだつてイエ充電をしています 亜希子

参ぐうたらと見せて充電しています

原我が人生充電不足反省す 清司

参来し方は充電不足だったなあ

原充電をし過ぎ娘に根が生える 澄空

参充電が過ぎて娘が嫁がない

原さりげなく充電をして人に会う 雄大

参充電が済めば会いたい人がいる

原ロボットの充電忘れ掃除バス (田) 廣子

参充電を忘れお掃除ロボのスト

原格好つけ充電期をと言うニート くみ子

参充電期ですとニートは悲びれず

原バスツアー充電どころか疲れ切り 寧

参充電を使い果たしたバスツアー

原お静かに只今私充電中 弘華

「お静かに」、印象深い詩句です。それだけ

によく見かける氣もします。

参充電中私に話しかけないで

〔佳句〕

充電器忘れた旅で落ち着かぬ 紀美代

小刻みに一休みする老いの足 一彌

さみどりの森にどつぶり浸かります 忠士

これからも夫は私の充電器 美穂

晩学に辞書を練っては蓄える 昭枝

充電をしてもなかなか出ぬ一歩 (貝) 正子

充電と放電混じる縄のれん 真

〔今月の推せん句〕

充電の脳使い切る午前中 門村 幸子

美術館濁く心に満たす水 長谷川 崇明

夕方に電池切れたと飲むビール 伊塚 美枝子

川柳塔鑑賞

同人吟 福士慕情

— 8月号から

初孫が土産娘の里帰り

三浦 強一

こんな嬉しいことはない。里帰りの日を
幾日待ち侘びたことだろう。どんな土
産にも勝る最高のお土産である。初孫を
抱く作者の様子が見えるようである。

使わずに大事にしてる夫婦箸

榎本 日の出

箸は使ってこそ価値がある、箱に入っ
たまの夫婦箸、夫婦で旅行した時のお
土産とか、知人から貰った高価な塗箸、
使われることもなく戸棚の隅に仕舞われ
ている。

バソコンは出来るが帯は結べない

三宅 満子

華やかな振袖を着て成人式に出席する
娘さんの殆んどがスマホやバソコンはお
手の物である、が慣れない着物の着付け
は出来ない、母親やお祖母ちゃん、美容
院の世話になる。

どっこいしょどこかで軋む音がする

小谷 集一

元氣よく返事はしたがどっこいしょ

菅田 かつ子

川柳塔みちのくの創立者の一人である
工藤甲吉氏の句碑が青森県平川市の猿賀
公園にある。「人生はよいしょこらしよに
どっこいしょ」懐かしく思い出させてい
ただいた。

臨月に拍手希望の明日が来る

村上 直樹

子供が出来たときの喜び、きつと未来
を背負う子が産まれると確信、出産は母
子共に健康であれと祈る。

狭い道私が譲る他はない

岩佐 ダン吉

自他一体とは仏教の教えである。歩い
て来た道で、ふと振り返ると直ぐ後ろか
ら若者が早足で迫ってくる。気持ちよく
ここは譲ってやろう。

愛してた夫の手紙宝物

書いてみる相手のいないラブレター

井上 照子

愛する夫が亡くなった、生前に貰った
手紙を何度も読み返しては生きる力に
なっている。毎日の日記はまるで亡夫へ
のラブレターである。

公園に誰も座らぬ日のベンチ

寺川 弘一

公園のベンチに誰も居ないほど淋しい
ことはない。何時もの人はどうしたのだ
ろう。病氣かしらと思ったりする。鳩も
首を振りながら不安そうである。

爪先で夏雲蹴って逆上がり

山口 弘委智

逆上がりの句は多いが夏雲を蹴ると言
う目附に脱帽。得意そうに逆上がりする
少年。蹴られた夏雲も微笑んでいる。

あつという間にひと昔ふたむかし

鈴木 いさお

「光陰は矢より迅かなり、身命は露より
も脆し」と道元禪師も言っておられる。
生まれてから此の方、人生そのものがあつ
という間である。老いるに従って、年
時間の流れが速くなる。

振られる度に好きなタイプを入れ換える

上 田 和 宏

理想のタイプがあつても成就しない恋はナンセンスである。理想から次第に離れていくことに躊躇はあるが、現実にあつた恋を選択する。

ゲームセットは嬉し涙で飾りたい

山 口 光 久

悔し涙を流すより、努力した汗を発揮して勝利したいものである。波瀾万丈の人生も終焉には周囲の人達に「ありがとう」と感謝の涙を流したいものである。

赤鉛筆小さなミスも見逃さず

山 口 美 穂

「校正の眼がさかさまの田を見つけ」高橋散二、真剣な目でミスを見逃さないように校正をしていても、誤字、脱字が無くならないもどかしさ。

炎天に心が晴れぬ八月忌

上 垣 キヨミ

「八月や六日九日十五日」という句を目にしたことが有る。私の弟家族四人が濁流に吞まれたのも八月、川柳の師、波多野五楽庵先生が身罷つたのも八月、忌月である。因みに私の誕生日は八月。

幸せに気づかぬ人がよく愚痴る

福 田 好 文

傍から見れば充分幸せそうに見える人が家の内情を吐き散らしている。これって、自慢しているのかな。

どちらかが杖になる日がいつかくる

田 中 章 子

子供等が巣立ち、二人っきりの生活、共に支え合い過ぎた日々も老いには適わない。老化が進み、身体が不自由になる。認知症が出てくる。出来るだけ杖になるうとしても、最後は医療に任せる。

食欲が出て点滴もほっとする

武 本 碧

ホームの妻が、食事を摂らず六ヶ月で20キロも体重が下がった。病院へ入院、拘束をされ、点滴をしてひと月半、現在は顔色も良くなり流動食を食べている。

放流の鮎へ園児ら手を振つて

古久保 和 子

バケツに鮎の稚魚を入れて、川縁から鮎を放流する園児、キラキラ光る園児たちの目と川面の輝きに稚魚は勇んで流れに乗る。解禁日には大きくなった鮎を狙って釣り人が入る。

例会で寂しい話はかり聞くと

成 田 雨 奇

特に、古い町の老人会の例会は寂しい限りである。入院をしたとか、特養に入つたとか、計報があつたりで黙祷から始めることも珍しくない。

病む妻に男料理の腕上げる

伊 藤 玲 子

妻に臥されては、男はたまつたものでない。家事は殆ど妻任せだった。食事は妻にレシビを聞きながら何とか挑戦しているがこれがなかなか様になっている。

警鐘を鳴らす五体に気付けない

石 原 淑 子

友人が十日ほど東京へ行つて来ると言う。何か用事があつての事と思つたら、腎臓ガンを取つてきたとのこと、痛みも何も無く普通の暮らしをしていたと言う。

偶然の出会いがあつて導かれ

岡 本 花 匠

人生を思うとき、偶然とは自分にとつてまさに必然であつたと気付く。世の発明家も、偶然から名を成した人も多い。偶然に良き師に出会えたことに感謝。そして今あるのは師のおかげ。

水煙抄鑑賞

— 8月号から

福西茶子

肌合いが似ててくつろぐ初対面

前川 真

本当にこんな人いらつしやいます。

私も、柳友に初対面で惚れ込んだ方がいます。長年付き合っても緊張する人もいるのに不思議です。

婆ちゃんにお呼びがかかる針仕事

近藤 治子

昔取った杵柄。任しとき。婆ちゃんの出番は沢山。孫への内緒のお小遣い、親に叱られた時の砦役など。目を細めて糸通している姿を想像しています。

ままごとの姉妹に戻りたくなった

真島 久美子

姉妹っていいですね。子育て中は忙しくてなかなか逢えないし、時間に余裕が出来てくると自分の体が動かなくて逢えない。今の間にお喋りしてください。

返納の話夫をどう説くか

土井 輝恵

同感です。我が家も悩みの種です。人は、全く能力が落ちたと自覚してないので厄介ですね。特に田舎では、車は必需品ですから。

永久齒いつの間にやら総入れ歯

島村 つばき

私のサブリは諭吉かもしれぬ

田賀 八千代

私より農機ローンが長生きだ

山端 なつみ

さば読んだ歳で割引き取り逃がす

梅木 澄空

思わず笑ってしまいました。総入れ歯、見た目は歯並びが良くて綺麗ですよ。外れなければ。諭吉さまを沢山持てば毎日が楽しいはず。唸るほど儲けてくれる農機具ならローンも苦にならない。見栄をとるか金を取るか微妙……。若く見られたのなら諦めはつきますね。

皺かつぎ畑に出れば若返り

畑中 節子

野菜は作り手を裏切らない。誰にも邪魔されない畑で存分に若返ってください。

被写体になると雑草美しい

西田 美恵子

少々色黒で皺有りでも写真なら大丈夫。素朴な物こそ美しい。人もまた同じ。

よく噛んで早く食べると無理を言う

小畑 宣之

誰ですか。こんな矛盾したことを言うのは。急いでは喉に詰まります。ゆっくり楽しんで食べてこそ幸せなんです。

赤ちゃんの足形押した鯉のぼり

禰 もと

こんな可愛い鯉幟もあるのですね。ニッポンの宝の誕生をお祝いしましょう。

電話詐欺あるところにはあるんだね

中村 毅

あるんですね。一人三千万円の被害額と先日ニュースで言っていました。人を騙して儲ける輩に天罰を下したい。

オーイハイ後はどうでもいい会話

倉橋 悦子

微笑ましい情景。用事も無いのに呼ばないでよ忙しいのだから……は私の日常。

おい妻よボクの取説読み直せ

岸田 万彩

閃白もここまでくると見上げたもの。



男のきもち (2)

年頃の娘が美しくなることを言った諺では「娘十八番茶も出花」があります。元は「鬼も十八」でしたが、「鬼」のキツさを嫌って「娘十八」となってきたようです。

確かに、年頃の女性が目鼻立ちの形を超えて美しく輝いています。それは、異性を惹きつけるための自然の配慮であり、そのお陰で人類も連綿と種を残し続けています。

ああ妻が自由の女神だったころ

柵木 充義

遙か昔ミロのヴィーナスに出会った

竹信 照彦

横系になっておくれとプロポーズ

藤原 鬼桜

その昔美しかった人という

足田 真也

妻だけと思えるうちが華なのだ

江端 克己

煎餅を齧りながらテレビを観てケラケラ笑っている妻にも、「自由の女神」や「ミロのヴィーナス」のように光り輝いていたときがあった。キザな言葉で口説いてようやくゲットした美しい妻。「世界で一番の妻を持った俺は幸せ者だ」と思っていた頃が人生の華だったのでしょうか。

法律にあつても妻にない時効

山本 宏

惚れたのは僕で発言権がない

藤田 武人

一日に三度も妻に叱られる

森松まつお

女房も山口組も恐ろしい

岸本 清

来世では優しい人を妻にする

増田 敏夫

口喧嘩したときに出る「あの時」は10年も前のこと。また、夫婦の力関係は「どちらが惚れているか」によって決まるよ

うです。何度叱られてもハイハイと謝るのは「事を荒立てずに円満に」という優しさであり度量の大きさです。次の世は「もう少し優しい人を」と密かに願っているも、さて、思い通りになるかどうか？

手帳には太字で記す妻の留守

藤井 則彦

Vサイン妻が三日も留守という

村上 直樹

奥さまへ「いつてらっしゃいごゆつくり」

桑崎 士郎

さて何を楽しまますか妻は留守

坂上 淳司

大の字になって寝てみる妻の留守

木原 広志

奥さまが留守にする日は「私だけの祝日」で手帳に花丸を入れてウキウキ。近場のバス旅行で一日だけの留守でも嬉しいのに三日もいないとは万々歳！「いつてらっしゃい、どうぞごゆつくり！」と送り出したあとは何をしようとする。取り敢えずは大の字になって深呼吸。しばらくの間は独身貴族に戻って「のびのび」です。

妻の留守アチアチと目刺し焼く

奥村 五月

出来るだけ食器使わぬ妻の留守

大隅 克博

妻の留守何と自由な不自由な

福田 好文

妻病んで不意に停電したような

岩淵 黙人

妻臥せて朝からメシのことばかり

岡田 史郎

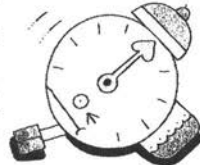
しかし、奥さまの留守にホッとできるのも「すぐに帰ってきてくれる」という安心感があること。イザ一人になってしまつと、酒の肴を作るのも飯の支度をするのも面倒。

まして病に臥せられると自分まで意気消沈してしまいます。やはり、「亭主天氣で留守がいい」と同じように「妻も元気でときどき留守がいい」というところでしょう。



(投句194名)

夏の甲子園各地の代表校が熱戦を繰り広げています。



しかし、猛暑の真っ只中で選手たちは大丈夫なのかしらなどと心配してしまつて、昔の甲子園はこんなに暑くなかつたよなあなんて独りブツブツ言う始末。天気予報では東の方では気温が低く日照時間も少ないとか、またまた野菜の高騰が心配されたりして大変です。ちよつとボヤいてしまいましたネ。

弘前市 稲見 則彦

円周率ぐわんぐわんと悩めぐる

(評) えんえんと続く円周率の数字、それが今、頭の中をめぐっているという。ちよつとパニックかも？

唐津市 仁部 四郎

歴史の一瞬睡魔襲いくる

(評) 絶対に見逃したくない歴史的瞬間、

ガンバッテ起きていたのに、ああ、その一瞬を見逃すとは何てことでしょう。

篠山市 酒井 真由

ワタクシモ年代物ニナリマシタ

(評) 昔の教科書、あるいは電報文を見ているようです。カタカナ表記が不思議な感覚を生み出していますね。

鳥取市 谷口回春子

いつか来るきつと来るはず青い鳥

(評) 幸せの象徴青い鳥、それが来るのをひたすら待ち続けます。でも、足元を見ればもう来ているかも知れません。

大阪市 井丸 昌紀

昔からずっと十二時なんだけど

(評) 自分は変わらないのに周囲が変わることで評価が変わってくる、よく聞く話ですけどね。

四條畷市 吉岡 修

政権の最後のボースらしいです

(評) 一強と言われ続けていたけれど、少うし弱りも見えてきたりして。組閣替えて復権なるか、それとも…。

高槻市 富田 保子

デジタルで時計回りがわからない

(評) デジタル時計しか知らないと(時計回り)なんて言われてもね。ダイヤル式の電話も若者は知らないのですから。

枚方市 海老池 洋

残り時間ゆつくり妻と食べている

(評) いいですねえ、ゆつくりと過ごす妻

との時間。食べている、という表現がまた素晴らしい。

紀の川市 辻内 次根

ダリの絵を見てきてからのことらしい

(評) あの、グニヤリと垂れ下がった時計のことでしょうか。時間に対する感覚が変わったとしても納得出来ます。

沖繩市 禰 ももと

神様も人の心を試すはず

(評) 神様が心を試しておられる。それが分かった時、人はどう思うのでしょうか。より謙虚になればいいのですが。

松山市 栗田 忠士

お静かに今は発酵中ですの

八つ当たり今日も振られてきたらしい
米子市 八木 千代
大坂市 藤田 武人

ピカドンの記憶伝える記念館

河内長野市 山岡富美子

過去形に足を取られる影法師

生駒市 飛永ふりこ

残業をわざと仕掛けて恋の邪魔

男鹿市 伊藤のぶよし

後期高齢体内時計大丈夫

和歌山市 上田 紀子

たこ焼きのいい香りする夢の中

横浜市 川島 良子

九秒の壁へ男たちの戦

青尾市 黒田 能子

忙しい一日でした ばたんきゅう

鳥取県 竹信 照彦
ハウス栽培売りの旬を狂わせる

西宮市 西口いわゑ
ケンケンパもはや出来なくなり候

和歌山市 磯部 義雄
戦争へ時計の針は戻すまい

豊中市 松尾美智代
私の起きる時間に寝る夫

神戸市 奥澤洋次郎
生き急ぐことはないけど世の格差

犬山市 金子美千代
寅さんが帰って来たゾお祭りだ

三田市 北野 哲男
寝たふりで雲行きを読む反主流

米子市 生田 和之
枕投げ終わりで中三どの夢

大阪市 江島谷勝弘
そらそうだと休みたいときあるだろう

札幌市 小沢 淳
十秒を切るか切らぬか問題だ

大阪市 寺井 弘子
煩惱の地酒がしみる旅の宿

香芝市 大内 朝子
束の間の逢瀬に時が気をきかす

弘前市 福士 慕情
宿六の足音がする二十四時

佐賀県 真島久美子
偏頭痛するほど働いていない

塩竈市 木田比呂朗
子の刻にガスの元栓思い出し

鳥取市 田中 天翔
傷心に効く置き薬あると良い

弘前市 高瀬 霜石
なんじやいな夢の中にも妻がいる

橿原市 居谷真理子
目が覚めたらしいこの世に在るらしい

吹田市 須磨 活恵
この磁石桃源郷を指している

三田市 足立つな子
若いなあ棋士と学業頼もしい

大阪市 古今堂蕉子
だるまさんが転んだ嘘をついたから

三田市 谷口 修平
赤い糸よくよく見れば蜘蛛の糸

松山市 石橋 芳山
月光が眩しい誰か月を射よ

箕面市 広島 巴子
シルバーも夢はまだまだシンデレラ

藤井寺市 鈴木いさお
目覚めても野際陽子はいない

八王子市 川名 洋子
今になり教育勅語聞こうとは

大阪府 米澤 俣子
無視無言これほどつらいことはない

沖縄県 宮 すみれ
エサねだる金魚優雅な時をくれ

東大阪市 佐々木満作
後がない終活急かすゴング鳴る

和歌山市 武本 碧
うっかりとする間に歴史作られる

大阪府 小野 雅美
夢の中小さな母をぎゅっと抱く

熊本市 杉野 羅天
二つ目のベルに脅えています

朝 水野 黒兎
居眠りはそこに枕があつたから

横浜市 菊地 政勝
哀れにも夫婦ゲンカのとばちり

松江市 相見 柳歩
大丈夫キミも今日から自営業

大阪市 奥村 五月
鯨には鰻登りの真似できぬ

岸和田市 宮野みつ江
会わなけりやよかつた彼の変わり様

鳥取県 門村 幸子
朝起きるガバツと起きる負けられぬ

笹岡市 藤井 智史
射抜かれた愛なら心地良い痛み

尾道市 大本 和子
寝溜め食い溜めどちらも私得意技

大阪府 田中ゆみ子
この人の味方生きている限り

11月号発表 (9月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句



追悼

和香ちゃん、ありがとう

川上 大輪

和香ちゃん、本名、松尾和子。（享年82歳）

昨年の全日本愛媛大会で15年連続参加の表彰を受け、知名度は全国区、柳友も全国各地に多く、親しみを込めて「和香ちゃん」と呼ばれることも多かった。初めてお会いした人でもすぐに打ち解けお友達になる。人を引きつける、そんな魅力を持った和香さんだった。「20年連続までは頑張る」と言っていたのに……。元気だったら17日は札幌に向けて出発していたのに、何を勘違いしたのか天国へ旅立ってしまった。

昨年11月頃に病が見つかり、それから半年余り、まだまだこれからなのに還らぬ人となってしまったのが残念で悔しくてならない。

和香さんのお人柄は、皆さんの思っている通り。見た通りで、いつもにこにこ笑顔を絶やさず、優しく、温かく、そして心配りの出来る本当に「いい人」そのもの。何事にもコツコツと地道に努力をする人、飾り気のない本当に素のままの人だった。

誰からも愛され、慕われ、頼りにされる責任

感の強い人、一緒にいると、まるで春の陽だまりの中で日向ぼっこをしているような温かさの感じられる人であった。

車の中ではご家族の話が多く、何時も楽しそうに話してくれた。そして、曾孫は私のことを「和香ちゃん」と呼ぶんですよ、と嬉しそうなお顔で話してくれたこともあった。

病が見つかったから和香さんが突然、「私が元気なうちにお礼を言っておきます。本当に長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。」と言いだした。私は「何を言うてるの、同じ病でも、気づかんうちに治った人もいるし、病と付き合いながら、頑張ってる何年も生きている人もおるし、それに誰が先に逝くかは分からん時代やし、心配して治らんやったら心配したらええけど、もっと楽しいことを考えな、そして「いつのことか分からんけど、万が一あっちの方へ和香さんが先に逝ったら、私が追悼文を書かなあんのやから、そんなことになったら、和香さんの悪口ばかり書くで」と言ったら、「ええよ、なんでも書いてよ」と笑いながら、「少しは

気が楽になったわ」、と言ってくれた。それが本当に書くことになるとは……。悪口を書くとは言ったものの、気になった短所も無く、強いて挙げれば「人が良すぎる」「何か頼まれると断りきれない」ぐらいしか思い浮かばなかった。

いつもにこにことしていて、面白いところも沢山あった。それはちょっと頑固でせっかちで、ビクビクした時の驚き様は正に天下第一品、見ている方は大笑い。失礼かもしれないが、そんなお茶目で楽しく可愛い一面もよく見せてくれた。

告別式で頂いたご挨拶に「母の笑顔は皆の心にいつまでも……」そして「長い間、家族を第一に考え、頑張り続けてくれた母です。自分のために時間を使い人生を謳歌する姿が私たちにあってどれほど嬉しかったことか。病が見つかったから今日まで精いっぱい闘っていられたのも、生き甲斐と趣味が励みになっていたからだったのでしょう。」末文には「今頃母はきつとお世話になった皆様お一人お一人を見つめ、感謝で手を合わせていることでしょう。」と結ばれていた。温かいご家族に囲まれ幸せな人生を送られた和香さん。思い出は数え切れませんが、和香さんの笑顔は皆の心の中でいつまでも生き続けています。

戒名は嫌和香ちゃんのままでもいい

大輪 合掌



追悼

平嶋美智子さんを偲ぶ

川端 一步

平嶋美智子さんが、6月5日に亡くなりました。彼女の川柳歴は13年余りですが、本当に素晴らしい足跡を残してくれました。

「川柳教室を家で作っているので美智子さんもやりませんか」と誘うと「ハイ川柳は作ったことないですが、少し教わったことがあります」と早速教室に参加されました。教えて下さったその人とは川柳塔社の大先輩、本間満津子さんです。

美智子さんは、以前大阪市の福祉関係の仕事をしており、満津子さん宅にヘルパーとして、目の不自由な満津子さんの身の回りのことをお手伝いされておりました。「川柳の本も何冊か頂いた」と言っておられました。

美智子さんは明るい性格で、句も明るいものが多いのですが、その奥に常に優

しさが滲み出ていました。それは満津子さんの影響だと思っています。美智子さんが川柳を始められて以後どこへ行くにも私と一緒にしました。本社句会では常に並んで座りました。いくつかの教室のアシスタントもして貰いました。気易さ、明るさ、優しさの性格はどこでも喜ばれました。

昔の仕事柄でしょうか、人に喜ばれることは進んでする気性ですので、近くの幼稚園児や小学生相手に手話を教えたり、昔ばなしをしたり、時には社会活動をしたりの日々で「身体が2つか3つ欲しい」が口癖でした。あの元気な美智子さんが、昨年10月癌で余命二ヶ月と医師に宣告されました。「二カ月とはあまりにも短か過ぎる」気丈な美智子さんですがに涙声でした。あれから七ヶ月闘病の日々をどう過ごされたのかと思うと……。

通夜の席で息子さんと娘さんから丁寧なご挨拶を頂きました。「母は川柳を教えて頂いたお陰でどんなに楽しい日々を送ったことでしょう」と。葬儀の日「母は太陽のような人でした」このご挨拶で参列者全員の悲しみが和らいだ一瞬でした。柩には川柳塔誌6月号が入れてありました。黄泉で満津子さんと読んでおられることでしょう。

何かにつけて行き届いた心くばりをされた美智子さんの作品を紹介します。

かわいかった孫もおっさん顔になり
古里の不義理の陰が消えやらず
夏もいいな枯れること無き石清水
終章は予定には無い遙か先
青空のぼっかり雲に母が乗る
地平線あの上あたり我が余生
句が抜けてうれしさあまり杖忘れ
しっかりと大地を踏んで来たつもり
自力では送れぬ暮らし近いかも

平成27年度各地柳壇受賞作品
終電車明日に向かう人ばかり

本社 八月句会

◇八月七日(月)午後一時
アウイーナ大阪

迷走台風が関西に上陸止揚かという七日、八月句会は悪天候にもかかわらず九九名(内投句七名)の参加で開催された。

今月のお話は村上直樹さん。題は「無名のユーモア作家・大西文次」。直樹さんがお住まいの河内長野市に、長柳会を創設された文次氏。氏は74歳で川柳を始められ、95歳で生を終えるまで、駆け抜けるように多くの足跡を残された。ほとんど無名の方だが、亡くなる直前まで水煙抄に投句された大先輩である。今、忘れられがちなユーモア川柳の妙味を、私達に思い出させる素敵な句を紹介していただいた。

九十五骨董品の仲間入り

文次

恒例の歌は「海」。台風も尻込みする楽しい語り口に、私達は時を忘れていた。

(真澄)

月間賞は江畑哲男さん(我孫子市)

(司会)蕉子・真理子(脇取)千代・まつお

(受付)篤・純子(清記)憲彦

席題「一枚」 江島谷勝弘 選

とりあえず一枚噛んで隅に居る一枚の舌では政治屋動まらぬ
一線を越えたな一枚の写真
一枚のメモから秘密洩れてくる一枚だけが本物の札束
聡太くんに一枚落ちて勝てません戦地からのハガキ一枚宝もの一枚が飢えを救った芋畑
一枚の辞令が一生涯するうちの娘も一枚からむ少子化よ
一〇八円に諭吉出してるおばあさん
首の皮一枚残る助け船
一枚で気楽に涼むアツパツバ
たった一枚のCDにアルバムを移す
あと一枚二次会辞退タクシー代
名刺一枚大の男をねじ伏せる一枚の干物を猫と分け独り
朝一枚は食べ過ぎですと栄養士
いなせな夫婦一枚岩で店栄え
豪華客船も板子一枚下地獄
地獄へだて行けるカードを持っている
遺言状この一枚に縛られる
札一枚きつと諭吉が入ってる
あと一枚吞もうか宝くじ買うか

古今堂蕉子 油谷 克己 内藤 憲彦 小山 紀乃 村上 玄也 川端 一歩 津守 柳伸 水野 黒兎 山口 光久 上山 堅坊 緒方美津子 村田 博 酒井 紀華 藤村 亜成 穂口 正子 山本希久子 水野 黒兎 上田 和宏 古今堂蕉子 坂上 淳司 太田扶美代 伊達 郁夫 穂口 正子 山岡富美子

PITAPA一枚で日本中を巡る旅よく喋るうらみつらみの離縁状招待状一枚ジャンケンポンをする一枚が一千万になる古札
びん札がビタリ一枚付いていきコイン一枚今日の私のおこづかい浴衣一枚母の形見に取つてあるチケットのもう一枚が来ぬ隣祝儀袋一枚足らんとも言えず片道切符だけで飛び出た若かった一枚のピザで胸やけ持てあます

佳

一億円札を一枚持っている
あと一枚十五日まで諭吉さま
一枚は保身用です二枚舌
ハートのエース取つたのは僕である
恨めしいどう数えても足りぬ皿

人

チャーシューが一枚多い店で昼
炙りイカ一枚で三合飲める

地

天

軸

一枚上手敵はおしぎを深くする
千円を貸したけど返えせと言えぬ

木藤こみつ 山口弘委智 丹後屋 肇 清水久美子 金川 宣子 山本希久子 松尾美智代 山野 寿之 島田 誠一 小林 わこ 森松まつお

居谷真理子 宇都満知子 升成 好 木嶋 盛隆 油谷 克己 村上 直樹 新家 完司 吉村久仁雄

兼題「犬」 松尾美智代 選

飼犬に噛まれ上司は窓ぎわに隣に留守番頼む旅の朝飼主の機嫌上目で見えて散歩飼犬に噛まれそれ以後猫派です
 朋長短足お前は俺になぜなつく犬が一番三四がなくて六がばく名犬で美人にばかり尻尾ふる
 盲導犬静かに坐る頼もしさ遺産話子犬も横に来て座る
 狎くしゃと睨めつこして負けましたここ掘れと教えてくれませんかシロ徘徊の父を犬が連れ帰る
 ハーネスを解かれ甘える盲導犬ハチ公は過労死だったかも知れず放された犬もわたしもすぐ戻る
 ドロドロの救助犬にもご褒美を犬よりはお役に立てる積もりです
 両脇に大川の字で寝ています
 野良犬の自由が欲しい僕ペット半助は犬が相伴する土用
 血統書犬はそんなの知りません僕よりも高いチワワのトリミング
 番犬のくせに誰にも直ぐなつく八月忌愚直な犬と正座する
 よく吠える犬で近所に嫌われる

奥村 五月
 米澤 寂子
 山根 妙子
 水野 黒兎
 藤村 亜成
 榊本 宏子
 藤田 雪菜
 藤原 大子
 伊達 郁夫
 村上 直樹
 坂上 淳司
 坂上 淳司
 古今堂蕉子
 坂上 淳司
 西出 楓楽
 前 たもつ
 山田 耕治
 坂 裕之
 柴本ばつは
 山野 寿之
 津守 柳伸
 宇都満知子
 内藤 憲彦
 村上 玄也
 初代 正彦
 片山かずお

私に似たのか犬もちよつとドジ笹揺れる犬の名前も揺れている主人より犬を益々好きになり犬並みの鼻で不祥事あばく記者この暑さ犬もわたしもまるでトド犬と猫俺より先に食事する
 犬の目に主人が一番低い地位着せ替えに犬の気持は無視される犬猿の仲と言われて共白髪
 試食したドッグフードは不味かった
 コーンフレックにそっくりである犬の餌吠える犬私のように恥ずかしい

山本 昌代
 太田扶美代
 榎本 舞夢
 上垣キヨミ
 田中 章子
 坂 裕之
 藤村 亜成
 原田すみ子
 木嶋 盛隆
 鈴木いさお
 木藤こみつ
 江島谷勝弘

負け犬の遠吠僕もそのひとり尻尾振らぬ犬を捨てゆくトランプ氏ホームレスと呼ばれる人がつく犬小太りでわたしに似てるシャイな犬
 ありがとう盲導犬に救助犬

山崎 武彦
 上山 堅坊
 居谷真理子
 細川 花門
 太田としお

四匹目の犬と長生きごっこする
 少子化の隙間を埋めている子犬

太田扶美代
 伊達 郁夫

子供らに命教えてポチは逝く
 秋田犬の駅長がいる五能線

西出 楓楽

兼題「スープ」 太田扶美代 選

お見合いもスープの音でまた破談コトコトとスープは音をたてるものスマホは止めてよスープ冷めるから隣には長女が住んでいるスープ
 野菜スープのやさしさというルビー婚うわずみを一匙いとけない口に塩分控え目ボク専用のスープです
 食欲の無い子に冷えたスープでもブイヤベース潮の香りの隠し味ポタージュスープに妻の存在感みそ汁もスープも冷める距離がいい
 一杯のスープ災害地の絆
 スープ冷めない距離でしよつちう揉めているうれしいなスープの冷めぬとこに孫
 激辛のラーメンスープ暑気払い暑気払い冷たいスープに限ります
 スープ一口疲れた心はぐしてく呑み助の夫の朝はしじみ汁
 鶏ガラのスープ鉢ごと平らげる
 じつくりと煮込むスープがわたし流
 良し悪しスープさめない距離にいるまぼろしのスープを飲んで若返る
 深酒を朝のみそ汁意見する
 スープ冷めぬとこに娘がいる自慢飲み会の締めはミソ汁が絶品

藤井 則彦
 池田 純子
 内藤 憲彦
 小島 蘭幸
 小島 蘭幸
 居谷真理子
 江畑 哲男
 若松 雅枝
 澤井 敏治
 山本希久子
 田中 章子
 内田志津子
 村上 玄也
 太田としお
 古今堂蕉子
 小林 わこ
 藤原 大子
 澤井 敏治
 丹後屋 肇
 内藤 憲彦
 内田志津子
 清水久美子
 福田 好文
 松尾美智代
 江島谷勝弘

味噌スープカボチャスープでボケ防止

スープのさめない距離でもめています

ポタージュを飲むのでエブロンして貰う

酔ってもスープの味は分かるらしい

もの思いスープ優しく混ぜている

具たくさんの母のスープに近付けず

そら豆のスープは白い皿が好き

御御付け日本の朝をすすする音

麦スープも米のスープもだあい好き

今はもう母より妻のお味噌汁

音立てて満足示したいスープ

点滴からスープに 命よみがえる

佳

じゃがいのスープはわたくしの十八番

麵つゆにどぶり一気に夏暖る

機嫌良い時はスープの味も良く

鬼に金棒私には出しの素

ちよつといひ話へ特製のスープ

人

仲直りできてスープ温める

地

不機嫌な妻のスープは塩辛い

天

ちよつとスープ濁る程度の意趣返し

軸

音させて吸るスープの通である

兼題 「つくづく」 棄原 道夫 選

つくづくと好きな論吉に嫌われる奥村

知名度の低さつくづく味わった

不思議な縁一番嫌いやったのに

つくづくと眺めてつかむ三段腹

つくづくと平和はいいな盆踊り

子育て中何度思った親の恩

不調法わたしの子です仕方ない

つくづくと足の形も私の子

温暖化つくづく思う子の未来

ガラ系自慢つくづく俺はメカ音痴

美辞麗句つくづく甘いコマーシャル

生きるとはつくづく自分とのいくさ

じつと手を見る暇もなく八十路来る

水面下に何があるのか考へる

つくづくと思案の末に妥協する

父見ればつくづく似ての見栄っ張り

このバックつくづく我が身知りつくし

ああ我慢一つよいとこありました

つくづくとスキマ隙間にある情け

若さいいなつくづく思う一夜漬け

つくづくと味方は一人いれば良い

チラシ見てこんなものかと家族葬

このハゲート言われつくづく鏡見る

つくづくと眺め夫はこんな顔

つくづくと見る爆睡の妻の顔
薄化粧つくづく妻の美しさ
五十年料理下手から抜けぬ妻
寄せ書につくづく下手な私の字
不器用やなこの子やっぱ私の子
つくづくと顔を見直す二枚舌
馬鹿さ加減つくづくゆれる洗面器
怪我をしてつくづく歳を知らされる
つくづくといい人生と車椅子
晴耕雨読こんな自由が欲しかった
長生きをするかつくづく考える
平均寿命越えてつくづく手相みる

佳

つくづくとついてない日は二度転ぶ

つくづくと独りはいいな淋しいな

女だけ長生きしてもつまんない

つくづくと顔眺められ人違い

反省はしないと今だから言える

人

曲がり角つくづく生きている痛み

地

海を見ているかてふたりで見た海を

天

来し方をつくづく思う逆上がり

軸

つくづくをほじくっている妻楊子

鈴木いさお

村上 直樹

古今堂蕉子

藤井 則彦

内田志津子

永田 紀恵

酒井 紀華

小山 紀乃

榎本 宏子

江畑 哲男

藤井 則彦

加川 靖鬼

升成 好

太田扶美代

山本加お里

加川 靖鬼

立蔵 信子

田中ゆみ子

小島 蘭幸

澤井 敏治

天

澤井 敏治

天

天

天

兼題「背く」 村上 玄也 選

身に覚えあつて背く子叱れない
流れに背いて舵とり重くなる
ラブレター封も切らずに返された
背かれて背かれて知る片思い
少しだけ背きたくなりブチ家出
揺れながら背いて耐えている風鈴
ビール一杯主治医の顔がちらついて
父に背き今は息子に背かれる
車座でそんなことちやちや入れる
胃が脳に背いてばかりダイエット
気休めの嘘病人の目を背け
自然に背いて地球が揺れている
凜として背いた肩に父の影
志曲げいやらしく金を貯め
若作り裏切っている背の丸み
階段の途中でイヤとこねる足
三つ兎でもいやなことは背を向ける
付度が大事と民に背く官
現役が内部告発する矜持
面従腹背官僚高笑い
ギクシヤクと背く擬音の尾骶骨
背かないけれど爆発力もない
反抗期バンド緩めたまま闊歩
強要にあくまで背く黙秘権
逆らった子は許せても夫は無理

福田 好文
米澤 俣子
石田ひろ子
山崎 武彦
藤原 大子
小林 わこ
田中 章子
鈴木いさお
柴本ばつは
原田すみ子
升成 好
能勢 良子
酒井 紀華
長高 俊雄
山岡富美子
新家 完司
指宿千枝子
坂上 淳司
内藤 憲彦
細川 花門
山本 昌代
山岡富美子
初代 正彦
丹後屋 肇
穂口 正子

権力に阿ない人ボクは好き
背いては懺悔で済ます二枚舌
背徳に忸怩お盆に蚊を潰す
子が背くきつとDNAのせい
背いたら剥がされますぞ濡れ落ち葉
気付かせず妻はとつと背いてる
もう一度妻に背くと殺される
ベットまで背く素振りだ職がない
少年の反抗大人へのジャンプ
たまの寄席謀反の脳に活を入れる
平和への願いをミサイルが背く
反抗期返事はノーと決めてある

川端 一步
澤井 敏治
村上 直樹
片山かずお
藤井 則彦
上田 和宏
木嶋 盛隆
山本希久子
山野 寿之
島田 誠一
油谷 克己
池田 純子

佳

慣例に背いて偉い前次官
背かれた火種がひとつ掌に残る
気ばかり走る体の制止振り切つて
ダイエットの苦行へ胃袋が背く
四度目は仏に耳を背けられ
人

水野 黒兎
酒井 紀華
大久保眞澄
鈴木いさお
升成 好

地

だんだんと私に背きだす五体
パソコンも妻も娘もよう背く
天

居谷真理子
森松まつお
新家 完司

軸

実物に背き続ける顔写真
いやいやを覚えて一次反抗期

兼題「丁寧」 小島 蘭幸 選

反則キップ切るお巡りの丁寧語
予報士が今日は布団を干せと言う
あそこまで書いていいのか週刊誌
丁寧は耳傾ける町の医者
包装が丁寧過ぎて勿体ない
戴いたとても立派な包装紙
丁寧なお辞儀日本人だらう
丁寧の説明すれば首が飛ぶ
ていねいな荷造り登山家の命
晩酌を丁寧にして今日閉じる
丁寧な答弁閣を深くする
君だけに手書きのメール差し上げる
ていねいな挨拶頭上げられぬ
応答が丁寧きつと苦勞人
丁寧は少女がくれた ありがとう
丁寧に聴くのはもつと難しい
びつしりと楷書で書いたアンケート
恐ろしや妻の無言と丁寧語
丁寧に生きて二人の皿洗う
丁寧に使えば一日は二十五時
料理には手を抜きません五目豆
瓦礫から思い出拾うボランティア
丁寧な亡母畳紙に生きています
丁寧にメシベとオシベから話す
年賀状丁寧な人二枚来る

福田 好文
上垣キヨミ
太田としお
宇都満知子
山根 妙子
中村 恵
村田 博
江島谷勝弘
緒方美津子
上田 和宏
丹後屋 肇
山崎 武彦
片山かずお
山本 昌代
森 廣子
山田 耕治
森松まつお
西出 楓葉
石田ひろ子
山本希久子
松尾美智代
大久保眞澄
津守 柳伸
山田 耕治
川端 一步

丁寧に断わることも礼儀です
 丁寧に締めたネクタイほど歪む
 ざあます夫人も絶滅危惧種だと思ふ
 滴まで念入りに飲み干すラムネ
 折り鶴の四隅をゆるがせにしない
 丁寧に折らねばならぬ千羽鶴
 座布団のゆがみ直してから辞する
 10円の誤差も出さない報告書
 丁寧なお辞儀マニユアル通り也
 丁寧に書かねば書けぬ薔薇の文字
 お寺さんには丁寧にお茶入れる
 丁寧に歳を重ねてゆく積木
 佳
 一時間モヤシのヒゲを取っている
 お便りは一つ残らず取つてある
 丁寧に暮してお金溜めはつた
 丁寧語に替えたただね安倍総理
 丁寧に生きている昆布出しイリコ出し
 人
 丁寧に生きた証しの台所
 地
 無印の今日をきれいに折りたたむ
 天
 丁寧に言つてはならぬ避難指示
 軸
 丁寧に髭剃るネクタイを結ぶ

山口 光久
 藤井 則彦
 清水久美子
 初代 正彦
 木本 朱夏
 木藤こみつ
 新家 完司
 立蔵 信子
 細川 花門
 木藤こみつ
 藤井 宏造
 山岡富美子
 森松まつお
 新家 完司
 榎本 宏子
 坂上 淳司
 居谷真理子
 穂口 正子
 木本 朱夏
 江畑 哲男

句会 燦 燦

七月句会を読む 弘 津 秋の子

文豪が座れば椅子も文化財
駄句だつて知的財産だと思ふ

升成 好
安福 和夫

「財」という席題から「文化財」「知的財産」という言葉を見つけたところで一歩リードした句である。

額いたただけで火の粉が飛んで来た

平井美智子

「火の粉」を見たことがある。急逝した夫への想いを句に込めて提出していた友に、講師のT先生から撒が飛ぶ。「いつまで同じような句を作っているの!」誰よりも彼女の心を理解していた先生の一言に一瞬ボカンとする。十五年前のことである。

パソコンに二ホンと打てば二本です

江島谷勝弘

イエスノーふわり包みこむ日本語

能勢 良子

日本の夏を見にゆく甲子園

奥澤洋次郎

「日本」を外から見つめる目を感じる句である。外国では日本の位置さえ知らない人もある。誘われて「夫に聞いてから」と答えると手厳しく批判される。だから甲子園球場で、青い目の留学生たちが阪神のユニフォームを着こみ風船を飛ばして応援している姿に遭遇した時は感激したことである。甲子園から見ると日本の未来は明るい。

どうしても粘れなかつたにらめっこ

川上 大輪

かあさんはこんなことではあきらめぬ

上田ひとみ

キツチンの匂いに客が帰らない

岩田 明子

「粘る」から善い顔の見えてくる三句である。

靴を揃えたのは多分下の娘だ

山田 耕治

早逝の母に守られ生きてきた

美馬りゅうこ

天国で待つてくれる人ばかり

森中恵美子

「多分」となたも一人で入らねばならぬ天の門。きっと先輩たちが天国句会を開いている。もう少しこの世で修行しますか。

わが家物語

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

和歌山三幸川柳会

楠見 章子報

縦社会誰か埋もれていませんか
縦書きの母の便りのさよふなら
縦穴に住んで古代を偲びたい
古文書の縦書きロマン掻き立てる
気をつけの姿勢でお待ちしています
三面記事縦横寄せる事ばかり
王様の命令裸でも通る
縦長の画布にすっきり花菖蒲
まだまだ使える逆立ちの化粧水
桃拾う童話の川は澄んでいる
青空を拾い集めて絵本編む
ゴミ拾い人のモラルに問いかける
友情を拾い集めたボランティア
恍惚の母が拾っている昔
脇役を演じひとつの灯を拾う

ダン吉 宏枝 昇 倫子 知香 ひろ子 章子 美枝子 あき子 次根 みつ江 明子 義雄 富香 菜摘

一歩ずつ誤字を拾って海に出る
雑学を拾い鞆に詰めている
人生の余白宝のように抱く
琴線に触れる言葉を抱きしめる
ご近所の声がわたしの宝です
痛かった母の小言がいま宝
欲深く追えば宝も逃げて行く
これが母白い小さい骨拾う
欲を出し目先の宝取り逃がす
お互いに宝と出会う日の見合い
生かされて今が宝と慈しむ
足跡をふたり紡いできた宝
鈍行で行く旅こそが宝もの
焼き物へ命はぐくむ釉薬
花菖蒲笑いころげた遠い日よ
さわやかな笑顔でかくす胸の傷
さわやかになれる貴方に逢いにゆく
思い切り五月の風を深呼吸
草原に寝て白雲を追いかける
爽やかな汗掻きましたボランティア

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

宏夫 絹子 碧 和子 当代 起世子 准一 俣子 千鶴 みね 純子 昭枝 よしこ 敏照 理恵 智三 美羽 日出男 幹子 保州

雨あがり虹を探して右左
六月の雨はいのちのファンファーレ
黒い雨二度と降らすなこの地球
病室に届くナースの笑い声
ズカズカと日本海までミサイルを
ズカズカと年金削るのやめて欲し
ズカズカとノックもしない無二の友
ズカズカと地球荒しているヒト科
鮮やかな衣装で闇を包み込む
鮮やかな弁解妻にしゃっば脱ぐ
鮮やかな航空ショーの飛行雲
鮮やかに買物袋盗るカラス
テニスする孫鮮やかな逆転劇
お手のもの借金取りを巻くぐらい
鮮やかなタケシの魅せる色づかい
鮮やかな夕陽が吸い込んだ空母
鮮血がいつか飛びだす玉手箱
禁煙に舵をきったが難しい
プロボーズ難攻不落やっこさ
双六のあがりに落し穴がある
難儀でも元氣を出して老い払う
古い日をめくれば有った女難の日
難民の脅える眼には立ちすくむ
難民の受入れ口が狭くなる
災難は身近か大風呂敷たたむ
難しいことをおっしゃる和尚さん

公恵 岳人 野蒜 貴恵 悦子 妻司 節子 紀美恵 重忠 義人 龍枝 道子 玲坊 照彦 重利 清 美美子 紀の治 瑞子 泰山 美知江 芳光 宣子 石花菜

難しい話はない垣根越し
難問を抱え茶の間にテント張る

美ツ千
三津子

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

本山を訪ねて詫びる不信心
懐かしいタンゴの曲で迎えられ
誰か押すエレベーターの無言劇
剥製が忠告しての温暖化
もうちよいと生きて五輪を見届ける
指一本押すと最後の核ボタン
花好きにちよいと優しい薔薇の刺
同伴のための遺影は美しく
おばあちゃんちよいとそこまでブチ家出
ちよいと一杯ひっかけて行く焼鳥屋
物置は僕の大事な博物館
匂いまでおんなじ僕の影法師
我が家にも初夏が訪ねるサクランボ
亡友の絵を殿堂で見る懐かしさ
鬼の霍乱遠花火として聞く夫婦
久々に恩師訪ねる古稀の足
太陽を僕の同伴者にします
許すこと決めて会いたい人がいる
同伴者は妻でなかったある日の場
縁の無い博物館に住む魔物
掃除機にちよいと退いてと邪魔にされ
鬼の面ちよいと触った好奇心
訪ねると笑顔変わらぬ車椅子

則彦
小とみ
ひとし
風来坊
慕情
井蛙
吹喜
京子
重虎
洋子
洋子
隆樹
花匠
夕香
柳子
龍馬
規子
初枝
一呑
きよし
吞舟
真由美

博物館で栄華と飢餓が擦れちがう
花の水とり替えちよいと一人旅
出たとこ勝負アドリブで恙なし
筋トレのつもりで今朝も雪を掻く
湯豆腐の角も気になる自棄酒で
美しい童話の中にある涙
つり革を両手でつかむ紳士たち
トッピングひとつで変わる冷奴
雪おろし件決って遠出する
ただならぬボビーの曲線グラマラス

芳生
美鈴
のぶよし
ふさゑ
花峯
氏加子
一花
霜石
つとむ
和香子

南大阪川柳会

津守 柳伸報

高野山人さんの多いこと
青天のへきれき快拳藤井君
アホバカハゲーびつくりさせる怒鳴り声
飛び乗った車輛周りみな女
大事件口を揃えて普通の子
透け透けは老人だつて歓迎だ
コラスにあの娘の透けた声拾う
CTも情念までは透視せぬ
君恋う手血管透けるジュリエット
立ち直るきつかけくれたすけた空
ボーイソプラノチャベルの窓も透きとおる
赤ちゃんの笑顔に透ける福の神
クリオネの胸のハートが魅了する
透き通る子の目大人を信じ切る
品格を疑う野次を聞く議會

あや子
弘子
克己
たもつ
修
恭昌
歌留多
裕子
更紗
ばっは
国和
東風
楓楽
ひさ乃

中居善信選

あまりにも個性が強い赤いバラ
チャップリンの靴の先までチャップリン
ひとりでは淋しくひとり持て余す
ビーナツかチーズがあれば充分だ
九条はやはり素顔のままだいい
君は知るまい白飯のありがたさ
沈黙が返事だつたと気がついた
大変な運命背負うハンダの子
息をしているか寝てるか覗かれる
不揃いのじゃがいもに似た家族です

昭紀
明子
智三
勝弘
いさお
螢柳
くにこ
楓花
たぬ
みつ江

佳句地十選 (8月号から)

金子 美千代 選

やり直す釘を勢いよく抜いた
休耕田御先祖様に土下座する
背負うものいつばい持っている元氣
こたわつた末にシンブルイズベスト
時どきは逆流します私の血
ちよこちよこと試されてるな神様に
深刻だから軽く言うしかないのです
蚊取線香田舎を田舎らしくする
懐が淋しくなると知恵が出る
人生は揺れてこそだとやじろべえ

盛桜
彰夫
稠民
好
美智代
敦子
大鯨
理恵
哲男
彦

品格を問われる言葉著づかい

品格に勝るものなし東大寺

品格を問うトランプもブーチンも

品格は問わず野良着の似合う父

辛うじて品格止めているお髭

ハーバード出ても品格ない議員

品格を感じさせない厚化粧

品格を高めるために無口です

清濁を詰めて品格重くなる

どうしても手ぬるい蟻独りっ子

二軍の湯熱いぬるいは君次第

六月の雨粒重たくてぬるい

ぬるま湯にどつぷりですぬ大臣は

ぬるいのはイヤ熱いか冷たいかが好き

一人居へサポート嬉し近所の手

片隅で拍手だけならしてやれる

やれ息子俺踏み台にかけ上れ

復興を支える地道なボランティア

城川柳会(大阪)

近藤

のんびりと生きて明日も風任せ

底抜けに明るい君に救われる

割り勘と聞こえはよいが下戸は損

フルートを奏で友呼ぶ立葵

終活の思ひは巡る夜の底

面に水懲りぬ失言繰り返す

栄子

柳伸

いさお

志華子

あさ子

直子

和雄

武臣

弘委智

ルイ子

篤

昌紀

一步

勝弘

シマ子

郁夫

俊雄

祥昭

正報

義昭

武彦

勝弘

博

和夫

弘委智

見つけたぞ文箱の底にラブレター

待つことを覚えた独棄がよく回る

断捨離はしても心底晒さない

豆絞り祭り支える地域の輪

親のエゴ犠牲にすまい子の未来

役所から要支援2のお墨付き

気まぐれの散歩で拾ういい話

支え合う誰かが力抜いている

大物はトカゲのしっぽ切った数

毎朝の気分を決まる髪の色

ふるりははつと心の解けるとこ

余りもの犠牲で食べる母は海馬

気まぐれに買った鉢植え良く育つ

胸裂ける想いで咽う枯れすすき

寿命延び老後の資金底をつき

気どらない話術が人を魅了する

寄り添うて金婚という金字塔

丹田の底で燃やしている野心

健診が終ったあとはまずビール

どん底で分かった人の裏表

父さんの汗を知ってる靴の底

なんでも言わずに運が消えてゆく

夏雲の向こうに行った兄二人

底辺で見付けた種に咲く余生

母さんの杖になろうとする介護

老いてこそ眼にも杖にもなる夫婦

高志

たもつ

寛昭

野鶴

杵香

肇

一步

郁夫

俊雄

千恵子

志華子

あさ子

榮子

直樹

節子

克己

満作

集一

実

星雨

朝子

修

縣笹

堅坊

満洲夫

賢子

返事する言葉が出ない堅い椅子

底知れぬ十四歳の可能性

仁王様足を支える邪気が居る

川柳塔なら

大久保眞澄報

限界を越えて我慢が笑い出す

男なら我慢切られても振られても

ボケッてここは我慢と声がする

拉致家族依然我慢くらべの連続で

春を待つ花芯吹雪にじつと耐え

につこりの我慢が道を切り開く

我慢した丸さになった対茶碗

国政の怒り限界都議選に

我慢ばかり怒り忘れた日本人

我慢さえ楽しみなんで暗示でしょ

物足りて我慢知らない現代っ子

謝らぬ我慢くらべにお腹すく

天と地の怒りへ人が試される

我慢した褒美にもらう笑い皺

昭和一桁老母は我慢をするばかり

まず食べろ口癖だった母だった

夕陽背にジャズを食べる港町

余生のため活字しつかり食べてます

お供えが足りぬか仏瘦せて見え

悪口も食べておさめる腹の中

キノコでも綺麗なものは食べちゃダメ

求芽

いさお

正

理恵

千代美

國治

おたか

のぶよし

柁子

辰雄

紀雄

準策

和夫

美代子

ふりこ

將文

良一

恭昌

ダン吉

完次

よう子

薫

崇明

優

酒五合飲んだ後から人を食う
しあわせだ美味しいのです朝ごはん
飽食の国にも飢餓の子等の影
淡墨のさらさらリズム草書の句
清流に若鮎踊る赤目滝
さらさらと流せぬままの胸の内
さらさら小雪子の雪だるま土まじり
初デート雨に降られた青春譜
何時までも他人デートはお蕎麦屋で
当て馬を入れて四人でするデート
初デートビビッとときてもケチじゃ嫌
虹色のデート少女を脱皮する
蜚舞う宿であなとしのび逢う
また逢えるようにガラスの靴を履く

盛 隆
勝 弘
文 聡
比呂志
賛 郎
惠美子
敬 子
萌 子
堅 坊
貫 一
すみれ
美智子
富 子
眞 澄

富 柳 会(大阪) 関 よしみ報

ノックせずノートを開くこのスリル
笛にあわせ一歩踏み出すタイミング
精進を重ね重ねて半夏生
ゆらゆらと泳いでいたい天の川
共通の看護日誌を妹と
ノートには暗号並ぶ青春譜
人間をまっすぐ生きて白い骨
笙の音が古き良き世を呼び戻す
口笛を吹けばこよなく青い空
縦よこに結ぶ男の義理と義理

常 男
伸 雄
田 鶴子
慶 子
よりこ
澄 子
清 子
朋 子
壽 峰
高 鷲

おいしいね毒が溶け出す甘い水
風を切り憎らしいほど好敵手
警笛が頻り命を急かしてる
黄昏のリボン揺蕩う夏帽子
ペーミンントにゆれる明日の風の色
東北でやつと浮かれる笛太鼓
ブランコでまだ指切りを待っている
温泉の思い思いに浮く羅漢
いちまいの辞令とゆれていた昔
糞虫の糸一本に風が吹く
ゆらゆらの灯籠沖へ沖へ盆
原野には紆余曲折の影法師

京都塔の会 山田 葉子報

また借りてそれでも行くか競馬場
ダイエツトそれでもケーキ目が泳ぐ
超過勤務それでも家計のためならば
悠々自適それでも狙う遺産分け
平気な顔の陰に隠れている無念
新人さん辞めないように教えてる
こっそりともらって返事書きにくい
わたくしが一つ食べると割り切れる
遺書だけは妻に内緒にできません
きついなあベルト縮んだわけでなし
首縮め小言素通りさせている
てふてふと書いても説める戦中派
ちよっかいを出せば逆襲する火蟻

隆 充
武 人
惠 恵
か こ
あかり
一 文
奏 子
寿 之
ア キ
よしみ
欣 之
森 子
五月
ふりこ
肇
公 子
昭
弥 生
篤 子
知 栄
泰 夫
福 子
哲 子
則 彦
正 彦

恋人が欲しいほしいと虫が鳴く
弁解を縮んだ服のせいにする
酒はアカン死ぬぞと医者に言われたが
電話より虫の知らせで早く知り
罵詈雑言こっそり録音され離党
こっそりと孫にお金を渡してる
明日はあるそれでも今日は貴重な日
錆びた脳それでも当てに生き延びる
誇大広告それでもサブリ気にかかる
全没の句座丸虫になっている
強気な人の老いて縮むを見てしまう
熱帯夜それでも風呂は熱い好き
酔客も首をすくめる通り雨
少し身を縮め優先席に居る
おとしの柱の傷を見上げてる
不透明なあしたそれでも生きるべし
泣き虫だったあの空だけが知っている
不発弾捨てにこっそり旅に出る

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

通帳のゼロが少ないのは嫌い
植えるだけ植えたら後は天任せ
閻魔さまあなたに怯む事はない
嫌なのに年々似ます母の癖
一目惚れ偶然出会い共に生き
北の核怯む世界を笑うよう
がさついた指で偶然掴むワラ

盛 桜
小 鹿
孔 美子
綾 子
ゆり子
茶 子
すみれ

ど根性植え付けられた婿養子

重忠

好き嫌いしてたら餓死だ戦中派

照彦

嫌などこ似た子にいつも詫びている

鈴

桃太郎植えてアイコになった苗

実満

嫌いだなんて口には出せぬ老いの坂

和子

未来ある二人は決して怯まない

草文

避ける程嫌いな人とよく出会う

裕

一瞬怯む空をつんぎく妙な音

富久江

偶然の出会いとなり好きな人

かおる

老いという言葉で怯む自尊心

みさ子

かわりを持ちたくないが縁がある

京

偶然に奥の手ひとつ残ってた

満

人は皆十人十色好き嫌い

妻子

怯まずに生きて行けるか年金で

恒

貧乏神に怯んでいたら飯食えぬ

振作

茶柱の偶然信じ切る齡

敏夫

我慢すりゃいつかは鯛も釣れるだろ

蟹郎

川柳大阪

珠生報

山崎

俊雄

子に負けて親の威厳が崩れ落つ

勝弘

吸いすぎて飲みすぎて喋りすぎです

一步

ガラガラ客に熱唱手を抜かず

芳香

ガラガラ家に姑一人居る

珠生

ガラガラで空き巣仕事やり易く

美世子

マンション増子供わくわく部屋不足

和

ガラガラを引いてバリ迄行つて来た

和

ボール蹴るだけに観衆湧く平和

(矢)五月

防衛省オウンゴールで謝罪なし

紀雄

蹴らなかつた父の我慢を思い知る

わこ

隠してもお国訛りで知れる里

福貴子

のんびりと車掌も語るローカル線

まつお

語部の民話の訛には風情

朝子

歳月が里の訛を消してゆく

万紗子

屋台酒おでんに溶ける国訛り

克己

ふる里をもたぬ私の大阪弁

志津子

東北の訛りねぶたのエッセンス

かよこ

里訛り弾み乙女の同期会

賢子

塾やめて将棋教室通う孫

いさお

恋心内緒で掛けた彼の椅子

満知子

ジタバタとせず新茶をいただこう

司

夏バテの防止やつぱり昼寝する

照月

竹原川柳会(広島)

太虚報

風止まり今がチャンスと写す花

慶子

母さんの入院家族強くなる

輝恵

内気で損チャンス掴む手が遅れ

幸子

婚活のチャンス明るくさわやかに

宣之

命ふわふわ何のチャンスか手のひらに

笑子

田畑の亡父に信じるものがある

千代美

信じ切る母の願いの百度石

寛

明日ありと信じ生きてる現在地

弘子

信頼と尊敬美智子妃に学ぶ

淑子

信じてるだけで幸福だった頃

蘭幸

指切りを信じてうすい紅を引く

鬼焼

最後の最後信じてくれたのは母

敬子

私は好き近道よりも回り道

半徳

ジョギングは私一人の道らしい

現代

でこぼこ道を歩いた靴を替えてやる

比呂子

道草をしながら心地よい余生

昭紀

趣味の道老後の役に立ちました

節生

手探りで母の歩んだ道に出る

栄香

長靴でパシヤパシヤ雨が好き三歳

歩美

鯉のぼり昔大空泳いでた

栄恵

六十年幸せでしたか聞きそびれ

初音

ひとり言いいえ亡夫との会話です

厚子

胸張れる強さ母として妻として

史子

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

宏之報

散歩道そろそろ田植え始まりそう

美草

ともかくも金婚式の祝い年

美智子

今朝もまた見ずにおられぬ西瓜畑

美佐子

煩惱のままのお経も味がある

宏之

母の日に祖母になる子のプレゼント

あやこ

茄子浅く漬けて至福の夏ごはん

千代

賑やかな故人に合わぬ家族葬

美穂

空梅雨に面目躍如晴れ男

汪

わたくしの推進力に五七五

紀の治

いないから黙って聞くよ孫自慢

令位子

恋文を仰山呑んだ赤ボスト

決断は車返上八十路坂

父の骨抱いて愉快だ青い空

紅さして欲しいものもなくなったとき

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粋報

メンツ対メンツで溝が埋まらない

本腰はしばし遊んでからにする

一緒くたになってやさしい色になる

外海に北の面子が飛んで来る

大繁昌代官様の肝入りで

人間が地球一番よく汚す

握り拳に男のメンツ閉じこめる

三回の飯は本腰入れて食う

肝入りがひと色足して噂する

肝入りの論吉一泊して帰る

正義にも邪魔する敵が現われる

意表つく意見肝入れしたくなり

盃を伏せて話を聴いている

雀来て案山子のメンツ丸潰れ

兄さんの面上座は空けておき

連勝で将棋人氣に火がついた

地雷屋が義足屋もするバチ当たり

人生で一番泣いて舞台立つ

森友も加計も根元は一緒くた

いっしょくたの方が責任軽く済む

恵子

治代

雨奇

日枝子

洋々

一瑤

八千代

敏夫

究作

清信

無限

彰夫

嘉子

振作

楓花

美恵子

稲佐嶽

秋月

茶人

昌鼓

龍彦

隆浩

金祥

とも

一緒くたに笑って泣いて三世代

赤ちゃんはメンツ無いから愛らしい

余命知る母の介護は本腰に

本腰で孫に将棋を教える

肝入りで送った子だが予選落ち

総理夫人肝入りちよつと度が過ぎた

肝入りと言われ抜き差しならぬ羽目

本腰を入れて頑張る用がない

本腰を入れて頑張るのは三日

紫陽花とうちの母さん七変化

一つ家に人もベットも同居する

一緒くたされんようにと胸に札

メンツなど捨てたら楽に生きられる

どん底にいるから後は上るだけ

本腰を入れて絶滅種を守る

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

頑張るぞ花を咲かせて土になる

青空が大丈夫だと包み込む

ガラケーで良しとスマホに触れもせず

あの山を目指そう星とハグ出来る

目だたないよう生きるのも自己主張

帯きつく結んで背なの骨にする

母さんのご飯いつでも五つ星

帰り道一番星が付いてくる

一人芝居梯子掛けたり外したり

立ち位置の自覚花として知り尽くし

幸子

天翔

茂子

穀

蟹郎

凱柳

妻

鍾旭

回春子

勲章

節子

善平

みゆき

真理子

一粋

君代

葵

和之

三郎

章子

信子

海希

かず子

美恵子

菜美

とめどなくきれいな嘘をつく童話

冤罪が悲しい星を生みました

野の花同士だ競うことはない

ウォーキングはほがらかな顔をして

雑魚だつて帯になつたら強くなる

嘘をまた包む五体の傷だらけ

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

風船に餓持持たせ切つた糸

風船に座つていつもダイエツト

風船も値踏みしている着地場所

置き薬みやげなつかし紙風船

風船をたくさん持つて飛びたいな

お米研ぐこの幸せというリズム

福の神玄関先で足踏みしてる

朝の蜘蛛そおつと外に出してやる

久しぶり会つた友から福感じ

病院へ通う元氣を持つて福

過疎カソという名のバスが村守る

村はずれ地蔵に一期一会の手

村じゅうで駄をされた昭和の子

帰る度空き家はいつか駐車場

村おこし努力の顔に生きる知恵

コンビニは村一番の繁華街

もういいかい村上春樹まあだだよ

村人消えてテーマパークになった村

出雲弁微妙に違うムラ社会

みどり

陽子

真帆

安子

游子

公弘

とも子

俊子

久絵

邦代

ひすい

畔

ゆき

弘充

ひふみ

注湖

たけし

桂子

雪代

静枝

富美

堂太

紗季

みちを

柳歩

迷信を的にダーツの矢を投げる
迷信と知りつつ祈るばばの胸
迷信にふり回される祝い事

迷信のすべてを海に捨ててに行く
なんとなく鰻と梅はやめました
迷信が科学の前にひれふした
うやむやな迷信だけが胃に残る
あじさい寺鬼の面など脱ぎましょう
当分はやさしい球でご挨拶
闇の中優しく絡む深夜便
優しさに飢えて男が丸くなる

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

芳山 幸子 涼子 瑞人 輝山 哲子 美智子 德利 寿代 草庵

当てられてしろもどろで立ちつくす
ネクタイに男のセンス試される
安全をしつかりさせて旅カバン
慌てない非常扉に手をそつと
口ごもる世代の違う知恵袋
貴方とのしあわせの数足してみる

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

まみ子 週行 三樹夫 雅美 美千代 かつ子

零細に産休とれる訳も無い
脚腰の老いがセツトで押し寄せる
じいばあ主張学校六日制
初盆へ亡妻をしたって客の足
姑は旅嫁は大きく羽根のばす

高明 蜂朗 四郎 節子 實子

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

遺憾のコトバひとつで怒り躲される
遺憾などと気付かないから困る
世の中は遺憾いかんで過ぎてゆく
枯草も土になるまで添いとげる
後悔はしない自分で決めたから
あいつには負けたくないと言う決意
決意したことはやり切る外はない
毒舌を投げるあなたと添いとげる
決意した言葉に二言ありません
宣誓を声高らかに主張する
決意した日から居坐る肝っ玉

あきこ 克子 晴美 京子 知香 保州 准一 ちづこ ほか 徑子 富美子 寿子 紀子 まさみ ダン吉 大輪 小雪 紀久子 夕胡 よしこ なる子

森の小人演じた遠い日に還る
針の穴ほどの視野から見る世間
小さいが母の背中には誇らしい
小さいなあ海に向かって思うこと
病室に小さな嘘が溜まりだす
うろついているだけなのに笑われる
明かされたなぜに眠れぬ夜が続く
同じように作ってるのに母の味
なぜかなあ老母の寝顔にほつと
なぜ言えぬただ一言のありがとう

ブラザ川柳(大阪)

梶原 弘光報

蚊帳おとし海に見たててはしゃぐ子等
マラリアから子供を救う蚊帳送る

政夫 正子

蚊帳の中アース片手に立ち回り
世話焼きのおばちゃんいつも口達者
焼くもんですか熨斗付けるからさあどうぞ
すき焼きが牛井になる一人もん
白寿まで焼かれまいぞと筋トレを
お届けに悲鳴あげてる黒いネコ
バスがない返納できぬ過疎の村
職人の頑固路線も廃線化
大文字かがり火燃える京の盆
愛燦燦も悲しいものね生きることに
相老いの可愛い妻と生かされて

八尾市民川柳会(大阪) 中園 清報

井戸水でさらさら洗う新生姜
休みなく脈打つ命ありがとう
私の財布年中早です
心打つ芭蕉一茶の句は不滅
青い風が好きで日本に來たツバメ
休めとも稼げともいう蟬時雨
気怠くてトトロの森にいたい午後
不滅だと驕る心にある破滅
人間を休んで今日はとどになる
日々好日美学七彩不滅な日
目覚しの今日一日を開ける音
同じ疵持つ君だからウツと泣け
とことんの早が甘くする西瓜
赤上げて白も上げたら角取れた

弘光 和代 淳司 五月 悦夫 修 清乃 一彌 久美子 克三 文子 千里 清 紀雄 朋子 耀一 常男 慶子 壽峰 惠 森子 寿之 あかり 欣之 かこ

窓開けて介護へ明日の風を入れ

高 鷲

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

桂 子

九州の笑顔を待つて見るテレビ

黒 兎

ロマン秘め邪馬台国は九州よ

堅 坊

片意地は肥後もつこすの父の血か

勝

宇宙には一番近い種子島

黒 兎

地が裂けた水が暴れた肥後筑後

奈津子

逃げ場ない観覧車乗り愛を告げ

美佐子

エレベーターブザーを鳴らし乗車拒否

久 子

夏風に乗って明日へ離陸する

柳 童

間に合った終電に乗り醒める酔い

純 子

バー・バーディ調子に乗って池にボチャ

一 弥

乗り鉄じゃないが18切符通

守 啓

偉人伝なるほどなあと読んで寝る

長 一

部長職偉くなり過ぎ孤独な日

順 子

偉人伝読んで悟ったウチは無理

信 男

星になった友よ私が見えますか

春 代

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

脳のないクラゲは悩む事がない

まつお

憲法を学んで欲しい安倍総理

一文

高熱に母は寝ないで水割る

ちづる

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

蕉 子

対テロ法森友加計も酒のアテ

鉄にもあった痛みを知る心

失敗を肥やしに明日を考える
今だからこそ政治のことを考える
席題を考えるなら今でしょう
子どもらの未来を開くクエスチョン
考えが浮かばぬロダンなつてみる
考えず右にならえて生きてきた
氷河期が過ぎると離婚現われる
組板に乗って考え決めた腹
考えが似そうで似ない老夫婦
がんこ者人の考え否定する
かちわりで猛暑凌いだ甲子園
バーテンのカクテル夢を生む氷
考えているのだベン先のイレギュラー
人弱し論吉にぶれる思考力
温暖化の中で氷河を抱く日本
今思う親の説法宝物
食べて寝てそして少しは考える
朝起きて夜の献立考える
考えがくるくる回る風見鶏
憲法が生きて平和が守られる
斜交いに物考える天邪鬼
考えた末ルビのいる子の名前
考え中いつか居眠り昼下り
欠氷夏一番のおもてなし

若 芽

仲間だと思ふ鉄がふと狂う
レトルトを切つて済ませる独り者
過去はかこカードに録入れました
蚤の心臓つまみ出したピンセット
住み馴れた家が流れていく恐怖
母ちゃんの小言はいつも馴れている
使い馴れた頃に傷んでくる道具
淋しきにも馴れて一人の晩御飯
二年目のつばめは孫に馴れている
貧乏に馴れ不況には強いです
安売りに馴れて定価があほらしい
馴れ初めはハンカチ借りた涙の日
職人の馴れた手先が生むボルト
軒にもいつしか馴れてルビー婚
ちやほやに馴れて潮目を見失う
馴れ初めは銀恋唄いダンスして
恋人に今日も会えない深海魚
馴れ過ぎて驕る政治に青嵐
ベッドから行つてつらしい気をつけて
三回忌もう慣れたかと聞く他人
鈴つける役とも知らず引き受ける
やさしさへ役目を果たすビアンニシモ
年重ねやつてきましたなだめ役
雑巾の役目ピンピンコロリかも
役割があつて元気で生きられる
関白を退位しました三日目に
役好きへ役を与えてこき使う

雅 美
佳 子
俣 子
唯 教
玄 也
ひろ子
和 夫
舞 夢
澄 空
敏 治
世紀子
みつ江
誠 一
時 雄
八 千 代
としお
願
扶美代
五 月
みつこ
玲 子
ゆみ子
憲 彦
ヨシ枝

案ずるなポストがちゃんと仕事する (歳)

夕日さす海をながめてひとひねり

愉快犯憂さばらしとは酷過ぎる

夕映えに植田の早苗翡翠色

夕闇に牛蛙鳴く日陰沼

湯の街でウィッグ外し一人旅

ユダヤ国憂きことばかり火の嵐

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

農業に追われて消えたオニヤンマ

シロクマが北極追われ浮遊物

一年の四季に追われて八十路すぎ

追われたらさつさと冥土行くつもり

一人ではとてもできない鬼ごっこ

片づけに追われる日々や震災後

けらけらと笑うな僕は本気だぞ

高笑い出来る間はまだ元氣

あの父がけらけら笑うのは落語

テレビ観てけらけら笑う一人居て

けらけらと入れ歯押さえてテレビ観る

けらけらと笑われているのも知らず

年頃の孫に転がる丸い箸

いっぱしの男だ我欲なら負けぬ

いっぱしの十四歳は将棋王

いっぱしの学者尾鰭つけたがる

ガキ大将今いっぱしの親になり

もう一杯もう半分と屋台酒

鉢巻の屋台の兄ちゃん十八歳

屋台骨病氣するなど気を配る

八十になってもわが家の屋台骨

屋台骨いつもぐらぐら日本危機

死神がじわじわ追って来る予感

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

一言で倍返返ってくる小言

倍になる甘い電話にゆれている

灰色の決着もある生きる知恵

もう少し先読まねばと眼鏡変え

わたくしが私ラウ誕生日

我がままなヒト科地球が倍返し

倍倍で儲かりますと言う詐欺師

愛も倍特別室で二人きり

有り難う言えは喜び倍になる

花活けて待つよろこびを倍にする

友の味届く地方紙にだかれて

急ぐまいきつとあの世も混んでいる

欠点を見つけ三倍好きになる

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

笑ったり泣いたり人の裏おもて

目が笑う腹は二人を許してる

首相の笑い何か企む悪の顔

石花菜

萩江

風露

醉芙蓉

智恵子

照彦

房子

いわゑ

千代

蕉子

たもつ

昌紀

光久

加お里

美智代

扶美代

智恵子

希久子

楓楽

美代子

信二

雄太

母さんが笑わなくなる夏休み

ひまわりは妻が笑った顔に見え

笑いもあくびもうつし合って夫婦

ユーモアを飛ばし毎日暮したい

思い出し独り笑えば猫がなく

孫の笑い三千世界を凌駕する

顔忘れともかく笑顔返しとく

孫達が笑いとおもちゃ持ち帰る

百歳の母まん中に祝ひ膳

レシビには書けない母の匙加減

近道はないひたすら顔の汗を拭く

恋しくてひたすら思い募らせる

ひたすらに生きた証しの四季の詩

若かったひたすらだった子育て期

ひたすらに走ってわたしを脱皮する

匙加減微妙に違う母の味

常識が微妙に違う真由子様

長柳会(大阪)

辻村

ヒ口報

私から元氣が抜けて揺らぐ日日

焼いた世話両家が恨む離婚沙汰

古民家の雨漏れる程人住まず

地黒には日焼けがいつも薄化粧

大らかに歳を忘れて過ごす日々

日本を背負う気概の青田稲

ほとばしる蛇口へ子等の夏休み

六点

一步

みつこ

真

絹子

育代

喜代子

一文

よしみ

いさお

扶美代

光男

キーキー

フジ子

瑠美子

雅枝

まつお

ヒ口

光弘

美子

たかし

洋二

弘美

和子

脇に居ていつも寄り添う影法師

制限食隣の皿が恨めしい

元氣出せにんにく皿に盛ってある

おもしろくやがて悲しい空財布

酒飲むとおもしろい程に人変わる

一〇〇円の皿積み上げる回る寿司

写真もう増やさず脳へ焼きつける

迷句聞き乾いた脳が笑い出す

泣き笑い生きてゆくのは面白い

手を焼いた息子もらつてくれた嫁

命乞いするときだけは手を合わす

子ども散る夕焼けこやけ母の声

手の上で踊る亭主に虫がつき

よく笑いよく食べ喋る婆さんズ

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

失恋の傷に焼酎ぶっかける

銀行印幾つも有ってややこしい

喧嘩するだから続いた五十年

銀行の低利に負けぬ太っ腹

終演の旅瑞風と決めておく

ほとほと雨垂れ石に穴あける

脛に傷持った二人で仲がいい

鯛の傷裏側にして並べとく

命令の待てにほとほとだれ落ち

他人の傷痛いと思う人になれ

瑞風の客に手を振る尻尾振る

預金高振り込め賊に無視をされ

盆に涙ほとほと通夜の酒

点滴がゆっくり落ちる生きている

触れないで下さい傷がまだ疼く

遠い日の友の傷あと詫びて撫で

まだ元氣銀行預金内緒です

点滴のほとほと命つなぐ音

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

閉ざされた心を開く母の愛

夢に出る母はくるくるよく動く

かあさんも子供になれば分かること

合鍵を持たず門扉を閉ざされる

大変だまたおくさまを怒らせた

手をつなぐそしてそのあと明日のこと

澄んだ目だそっとじつくり待てばいい

親の敷くレール背いた日の懺悔

原点に戻ると明日が見えてくる

飛べそうな風が吹くの待っている

母さんに似たわたくしを好きになる

ブライドを捨てた男の丸裸

鎮魂の珊瑚の海はパラダイス

住みなれた我家にもある非常口

ケーキ出た胃の門限は九時なのよ

わたくしの乗る飛行機は落ちません

敏子

公子

振作

彰夫

真理子

美恵子

菖子

節子

千代

哲男

利子

光子

勝弘

わこ

ひとみ

キヨミ

野鶴

千賀子

哲子

光久

一徳

紀華

みよし

章子

夫婦げんか窓を閉ざしてゴング鳴る

閉ざされた国境鶴が渡つてく

趣味の道閉ざせば私呆け進む

守秘義務を盾に役人口閉ざす

もう少し口を閉ざせば良い姑

戸の閉まる家多くなり核家族

良いところばかり見てると良い嫁だ

咲いたわよ心配してた姫サクラ

樂觀がいつも行動抜けすぎ

思い出の虫干しをする梅雨晴れ間

もう一度バブルになれば取り戻す

思い出をたっぷり食べて生きてます

マドラーでかきまぜている遠い日々

いつの日か思い出すべて空となる

なんとかなる今の自分を受け入れる

大胆に決めてしまったもう退けぬ

存えて時に手にする歎異抄

薄ものをさらりと脱いで蟬の飛ぶ

時として鏡の中に父を見る

川柳花の輪(大阪)

岡本

塩砂糖あなたのためと減らされる

父の日に聞かれて困る欲しい物

妻ほしい日々の感謝とは言葉

愚痴聞いて欲しくて親の墓参り

欲しいのは議員秘書への思い遣り

弘子

美津子

浩司

盛夫

洋次郎

和宏

順子

正彦

宏造

正和

武臣

恭子

伯備

能子

いわゑ

秋果

靖夫

邦男

薫報

やすの

勇太朗

風

敬子

正太郎

ぬるま湯の恋に低温やけどする
 古い二人阿吽の暮らし悠々わす
 将棋盤欲しい言う子に期待かけ
 足りないもの欲しがる自分もうやめる
 ビルの谷間ぬるい空気の吹きだまり
 じんわりとぬるい言葉が染みわたる
 冤罪が解き放たれてぬるむ風

薫 泰子
 みちる
 あや乃
 昭好
 笑子
 亜成

翠洋会(大阪)

佐々木満作

老いひとり仏と対話しています
 対策はバッチリの筈あとは運
 対として生きる人間みてる蟻
 本田さん前進求めメキシコへ
 前進の勇氣スマホがくれました
 一歩一歩ひたすら前に登山靴
 老人は常に前向き後がない
 しっかりと前に進めと影が押す
 悲喜こもごも平凡の美も有るのです
 美しく燃えてみたいな枯落葉
 老いて尚輝く人の美しさ
 美しい文字の手紙の心よむ
 美談だけ一人歩きたし悩み
 過去は過去今日のやる気と手を結ぶ
 試歩の杖妻の涙がついてくる
 朝顔は濃むらさきです母の彩
 千里眼そのうち彼も白内障

恭昌
 げんえい
 理恵
 紀子
 希久子
 良子
 善之
 浩二
 すみ子
 日の出
 舞夢
 照子
 蕉子
 富子
 弘子
 志華子
 和夫

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

TPOオバチャンは声潜めない
 ホットする深夜の電話間違いで
 コトコトと朝餉の支度リズムカル
 生き抜いた誇りの歌が蝉しぐれ
 ライバルにきっちり読まれていた秘策
 きっちりと蓋をしてから捨てました
 きっちりと紐を着て暑さ寄せつけぬ

眞澄
 公平
 満作
 集一
 捷也
 楓楽

下り坂人の心がよく見える
 鼻につく世辞にやけるお人好し
 目に青葉弱気の虫を日々退治
 眠れない夜にはそっとヘッセなど
 きゅうりの口ぐせ曲がること嫌
 抜けに抜け残りからは髪惜しむ
 濁流のニュースの町や友無事か
 仲直り握手する手もうれしそう
 ゴミの日をメールで知らす旅の妻
 椅子置いて老いに優しいマーケツト
 納豆もオクラも食べて医者通い
 真央ちゃんのプログはらはら涙する
 サークスではらはら見る指隙間
 街の中貸農園がもっている
 登山家の妻はらはら下山待つ
 発表をらはら待つてゐる方は親
 はらはらとさせられるこの人が居る

千賀子
 浩司
 和宏
 ひとみ
 和郎
 道子
 正彦
 としお
 利子
 武臣
 美恵子
 芳江
 邦子
 照子
 美穂
 洋次郎

風に舞う花びら浴びて千鳥足
 野菜農家もとを糺せば商社マン
 二三日待つてとトマト青い尻
 絶賛を浴びた時から下り坂

保雄
 じろう
 ひろし
 光久

川柳さんだ(兵庫)

田中 童子報

さよならへ回数券が余ります
 おまわりさん笑顔で切符持つてくる
 阿弥陀さまのぞみとひかりどれに乗る
 片道のチュチュトレインで恋さがし
 あの世行き切符は要らぬフリーパス
 協力も過ぎればチョッとお節介
 洗濯はパパが上手と褒めるママ
 父が田に後追う母の仲の良さ
 お若いと乗せられ幹事やつてます
 家事育児二人で越えていい老後
 命がけ救援隊の背が光る
 お留守番かわりばんこにしています
 ボランティア小さな力買つて出る
 微力でも協力しあい汗流す
 タイガース浴びさせたいねビール掛け
 シヤワーした浴衣の君に一目惚れ
 野球部がたつぷり夕日浴びている
 浴びる程呑みエントツのように吸う
 称賛を浴びずに散った平和賞
 夕焼けを味方にしようテクニク

千代美
 博
 えい子
 厚子
 ひろ介
 徹
 利子
 優子
 義徳
 恭子
 一子
 ひとみ
 祐康
 順子
 隆
 雄太郎
 野薫
 花門
 キヨミ
 千津子

タップダンスシューズが躍る軽やかに

ます酒の表面張力笑みこぼれ

打ち水と床の飾りの和の心

流し目で男手玉にとる女

裏表で異なる欄間を見せる技

忘れたい事はリアルに思い出す

友釣りの鉤鮮やかに貼掛ける

名工の彫った如來に後光さす

嬉しい悲鳴あがる西瓜の初ちぎり

誤作動が続くわたしの脳回路

サンブルの桃が客足止めさせる

赤ちゃんの笑い避難所灯が点る

僕のより妻のビールがちと高い

うたかたをさらりと生きて恋もして

はけるのととぼけるのとでは大違い

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

手鏡にぐちをこぼしてみる男

二階から調子はずれの裕次郎

五十年妻は手の内明かさない

不自由を知って自由の有難味

八起き目の涙冷凍保存する

思い込め素人「第九」大合唱

よくしゃべる口につけた一万歩計

国民の怒りが堰を越えて行く

月冷たくて孤独天心に温まる

オクターブあげ朝がくる大家族

涼子

宣子

つな子

好文

雅尚

修平

靖鬼

加代子

迪

光久

美籠

健彦

正和

ヨシエ

哲男

恵子報

博泉

尚代

高鷺

壽峰

仁

信子

薫

鈍甲

亜成

麗

素人は駄目だと言われ断られ

ひとつ屋根二つの部屋にたてこもり

鼻歌で掃除洗濯サークル日

起きぬけの水一杯で調子みる

昼の月ハーゲンタツ食べたから

妻の名が寂しく戻り来る木霊

ゆっくりと我が身の丈で生きてきた

ラブコールに毎度冷たいジャンボくじ

肩書が消えて冷たい風を知る

冷房の風のお蔭で甦る

一人芝居飽きて仲間の輪に戻る

冷たい手温い手どれも私の手

夏本番老軀干物になりかねぬ

絶好調朝の鏡と笑みかわす

風向きで調子聞こえる盆踊り

鉛筆を持つと心の窓が開く

外出が生きてく糧と翔んでいる

割り切って冷たい人になっている

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

真つ直ぐな話に咳をしてみましょう

念仏が長いな痺れ耐えている

片意地を張って生きてく一本気

朝顔が真つ直ぐ登る夢を見た

真つ直ぐに帰るとバチが当たりそう

田舎には火星に行ける空がある

瀬戸際でヒアリ撲滅難しい

ルイ子

一

かすみ

秀雄

祥昭

武彦

忠央

修

弘一

高志

博

郁夫

洋

弘委智

あさ子

朝子

賢子

恵子

博子

熊四郎

七七

モナカ

紀の治

楓花

照彦

破れた靴でジェルソミーナが歩いてる

たむろする苦手をゴキブリホイホイ

普通に生きるこれが意外と難しい

真つ直ぐだった昔の君はもういない

難しい話は酒を飲んでから

川柳は奥が深くて難しい

通勤を鴨の一家に待たされる

傷ついて膏藥貼った町の道

ええ歳を絡げて道に迷つとる

天国へ続く道からずり落ちる

君の葬式だ煙がまつすぐに

方向音痴失敗談は星の数

真つ直ぐはとても眩しく手をかざす

道端のどんな草にも花は咲く

妻苦手いつもなにかを言われてる

森友も加計も辿るは同じ道

難題を背負って生きた半世紀

Ｉターン夫のロマン妻我慢

亡母のように真つすぐ咲いた百日草

海の日韓国ゴミ拾い

勲章はないけど俺は真つ直ぐだ

直球勝負消防車救急車

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

背番号変えて転機に巡りあう

サヨナラ打もみくちやになる背番号

乗り越して知らない町の夜の景

くにこ

芳山

みちを

美ツ千

正人

けいこ

蟹郎

雄大

石花菜

麦青

小鹿

幸子

昭子

富隆

大鯨

正男

道唱

規雄

コスモス

鈴野

重忠

完司

昌代報

穩夫

のぶ久

シマ子

胸底にある千人針の記憶

五欲まだ持つて悟りにほど遠い

人生のプラス寄り道回り道

誕生日順にならないあの世旅

こんな人そっくり君に返します

遠い日の記憶の中の焼夷弾

言いたい事言えずその夜のなぐり書き

人生の切狂言の幕が開く

一生を捧げる妻の核禁止

一言が胸に刺さって長い夜

もう二度とあなたはごめん言われとる

教養も寝相と舐には無縁

挽き取ったボジション示す背番号

安倍総理みどりの薔薇が邪魔になる

仰ぎ見る星降る夜のファンタジー

不夜城は熾烈な戦棒グラフ

通夜の席香煙済まし果たす義理

暁を抱いて劉さん天国へ

死の一步前に呼び戻されて今

ボールペン手に終章のタクト振る

今メタボ戦後のひもじさ取り戻し

ナンバリングされております迷子札

10代の活躍日本弾みだす

お迎え火焚いた母へ今わたし

静かな夜に心の鎧脱いで行く

今夜また飲み屋に揃う評論家

災いは自分と気付かない総理

浩子 堅坊 寿之 冬のト たもつ いさお 俊雄 朝子 康信 ひろ子 秀夫 哲男 福貴子 秀夫 壽峰 高鷲 茶助 みつ江 喜八郎 万作 知栄 照子 ばっは 廣子 ひろ介 栄子

けたけたと都会の夜の泣き笑い
七十五の線引き意地で生きてやる
成績順に並ばされ小さくなる
都民ファースト自民と違い言えますか
毎日を僕が主役で歩んでる
豊中もくせい川柳会(大阪)初代正彦
金槌が社会の海で立ち泳ぎ
靴の紐を本気にさせる下り坂
あと戻りしても拾えぬ夢の花
脳味噌に泡があるのか物忘れ
元氣そう その一言でもう元氣
清流が濁流になる雨の量
遠泳のあとの飴湯と君の笑み
小競り合いすれば儚き波の泡
世の中は泳いで渡るにや広すぎる
遅かった相手の好意に気付くのが
傷心をやさしく包むオムライス
スカートをはく老人は少数派
あと少し紅ぬる文で抜けるウツ
半分は使わぬ物と住んでいる
解決が遅くいらいだつ拉致家族
蟬しぐれ心をすすぐ石清水
遅くなつても顔は出します義理の通夜
身も心も易きに流れ黄昏れる
シャボン玉屋根まで飛んで虹となる
シャボン玉いくつも揚げて終戦忌

克己 直子 久美子 鈍甲 ダン吉 歌留多 公子 求芽 見清 多美子 健二 真理子 時彦 武彦 健三 美佐子 美津子 きらり 雅美 (若)玲子 久子 遠野 美智代 黒兎 満子

祇園祭今はテレビで見えるばかり
転ばぬように姑に合わせている歩巾
泡消えて諸行無常の現実
亀虫を踏まぬようにと足泳ぐ
もたもたしてる方が時には寛げる
清く正しく目指し浮き世に転がされ
青い頃たいやきくんと泳いだヨ
七坂を越えたわたしの自由律
葉子 美龍 宏子 千鶴子 則彦 正彦 ヨシエ

第11回 岡山県川柳大会

日時 9月9日(土) 午前11時30分投句締切

場所 笠岡市保険センター (ギヤラクシーホール)

参加料 2,000円

課題と選者 (各題2句)

「夕焼け」 牧野 ねえね 選

「骨」 遠藤 哲平 選

「剣」 前田 一石 選

「流れ星」 徳長 怜子 選

「恋文」 小島 蘭幸 選

当日席題(1句) 北川 拓治 選

問合せ

〒714-0007 笠岡市山口1777

高木 勇三 宛

電話 090-8606-5856

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 戻る・仕事・アウト・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	16日(土) 12時開場 第67回 富田林市市民川柳大会	富田林すばるホール2階 小ホール 詳細は川柳塔誌8月号118ページ参照
川 柳 塔 みちのく	16日(土) 17時締切 巡る・のびのび・期限	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」Tel.0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 Tel.0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	17日(日) 12時開場 強気・高級・裁く・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 どっぶり・タイヤ・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時50分締切 ストック・のぼる・半ば・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	19日(火) 13時30分締切 結果・したたる・ズルズル 手探り・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狹間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	20日(水) 14時締切 印象吟・頭(互選)・使う 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)Tel.06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 塔 すみよし	23日(土) 13時開場 地図・打つ・そろそろ	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	23日(土) 12時30分開場 昔・聞く・楽	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 琴・練る・ほっこり	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷺」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日) 13時30分開場 自由吟・プレッシャー・美肌 戒める	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	25日(月) 18時開場 蓋・濃い・つつく・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	25日(月) 14時締切 抱く・まばゆい・音	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	2 日(土) 14時締切 貼る・ウイルス・太い・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉 吉 川 柳 会	2 日(土) 14時締切 名指し・三・ほんわか	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま っ 社 え 吟	2 日(土) 12時30分開場 謎・苦手・星・山	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川 柳 会	8 日(金) 14時締切 倒す・母・運命・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 な ら	8 日(金) 14時締切 勝つ・やれやれ・沈黙	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
川柳大阪	9 日(土) 14時締切 鳴る・民宿・マナー	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
岸 和 田 川 柳 会	9 日(土) 12時30分締切 線・浴びる・偶然・ギャグ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
六 甲 川 柳 会	9 日(土) 14時締切 かすめる・箸(はし)・地図 自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(土) 14時10分締切 兼 題 = 通販・道づれ・らしい 課題吟 = 井物	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
川 柳 塔 打 吹	9 日(土) 13時30分締切 月・通う・カリカリ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	10 日(日) 14時締切 球根・よっしゃ・稼ぐ・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0075 八尾市洪川町5-2-7 中園 清
西宮北口 川 柳 会	11 日(月) 14時締切 礼儀・長引く・とくに 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	12 日(火) 13時30分締切 右・添う・べったり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール「蛭池」 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 さ か い	12 日(火) 14時締切 (※毎月第2火曜に変わりました) 集める・うきうき・折句=はなみ	※毎月の会場が変わりました 東洋ビルディング4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

おろす

★「第10回松江市川柳大会」は、7月30日松江市テルサで開催。同人成績。

松江市文化協会 会長賞

そうりゅう会発行。
▽訂正とお詫び△
○7月号、P7上段2行目、作者の申し出により削除。

新同人紹介

★「第12回岩国市民川柳大会2017」は、シン

フォニア岩国で80名の参加者で開催。同人成績。

岩国市長賞 坂本 加代

神の手を盗んで磨く研

修員

★「第18回生駒市民川柳大会」は、7月15日生駒

市コミュニティセンターで186名の参加者で開催。

同人成績。

秀句 川端 一步

次の世もボクを生んで

よお母さん

★「第48回奈良新聞川柳大会」は、7月23日奈良

県文化会館で開催。同人成績。

秀句 渡辺 富子

そして今喝采浴びて幕

合同句集。B6判57頁。

森山 文切

へらへらと私は不特定多数

天位 小島 蘭幸

宇宙から持って生まれたきたセス

★「第35回夜市川柳大会」は、7月31日開催。同人成績。

天位 齋藤さくら

ほのぼのと笑える一句めざして

上大会選者・兼題の確定 定例確認事項。
②平成28年度会計収支報 次回 9月7日(火)AM10時
告④高野山合祀対象者⑤

○8月号、P16上段14行目。元号の変る明けに期待する→元号の変る夜明けに期待する。

▽新誌友紹介△

松江市 梅瀬 道夫

紹介者 石橋 芳山

安来市 原 徳利

紹介者 石橋 芳山

生駒市 藤原 暁子

紹介者 木本 朱夏

千葉市 廣瀬 善麿

紹介者 木本 朱夏

羽曳野市 齋藤 裕子

紹介者 吉村久仁雄

加古川市 吉村めぐみ

紹介者 山口 光久

泉大津市 磯野不二夫

常任理事会 8月7日(金)

①役員人事について②第6回春の川柳塔まつり誌

▽出 版△

○第九集「そうりゅう会」

合同句集。B6判57頁。

宇賀史郎

—比呂志・理恵・富子・勝弘推薦

田中ゆみ子

—遠野・蕉子・勝弘推薦

永田紀恵

—美籠・宏造推薦

藤田雪菜

—美籠・宏造推薦

兵庫県川柳祭 in 神戸

日 時 12月16日(日) 10時開場
場 所 兵庫県民会館 TEL078-321-2131
神戸市中央区下山手通4-16-3

事前投句の部(共選)

「港」 赤井 花城 小山 紀乃
「飲む」 平山 繁夫 辰巳 和子
「菓子」 山口 光久 中野 晶平

※各題1句、未発表作品に限る 大会への
出欠記入のこと

応募方法 所定の事前投句用紙(コピー可)使用

応募料 1000円(定額小為替)

締切 9月10日(木) 当日消印有効

応募先 〒651-0092 神戸市中央区生田町2-5-16-103
ふあす川柳社内 兵庫県川柳祭神戸市実行委員会

当日の部(各題2句)

「変身」 長島 敏子 選
「ドキドキ」 佐野 博美 選
「開く」 田中 章子 選
「ジャズ」 生田 頼夫 選
「靴」 濱邊稲佐嶽 選
「明るい」 黒嶋 海童 選
「劇」 村上 水筆 選

出句締切 12時 なお出句は大会参加者に限る

出句料 1000円

問合せ先 事務局

村上 水筆 TEL 078-381-5844

第51回 東大阪市文化祭参加 第44回 市民川柳大会

日 時 9月30日(土)

出句締切 14時

会 場 東大阪市立社会教育センター 3階
電話06-6789-4100

近鉄布施駅下車

北口三井住友銀行北へ5分

宿 題 (各題2句・出席者のみ)

「ずばずば」 江島谷勝弘 選
「傾く」 荻野 浩子 選
「神」 栃尾 奏子 選
「誘う」 松本 柁子 選
「惜しい」 山野 寿之 選
「しぐさ」 竹村 穩夫 選

※昼食はお済ませの上お越し下さい。

会 費 1500円(各題秀句賞・発表誌呈)

懇親宴 3000円

問合せ先 穂山 常男 電話072-923-7421

主 催 東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

文化祭吹田市民川柳大会

日 時 9月24日(日) 午前10時開場
各題2句連記 投句締切 11時

場 所 吹田市立勤労者会館

(吹田市昭和町12-1)

JR吹田駅より5分

2番館イオンビルすぐ

梅田より北千里行きで約15分

宿 題 「迷う」 松宮きらり 選
「連想吟」 中村 恵 選
「焦る」 中岡千代美 選
「競う」 大堀 正明 選
「握る」 田中 螢柳 選
「腹のたつこと」

片岡 加代 選

会 費 1500円(秀吟賞・軽食・大会誌呈)

主 催 吹田市 吹田川柳会

第31回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月10日(日) 12時30分開場

ところ 堺市立梅文化会館

3階第一講座室

(泉北高速鉄道 梅・美木多駅
より3分)

川柳大会 (15:30~17:00)

宿 題 「煽る」 荻野 浩子 選
「肩」 笹倉 良一 選
「さすが」 米澤 俣子 選
「タフ」 長江 時子 選
「刃物」 久保田半蔵門 選
「譲れないこと」

赤松ますみ 選
(読み込み不可)

欠席投句拝辞

参加料 1000円(発表誌呈)

主 催 堺市文化団体連絡協議会
堺川柳協会

編集後記

★少年の幾人いても毯一
つ 薫風

★某月某日、二賞選考委員が事務所に集合。蘭幸主幹は午前五時半に竹原出発、新幹線で。完司理事長も五時半で鳥取をスタート。連日三十五度の大坂。日本一お忙しいと言っても過言ではない主幹と理事長である。お二方の川柳愛にはただただ頭が下がる。選考結果は十月号発表。

★某月某日、森中恵美子句碑祭り句会に参加。当日は生憎の雨であったが約30名、池田市託明寺に集う。衡立に黒い色紙を三枚配したような珍しい形の句碑。「天に川ありよるこびは稀にくる」「茶のはなし女のはなし雪になる」「ため息の中に多彩な男棲む」の三句が流麗な筆で刻まれている。

★某月某日、第六回卑呼の里女流川柳大会に参加。佐賀県吉野ヶ里に九州各県から集ったのは六五名。例年のごとく番傘の真島清弘・美智子さん宅、人呼んで「ホテル・真島」のお世話になる。吉野ヶ里公園駅で私を迎えてくれた真島久美子さんの第一声は「お帰りなさい!」だった。

★真島さん一家のホスピタリティーには胸が熱くなる。また女流大会に向けての意気込みは半端ではない。大会が終ったその夜から発表誌のパソコン打ちが始まる。翌日には清弘さんが校正。なんと一週間あまりで発表誌が参加者の手元に届く。川柳に対する愛がなければできないことだろう。★「句会燦燦」の鑑賞者は岩崎真里子さんから弘津秋の子さんに代わりました。秋の子さんは川柳グループ「宙」に所属。

ひとこと

私の健康法

私は九十二になります。どうしてそんなに元気なのかよく尋ねられますが、ごく当たり前のことで、1によく食べる。2によく眠る。3は体をよく動かす。生まれつきのイヤシンボの上、料理をすることが大好き。熱が三十九度くらいあっても食欲は落ちない。早寝早起き。

四年前に心筋梗塞を患ってから、は特に昼寝をよくする。ヨガ歴三十年。現在は老人向けヨガに月

二回参加。日課は朝夕お湯で眼を洗う、掌をお椀にして耳を優しく撫でてやる、湯船で腰脛をよく揉む、寝る前にお腹を百回撫でる。川柳に行かぬ日は氏神様へ往復三千歩ほど、朝早いうちに歩く。日中は好きな手芸事に閑を潰して、ごく普通の事をしている。付け加えれば長寿の家系です。従姉は百歳、九十八歳まで生き、現在長姉は百五歳。三姉は百歳で昨年暮れに亡くなり、四姉も九十三歳で逝きました。(宮崎シマ子)

今後を期待されている若手のお一人です。眞里子さんには長年真摯なご鑑賞を頂き、本当に有り難うございました。

★誌面の都合で「句集の森」はお休みです。

(朱夏)

●今年の流行語大賞の候補のかなり上位にランクされるところの「付度」。明鏡国語辞典によると「他人の気持ちをおしはかること」とある。その場の雰囲気を読み、

察することは、対人関係において欠かせない気配りだと思ふ。

●その付度のイメージを変えたのが「森友学園」問題。本来の語義から逸

脱し「おもねる、へつらう」の意味で使われだしている。付度≡疑惑というのは、言葉のともとも

も意味を大きく歪めて居るのではないだろうか。

●さて「察せられる」と「察しられる」ではどちらが正しい使い方だろ

うか?実はどちらも正解で、「し」より「せ」が優勢。次は「おざなり」と「なのおざり」も混同して使われている。例えば「おざなりな謝罪の言葉。×なのおざりな謝罪の言葉。×災害対策がおざりにされた。」

「おざなり」はその場限りでいいかげん、「なおざり」は無視してほっとくこと・・・

(まつお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

」発表(11月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いたします。

檸檬抄投句用紙

「応援」(9月15日締切)

11月号発表

齊尾くにこ 選 — 共選 — 山口 光久 選

B A

--	--

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

B A

--	--

地名

市都
県道
府
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

11月号発表（9月15日締切）

川柳塔（8句） 小島蘭幸選
水煙抄（8句） 川上大輪選
愛染帖（2句） 新家完司選
檸檬抄「応援」（2句） 山口光久共選
（斉尾くにこ）
インスピレーションナビ（2句） 大西泰世選
一路集（2句） 「文」 米田恭昌選
「ナ」 小谷小雪選
「ビ」 居谷真理子担当
初歩教室 「ほんやり」（3句）

12月号
檸檬抄「頼る」
一路集「強気」「笛」
初歩教室「ヒント」

本社9月句会

とき 9月7日（木） 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06-6772-1441
おはなし「編集の現場から」
席題「味」
兼題「リレー」
「こっそり」
「濃い」
「淡い」
会費 1000円
投句料 500円（切手可）
（各題2句以内）
小島蘭幸選 片山かずお選 油谷克己選 栃尾奏子選 初代正彦選 水野黒兔選 木本朱夏選

本社10月句会は第23回川柳塔まつりとして、10月7日（土）に開催します。
（表紙裏を参照して下さい。）

川柳塔WEB句会のご案内

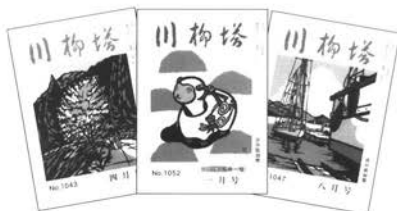
課題「伸びる」 間瀬田紋章 共選
古今堂蕉子
締切 9月20日 発表 9月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話（06）六七七九三〇番
振替 〇〇九八〇一四 一五八四七九番
定価 八百円（送料83円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇一七年（平成二十九年）九月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

新家完司・著



川柳の理論と実践

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。お支払いは
到着後で結構です。

実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
326頁。送料+消費税=2,000円 FAX 0858-52-2449